

Fate/after Redoing

藤城水無

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少年の願望によってほんの少し歪んだある種の平行世界――

第5次聖杯戦争において、冬木の聖杯は破壊されていた。

しかしそれにも関わらずに、場所を変えて行われた第6次聖杯戦争。

第三次聖杯戦争において縁のあった一族を利用し、時計塔を欺き……

彼らは――アインツベルンは諦めることが出来なかった。

だからこそ、死力を尽くした。

そして――だからこそ、その失敗が許せなかった。認められなかった。――直視できなかった。

アインツベルンの妄執はもはや歯止めが利かなくなった。

遠坂、マキリによる一種の自爆攻撃である、聖杯戦争の情報開示にも怯まずに彼らは暴走を続ける。

無数の亜種聖杯戦争が勃発している中、聖杯戦争は開催され――

陰で行われる魔術協会の妨害の中、聖杯を破壊する。

そんなサイクルの中、世代は交代する。

第9次聖杯戦争――。

開催場所は日本、盆地の端に位置し四方を山に囲まれた地方都市、杉羽良市。

あらゆるものを授けられた遠坂の魔術師は語り部の一人として、これに参加する。

――一人の英雄が産声を上げる。

目次

一章 『■■■■』の後継者

0	世界の果て	1
1	参加表明	7
2	里帰り 冬木	16
3	里帰り(未然)	24
4	再会	32
	からもっと早く帰ってやれよ	32
5	召喚	48
	よりも回想のシーンの方が長い件	48
6	召喚直後	61
	満天の星空の下で	61
7	旅支度・前編	73
	長い間家を空けるなら、確認が必	73
	要な事。	73
8	旅支度・後編	95
	別に、ゆっくりしていても構わ	95
	んのだろうか？	95
9	11月30日/0日目	110
	六番目の主従は舞台	110
	に上がる	110
10	12月1日/未明①	126
	白銀の流星、紅蓮の大	126
	鎗	126
11	12月1日/未明②	142
	招かれるは、幕を切る	142
	者	142
	間章 裏報告書 その1	142
	マテリアル	173
	ライダー編	173
	マテリアル	180
	アーチャー編	180
	提出	186
	時計塔現代魔術科(中略) 某所にて	186

二章 当たり前の非日常で | s t a i n e d g l a s s |

1 騎目 0 追憶 | 足音 | 194

1 騎目 1 微調整 | 気付いた事、気付けなかった

事 | 204

一章 『■■■■■■■■■■』の後継者

0 世界の果て——紅い背中

初めに、一人の少年の祈りがあった。

その願いは叶い、過去を——否、一つの伝説を歪めた。

本来の歴史に影響を与えないはずの『相違点』。

だが、それは当たり前でもある。

神話、伝説、伝承、逸話——。それらの大部分は、所詮偽

りに過ぎないのだから。

神秘と幻想の向こう側の世界の存在——又は世界そのもの——

——は境界のこちら側に当たる我々の世界に干渉できない。

それが当たり前——のはずだった。

その『相違点』は多くの因果を少しずつ歪め、——結果的に一人の青年の人生を、運命を変えた。

——そして、今も……………。

◇ ◇ ◇ ◇

■■■■

■■■■■■■■■■ (■■■■■■■■■■、19■■■■年■■■■月■■■■日—20■■■■年■■■■

■■■■月■■■■日)は■■■■■■■■■■出身の思想家、傭兵、旅人、魔術師(?)、

『■■■■■■■■■■』。■■■■■■■■■■戦争の終結に大きく貢献、調印式の中で

暗殺された。

原因不明の大災害、■■■■■■■■■■の生存者。このことをきっかけに■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■になることを志した、後に彼はそう語っている。

た。

正直、私も限界だったのだ。――罪の意識、という物の重さに耐えるのは。

その代わりとしては余りにも厚顔だが、私で最後にして欲しい。

――私の死を持って、この戦争を清算してはくれないだろうか。

この後、如何なる復讐、報復をしないように。

互いに憎みあわないように。

互いに手を取り合えるように。

もし、些細な間違いがあつても、私の死を引き換えに大目に見てはもらえないだろうか。

そして、私の死を惜しんでくれる人が居るのならば――

焦土を思わせるような赤土。

宇宙に存在する無数の歯車。

――そして、墓標と見紛う無限の剣。

燃え尽きた風が身をなでる。

体から水分を奪われる感覚。

その感覚は限りない現実性を感じさせる。

しかしながら、俺はそれに対して――

――ああ、これは夢なのか――

――そう結論付ける。

――同じ夢なら何度も見たことがある。

奇妙なことに思えるが、この何処か物悲し気な心象風景は何度も訪れたことがある。

一人の男の終着点――より正確に述べるのならば人生そのものを具現した、ある種の集大成。

――この世界を夢見るということ、それは過程そのものを体験することに等しい。

――だが、目の前の紅い背中が話しかけてくる――正確

には独り言めく——のは初めてだった。

余りに長い独白。否、生前の男の遺言、と言うには少し長すぎる末期の言葉。その語り直し。

それはまるで——。

紅い背中が振り返る。鷹の瞳と視線が交わる。

男は口を開き何かを語るが、自分の耳に入っていない。

——いや、それは違う。

正確には、——会話が頭に入っていない。

何時の間にか目の前にいた青年が手を差し出してくる。

それに対して俺は、手をさし伸ばすことで応える。

——恐怖は感じない。

——それどころか、胸裏に湧くのは溢れんばかりの興奮と

喜び。そして、——。

二人の手先が触れ合う——。

目覚めは唐突だった。

懐かしい夢——正確には、その続き（のようなもの）も含めたものの——を見た。

一瞬毎に薄れていくはずの其れは、不思議と、確かな温かさを伴って、思い起こすことが出来、自然と銘記される。

その少年は左腕の腕時計を確認し、安堵と諦観の混ざったため息をつく。

やれやれ、と小さくつぶやいてから、手早く身支度をし、宛がわれた部屋の扉を開く。

右手に存在する3画の赤い紋様に隠蔽の魔術が掛かっていることを確認してから、彼が恩師だと思っている一人の“教授”に会うため

に、少年は——遠坂 晶^{あきつ}は待ち合わせ場所に向かつて足を進めだす。



数多くの戦いがあった。

それらのうち、大多数のものには特筆すべきことは無い。

当たり前のことかもしれないが、職業や人生に貴賤が無いように、どの戦争、紛争、内乱、テロ、それらに満たない細かな諍いに大した違いはない。まあ、どちらの妄言、暴論、戯言も綺麗事に過ぎないという点まで似ているのは皮肉以外の何事でもないが。

さて、前振りで散々と、特筆すべきことは無い、と語ったがここで語るは一つの戦争である。

何故、と聞かれたら、語る理由があるから、という面白みの欠片もない返答しかできないだろう。

その“理由”とやらは登場人物——マスターと呼ばれる魔術師とサーヴァントと呼ばれる英霊。

我々の世界に紛れ込んでいる、神秘と幻想を操る魔術師。そして、ある程度力が制限されているとはいえ、彼らが神秘と幻想の世界の向こう側から呼び出した、超常の存在である英霊。

そんな、文字通り常識知らずな存在が、それ以外の特筆すべきことが無い、ありふれた戦争を行う。

その名は聖杯戦争。

勝利条件は聖杯——万能の釜を求めての、殺し合い。

そこにあるのは、栄光と失墜、美醜、虚構の善悪、信念と建前……。

ありふれた戦争と、登場人物しか違わない其れでは当たり前に溢れるだろう。

それとも——。

偽物の世界で、精巧な贋作たちは自らを真作である、と主張し、追い求める。

その定義も曖昧なまま――。

「前置きが長すぎる。没にするぞ」

「ちよっ……。報告書に没があるとか聞いてませんよ教授」

1 参加表明

目の前の男を見つめる。

母親譲りの碧眼と少し伸ばした黒髪と父親譲りの恵まれた体格。年齢は少年と青年の重なる、いわゆる青春とやらを謳歌する時期の19。

シンプルなデザインシャツとズボンの上に、特徴的な紅いロングコート。

——名は遠坂晶。とおさか あきら

時計塔の門をくぐってから二年目にして、祭位フェスの階位を与えられてしまっている、年若き魔術師である。

時計塔の魔術師には階位が存在する。

詳細は省くが、その中に『祭位』という特殊な階位が存在する。

この階位は魔術師の実力ではなく、特殊な技術や実績などの特別に考慮しなくてはならない事情を持ったものに与えられる名誉階級。

……例えば私のように、講師として卓越しているなどという事情が有れば、魔術師としての実力が低くても貰えたりする。

そして、目線を合わせている男の場合は遠坂という家系、父親の存在、卓越しすぎた戦闘能力——謂わば聖杯戦争との因果、だろう。

そう、遠坂晶という男は今回の聖杯戦争に——否、これから起こる聖杯戦争すべてに関わらざるを得ないのだ——。

私はこの男、いやコイツを呼び出した理由はただ一つ。

それを理解しているのか、表情は緊張を隠し切れず、互いに緊張したまま。

意を決したのか、そいつは口を開く。

「強面の男に見つめられる趣味はないので、美少女に生まれ変わってください」

「いつも通りとはいえ、やはり心配した私が阿呆だったか……」



やだなあ教授、いつも通りの冗談じゃないですか。え、私の心配を返せ？またまた、ドアをノックして、返事を聞いてから突入したら、教授と見つめ合う羽目になった私の身にもなってくださいよ。あれ？教授。俺の頭に手を伸ばして何をもってイタイイタイイタタタタ——

普段から面倒を見てもらっている教授の私室。

指定された時間よりほんの少し早めにて入ったら暴行——詳しくはアイアンクロー——を受けています。

面白い冗談も言ったのに。ナゼダロウ。

というか、痛い。結構痛い。

「ギブっ、ギブですっ教授ッ。もうそろそろ……限界です……！」

少し早めに来ちやったことなら謝罪しますからっつ」

「そこではない、この阿呆が」

「っつっ——。やめてください、ロンドンビックベ………」

あ」

——悲鳴が響く。

閑話休題。

「さて、お前を呼んだ理由だが——」

分かっているよな、と言いたげな視線に、俺は隠蔽の魔術を解いた右手の甲を見せ——

「——これですよね」

——と返す。

「そうか——」「ため息」——やはりお前に、令呪れいじゆが宿っていたのか」

「はい、その通りなんです教授」

令呪が宿った時期を説明し、聖杯戦争のルールは全て頭に入ってお

り、尚且つそれが信用できないということ述べる。

こちらが話している間、教授は相打ちを打つぐらいで自分から積極的に話すことは無かった。

そのことに僅かな疑問を抱きながらも話し続ける。

——その疑問の答えを確信しつつある中、次の言葉を紡ぎだす。

「——本当は、時計塔の誰にも言わないで、勝手に参加するつもりだったんですよ」

「そうだろうな。だからこそ、今のうちにお前を呼んでおいた。お前が乗る予定の飛行機のフライトの前日の、しかも早朝に呼んだならば、お前は必ず来るだろうからな」

「まあ、そうですね。昨日以前なら隠れるでしょうし、今日の昼以降なら逃げる、と言うか空港の側のホテルに泊まるつもりなので、時計塔にはいなかったでしょう」

「そう、機会は今日しかないのだ。——まったく、お前の飛行機とホテルの予約を把握するのは簡単だったが、余計な手間ではあった」

——やっぱり、目の前の男——第4次聖杯戦争から生還した魔術師は——
元マスター

「——やっぱり教授は、俺を聖杯戦争に参加させたくなかったんですよ」

「——ああ、そうだ」

口を噤む。

目の前に佇む初老の域に足を踏み入れつつある男が今まで以上に大きく見える。

其れは彼が今までに体験し、背負ってきた物の重みがそう感じさせるのか。それとも——。

「——少し前までは、令呪が宿るのはお前の母親だと思っていたのだがな」

重い口が開く。

聖杯戦争において大切な要素は大きく3つ。

一つは聖杯そのもの。

次に、これを設置する優秀な霊脈を持つ土地。

この二つを満たすことで、英霊を呼び寄せる——召喚することが可能になる。

——しかし、もう一つ必要な要素がある。

それは、令呪。

これこそ、魔術師と英霊マスタースーヴァントの関係に必要な絶対の楔。

そして礼呪こそが、アインツベルンにとっては唯一用意できない要素ピース。最大の関門であった。

仕方なくアインツベルンは、冬木で行われた聖杯戦争のシステムを流用することにした。

その結果、冬木の聖杯戦争のルールの一つ——

——令呪は御三家——アインツベルン、間桐、そして遠坂の魔術師に優先されて配布される——

——が働き、第6次聖杯戦争において、二陣営に分かれたの大規模な、いわば聖杯大戦において、急造の若干劣化した聖杯を用いて新たに7騎の英霊サーヴァントを召喚する際に判明し……これを放置した。

未知の参加者が減ることを良しとしたのか、それとも単純に聖杯戦争を復讐の舞台にしたかったのか——。

その理由はアインツベルンではない者には判らない。

——いや、アインツベルンにも、——第6次聖杯戦争において八代目当主ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンを失ったアインツベルンにも判らないかもしれない。

「——俺もそう思っていました」

正直、疑問なのだ。

今更だが、という前置きの後「聖杯戦争に参加したいかのか」という問いに、「勿論参加したいです」と即答する。

だが、その思いは母さんの方が強い。

魔術師としての実力も同じく。直接戦闘なら話は変わるが――

「そこからか」

「……………はい、教授」

全く、溜め息をつきながら続ける。

「間違えるな。私が疑問に思ったのは、魔術師としての実力とか聖杯に託す願いの強さとかではない。単純に順番の問題だ。」

間桐に魔術師は一人しかいない。ならば、遠坂よりもはやく令呪が宿るだろう。

しかし、間桐の魔術師は聖杯戦争に参加する理由を失っている。

今までの聖杯戦争では、間桐の令呪をお前の父親に転写していたが、第八次聖杯戦争の直後に死亡している以上、この手は使えない。ならば、この令呪をどうするのか」

「そうか――」

それを聞いたとき、なぜ令呪が俺に与えられたのかが解った。

「……そうか成程。そう……………だったのか」

正直それは、少し考える時間が欲しくなるような理由^{ワケ}だった。

「――落ち着いたか」

「……………はい。もう大丈夫です」

結局、落ち着くまでに5分ほど掛かってしまった。

――その間、教授は静かに俺を見ていた。

「――やっぱり、思うんですけど教授」

「ん？どうした」

「ホントになんで、美少女じゃないんですか」

「くっ、ははは。もう大丈夫そうだな」

……………一瞬で強がりを見抜かれた。

……………穴があつたら入りたい。

「――さて、やはりお前は今回の聖杯戦争に参加するのだな」

「はい。俺は第9次聖杯戦争に参加します」

「そうか」教授は、まるで遠くを切るかのようになり、まるで昔を思い出すかのようになり、一瞬目を閉じてから「行ってこい。遠坂晶」アキラ トオサカ

「Eです。Eをつけて、アキラEトオサカって呼んでください」

「フツそうだったな。アキラEトオサカ」

「鼻で笑わないでください、教授がいつもE世を付けろって言うのは、似ているようで違うんですよ」

「オイ。この大馬鹿者」

「しまっ——ちよっ、怒らないでくださいよっ！と言うかです、俺にとっては——」

この時、とっさだったので、何を言ったのかはよく覚えてはいない。ただ、覚えているのは、教授が一瞬面食らったかのような顔をした後、「そうか」と小さく呟いたことだけだった。



参加するのはいいとして、触媒はどうする？

用意してません。でも、大丈夫です。

よし、正解だ。

聖杯戦争に参加する理由は？

単純に『解析』と『構築』したいからです。

冬木故郷に帰るのは2年ぶりか？

……4年ぶりです。

うん？……ああ、そうだったな。

教授はいいんですか？

……墓参りは先日行った。

……申し訳ありませんでした。

現在判明している参加者の情報だが……

教えてくださいっ。

よし。先ずはだな

……もう、私からは特にしゃべることはないな。
—— ああ、確かにそうですね、教授。じゃあ、そろそろ……。
—— 行ってこい、アキラ・E・リットオサカ遠坂晶。そして、必ず帰ってこい。
—— 了解です教授。
—— じゃあ、行ってきます。帰ってくるまでに……
—— 最後まで、言わんでいいわっ。
……バタン。

「行ったか」

妙に静けさを感じられる部屋に一人。

思いだされるのは、あの騒がしい教え子。

いや、年年齢を考えれば許容範囲なのかもしれない……。否定できな
ないのが辛い。

—— そもそも、俺にとっては貴方こそがエルメロイなんですよ。貴方が二世を付ける理由については敢えて知らないようにしているけど、俺がミドルネームにEを付ける理由とは近くても遠いはずでしょう——

不意に、あの馬鹿者がとっさに口走った世迷い事が脳裏に浮かぶ。

「フン」鼻息を鳴らす。

あの馬鹿者に言われなくても分かっている。

だが、“これ”は私が——いや、この場合は“僕”が、と称するべきかもしれないが——背負わなくてはならないものであり、背負うべきものであり、——そして何より、背負うと決めたものである。

あの馬鹿者の言を返すようで少し気に食わないが、II世を付けろ、と私が言うのと、Eを付けろ、とあの馬鹿者が言うのは似ているようで違うのだ。——当たり前前の事だが、人が背負っているものはそれぞれ異なるのだから。

物理的、魔術的に鍵を掛けられた戸棚の奥には、とある聖遺物縁が櫛の木のケースが嚴重に保管してある。

何時の間にかそれを手に取っていたことに気付いた彼は、先ほどまでと同じように自然に鍵を開く。

そこに仕舞われているのは——微かな焦げ跡があり、擦り切れたような朱い布。

ただの布切れだが、彼にとっては、彼の知る全ての物よりも価値が重いものだ。

目を閉じる、思い起こされるのは、豪放磊落な大男と駆け抜けた、とある“戦争”。短い間の事だったが、彼にとっては千秋にも感じらるだろう。

今抱えていることをあの太男に話したら、どのような反応をするだろうか？

一喝されるだろうか？

大笑いされるだろうか？

それとも——。

いや、あの馬鹿者と合わせてみたらどうなるだろうか？

………間を置かずに意気投合する二人。それに嫉妬する自分。そして、嫉妬していることを、つまらないこと、と言われ平手打ちされる。

そこまで考え、彼はそれがあまりにも真に迫っていたことも有り、また、真に迫っている、と感じたことも含めて、それが可笑しくてたまらなかったのか笑い始める。

———目頭が少し熱くなり始めているのを笑いすぎたからと誤魔化した。

何時の間にか、部屋は夕焼けに染まっている。いくら今が冬とはいえ、時の流れは非常に速いことを感じる。それを思うと、今まで自覚していなかったが、ここ数日の無理のせいかわたし疲れと眠気を感じ

る。

眠ってしまふ前に、と彼は、何事にも変え難い思い出を呼び起こしてくる呼び水であるそれを元あった場所に戻し、今までと同じように嚴重に保管する。

彼は椅子に深く腰掛け、今ここにいない教え子が、何をしているのかを考えたが、アイツは馬鹿だから、私が言おうとしたことに直感で気付くだろうと思うことにして、放置することにした。

——ただ一言「帰らなければ許さんぞ」と彼は呟いた。

眠気が限界に達していた彼は、襲い続ける睡魔に身を任せることにした。

いい夢を見れそうだと思しながら、在りし日の大男を思い浮かべながら——。

「教授！いや絶対領域マジシャン先生！教授の様子がおかしかったので、アキラ君本人から聞いたんですけど聖杯戦争に——

——」
「お前はもう少し、年齢とし相応になれ。この大馬鹿者が——

——！——

2 里帰り 冬木

差し出された紅茶に、「ありがと」とお礼を言っ、口を付ける。
起きたばかりで本格的に動いていない、低血圧な私の頭に多幸福感を
伴って染み込むような、そんな飲みなれた味。

飲み終えた紅茶の余韻に浸る。そのころには私も何とか完全に目
が覚めていた。

「あれ？お母さんが覚醒してる」

「ホントだ。珍しいね」

「なあ」「ねー」

割と失礼なことを言いながら、ドアを開けて入ってきたのは遠坂の
双子。

アイツと同じ髪と瞳を持つ、次男。優暉^{ゆうき}。

小さい頃の私とよく似ている、長女。曜^{ひかり}。

年齢は11。外見の共通項は少ないが、仲は非常に良好。

この二人を見ると、時たま、昔を思い出す。

双子の兄妹と、今日の昼頃に帰ってくる『予定』の長男、晶^{あき}は私に
とっての自慢であり、誇り。そして——6年前にアイツが死

んでからの心の拠り所。



飛行機を降りてから、新幹線に乗り、在来線に乗り換え、バスに揺
られること暫し。

降り立つは冬木市新都。

一度帰ると決めたら思ったよりも簡単に帰れるものだ、と今更なが
ら思った。

無意識の内に励起しようとする魔術回路をクールダウンさせる。

それは、この土地が優秀な霊脈及び霊地を複数内包している、日本

有数の土地だから、という理由だけではない。

「久しぶりだなあ」

——冬木市。

当主である俺の母親で6代目となる遠坂家がセカンドオーナーとして管理している土地。

今は亡き父親が生まれ育った土地。

俺が生まれ持った、メインが46、サブがそれぞれ34の魔術回路が

母親が、調律で復元できるギリギリまで移植してくれた、遠坂の魔術刻印が

そして、父親の亡骸から神代の魔術師の協力をもって作り上げた、

■■の魔術刻印が

——喜んでいる、懐かしがっている、急かしている。

「——そうだな」何となく恥ずかしいので小声で呟く「早く帰るか」

実家のある深山町までは、先ほどまで乗っていたのとは異なる、市内バスを使うのが一般的だ。

不便な事だが、バス停の位置が離れている。

記憶を辿ながらキャリーバッグを転がし、バス停にたどり着く。

四年ぶりだがバス停の様子は変わっていない。このことに微かな喜びと、確かな懐かしさを自覚する。

……四年ぶりというワードに何故か感じる、危機感。

——脳裏に浮かぶイイ笑顔でほほ笑む母親。

……ワリと詰んだかもしれない。

その前に、四年前って、うちの双子が7歳。

……すまない。放浪癖のある愚兄を許してくれ。

……どうしよう。というか、何故今までこのことを考
慮しなかったのだろうか？

——目を逸らしていたから、という答えが一瞬で浮かぶ。
……。

とりあえず、バスではなく徒歩で帰ることにした。
これからはこまめに帰ろう、と現実逃避しながら。

その前に遅れることを連絡する必要があることに気が付く。

そう、口頭——この場合は携帯電話——で。

何かの間違いで機械音痴な母親が電話に出ないことを祈りながら、
彼は携帯電話を取り出した。



アイツが死んだ時、時計塔との間に大きな騒動があった。

——封印指定。

ある魔術師以外には再現できないような、希少な魔術を永遠に保存
するために、その魔術師を一生幽閉し、保存する。

言うなれば、ホルマリン漬けの標本にして飾るようなものだ。

十分な魔力さえあれば固有結界の単独展開が可能。

そして、その固有結界に由来する異常な投影魔術。

封印指定を受けるのは当たり前だった。

そして、封印指定に加えて、大規模な神秘の漏洩。

幾つもの戦場において、人命を救うために行使された数多くの魔
術。

それを躊躇う理由はアイツにはなかった。

その痕跡全てを隠すのは不可能だった。

結果として差し向けられた、封印指定執行者や専門の狩り人。

——殺すつもりで行われる神秘の隠蔽と殺しては意味が
ない封印指定。二つの任務の矛盾を見抜き、利用し、その間隙を穿ち

抜ける。

——神秘の隠蔽の関係で、大勢の一般人の前では大規模な魔術を使ったがらない魔術師を暴動に巻き込み暗殺。

——魔術以外の方法で命を狙う者を、『法』で縛り付け、『正当な理由』で『処刑』。

——銃とは異なり、発射する際に音を発しない弓を用いた、超遠距離狙撃。

.....
.....
.....

それらの襲撃を全て切り抜け、返り討ちにし、同時に無辜の人々を救う。

——そして、魔術の世界とは無関係の少年に殺された。

——その死に方は、アイツにとって、一種の救済だったのかもしれない。

.....
.....
..... 私は絶対に認めないが。

そして残ったのは、死体。

余りに希少かつ有能、強力、そして魅力的な魔術。それを使いこなす魔術師。——その死体。

時計塔が欲しがらないはずがなかった。

そして、私たちがそれに応じるはずもなかった。

その結果、見せしめも兼ねて死体を奪おうとする時計塔の魔術師と、意地でも死体を渡したくない冬木市の魔術師の死闘は避けられない。

い。

——世界平和を願った男の死体を巡って、その男の知人が争うことを望まないと知っていながらも。

——しかしながら、その死闘は行われなかった。

その時は13歳の少年でしかなかった魔術師の機転を以て。

——僕に父さんの魔術を受け継がせて欲しい。

つまり、死体から魔術の成果を全て抜き取り、それを魔術刻印に加工し移植する。

これにより、死体の利用価値をなくし、継承可能であることを示し封印指定を解除させる。

正に、非の打ち所がない機転であった。

——その行為の危険性から目を逸らせば。

当時の晶は、私にバレたら反対されるから、と第五次聖杯戦争で生き残り受肉を果たしたキャスターのサーヴァントに頼み込んだらしい。

唯でさえ、魔術刻印は段階を経てゆっくりと移植するものであり、そのことは、その時すでに遠坂の魔術刻印を移植し始めていた晶も知っていた。

その理由は拒絶反応。それを抑え込むには時間と手間が掛かる。

しかし、本当に危険なのはそこではなかった。

アイツの特異性の本質である固有結界という大魔術は心象風景の具現化。

これを受け継ぐ、ということとは心象風景を——精神そのものを受け継ぐこと。

つまり、晶の心象風景がアイツの心象風景に塗りつぶされる、ということだった。

当たり前だが、それは危険極まりない行為である。下手をしたら廃人。上手くいっても何時発狂するか分からない。それを行うのは、賭け以前の自殺行為。

そして、晶は危険性を熟知したうえで、キャスターの反対を押し切り、キャスター以外には内緒にしたまま、土蔵にこもり、強行した。

——強固な覚悟と確かな勝算のみを持ち。

問い詰める私に、神代の魔女であるキャスターは、拒絶反応を抑え込むだけでも一週間は掛かるだろう、と答えた。

——行方不明になっていった晶を探し、土蔵の前に強固な結界を作っていたキャスターに、結界を突破してたどり着いたときには、すでに三日が過ぎていた。

更に問い詰めようとした私に、私たちに——土蔵が開く音が届いた。

現れたのは、すべての色が抜け落ちたかのような白銀の髪と燃え尽きたかのような褐色の肌をした、何処か虚ろな目をした少年だった。

足元が崩れたかのような錯覚。これほどの絶望を感じたのは初めてだった。

そのまま放心状態になり、何時の間にか座り込んでいた私に差し出されたのは、——褐色の肌が少しずつ、元の色白な肌に戻りつつある右手だった。

呆けたままで顔を上げる。目が合ったのは、柔らかな光を放つ碧の瞳。

私を心配し、労わるような、そんな意思を感じる目。

——大丈夫だよ、母さん。それに、母さんが元氣じゃない

と俺だけじゃなくて父さんも心配する。

擦れた声。よく見れば、その体は汗や埃に塗れ、大部分が元の色に戻りつつある肌は、急速に治りつつあるが、打ち付けたような痣や、明らかに自傷と分かる切り傷や切り傷であふれていた。

——限界だった。

安堵と、喜びと、懐かしさと、その他もろもろの感情に身を任せる。そのまま抱きつき、何度も名前を呼びながら泣き叫ぶ。

三日間不休で探し続け、施術を見守っていたために全力を避けなかったとはいえ、魔術の英霊の敷いた結界を突破した疲れが一気に出たのか、泣き疲れて、そのまま眠りついてしまった私。

戸惑うような、しかし慣れたような手つきで頭を撫でる手に、懐かしさを伴った心地よさを感じながら。

姉さん、と私を呼ぶ声で回想から覚める。

アイツが父親から受け継いだ、武家屋敷。

そこで私は、私たちは晶の帰りを待っていた。

時刻は昼前。そろそろ昼食を作ろうかな、という時間帯。

私は居間で考え込んでいて、そのまま回想に突入してしまったようだ。

「どうしたの■？」

「晶君から電話が来て、到着するのが少し遅れて夕方頃になるそうです」

電話番号が変わっていたらしく、初めは誰だろうって思ったらしい。

四年ぶりに会話したが、思ったよりも緊張しなかったらしく、話し込んでしまったそうだ。

「そっか、ありがと■。ちよっと残念だけど、正直助かったわ。

四年ぶりだから、なんて話し出したらいいか悩んでたから」

「そっか、姉さんもだったんですね」

「なんだ、■も？」

「いえ、晶君も、です」

「……………そっか」

「それでなんですけど……………」

「■？」

「えっと、姉さんに変わるって言っちゃって」

「ああ……………」

携帯原話からかけてきたらしい、ということ聞きながら手渡された受話器を手に取る。

「えっと、もしもし？」

『えっと……………久しぶりかな、母さん』

「本当にね。—————全く、電話で久しぶりって言うぐらいなら、

電話ぐらいこまめにしなさいよね」

『やっぱりそうだよね。うん……………』

会話が途切れる。

沈黙と気まづさが支配する。

……………どうしよう。

向こうも同じ状況らしく、受話器の向こうから車が通過する音などが聞こえる。

電話の向こうから、微かに息を吸う音が聞こえる。

若干の申し訳なさを感じながら、晶の発言を待つ。

『—————えっと、ごめん母さん。じゅ、十円玉が切れそうだから、またあとで』

「ちよつ、晶!? それ、携帯、よ、ね……………。あ」

あつたまま来たあ—————、という叫び声が響く。

3 里帰り（未然）

「——えっと、ごめん母さん。じゅ、十円玉が切れそうだから、またあとで」

『ちよつ、晶!? それ、携帯——』

——プツリ

電話を切る。

あつったま来たあ——、——、という叫び声が聞こえる気がする。まあ、気のせいだろう、きつと、多分、十中八九、絶対に。………幻聴かあ、疲れてるのかな？

通話時間17分48秒——。

随分と長電話だったようだ。

向こうの様子を聞く限り、俺の帰りが遅くなるのが周りの人に知られるのは早そうだ。

今日は平日なので高校で英語を教えているのだろう、父さんの義父の頃から交流があり実家に入り浸っている■先生にも、すぐに伝わるだろう。

初めに電話に出たのが■姉さんで良かった。もし、年齢不相応なほど悪戯好きなら■姉さんだったら少し、というか大分遊ばれるだろう。

それ以前に、もし電話に出たのが優暉ゆうきか曜ひかりだったら、母さんに電話を（半ば強制的に）変わられた時よりも気まずかったかも知れない。というか間違はなく気まずい。

全く関係ないが、■姉さんは母さんの妹であり叔母、■姉さんは父さんの義姉であり伯母、と呼ぶべきなのだが、幼い頃からの習慣（？）の影響で『姉さん』と呼んでいる。

………というかオバサンと呼ばれたくないらしい。まあ、それは至極当然の反応だろうし、こちらとしても、二人の外見が非常に若い

ので違和感もほとんどないから別に直そうとは思っていない。

実を言うと、反抗期の頃に一度言ったらしいのだが、その記憶が全くないので、詳細は永遠に闇の中である。無理に思い出そうとすると寒気がするのでは、なかったことにするのが正しい事、と思ひ込むことにしている。

………謎の寒気を感じているがなかったことにする。

本当にどうでもいいことだが、(普通の)高校には通っていないので、学校で■■先生に教えてもらったことは無かったりする。せいぜいが留学前に、念のためにという事で教えてもらったぐらいであり、その時は特に教えることが無くすぐに終わってしまった。

更にどうでもいいのだが、先生と呼ぶのは■■姉さんと■■姉さんと同じく小さい頃からの教育の賜も………習慣の影響である。

ところで、俺はさつき実家に電話を掛けるまで携帯電話の電源を切っていた。

これは単に、『バイト』中に電話やメールが来ると煩わしいので、普段から電源OFFが習慣となっているからである。

大量の着信履歴、未確認メール。

それらのほとんどが時計塔関係。というか教授。

取り敢えず、電話を掛けることにする。

因みに俺の携帯電話は電子工学的、魔術的に改造しているので、隠蔽や料金などの面で非常に便利になっている。要するに違法改造である。

さて、最近の着信履歴から教授に電話を掛ける。

プルルルという、ありふれた待ち受け音が聞———

何故あの大馬鹿者に聖杯戦争の———『プツツ、ツ、ツ、ツ———

———こえない。

電源をオフに———プルルル———仕方がないか。

深呼吸をしてから、『通話ボタン』に触れる。

「はい、こちら電話を受けました遠坂晶です。私にどのような御用でしょうか?」

『……………むしろお前が誰だ。いや、今回は私が悪いな。正直すまないとは思っている』

「いえ、こちらこそ。……………というか、何の用なんですか?」

『ああ、時計塔の連中には挨拶はしていったようだな』

「まあ、教授にほのめかされましたから」

その時選別として、(半ば強引に)色々な物を持たされた。正直、かなりありがたかったし、嬉しかった。

……………何故彼らに内緒にしたのか、と自問しそうになるぐらいに。

『……………お前にも事情が有るのは分かる。かつての私もそうだった』

俺の耳には少し、というか大分意外に響いた。

『全く……………お前たちは私を過大評価しすぎている。今でこそ多少はマシになったが、昔の私は……………いや、やめておこう』

まあ、昔の私はガキでしかなかったのだ。という一言が続き、しばしの静寂が訪れる。

教授の子供時代を想像することはできそうにない。だが、彼にも当たり前のような少年時代があったのだろう、ということとは理解できた。理解はできた。それならば、何があつたら、今の彼が形成されるのだろうか。

自賛が過ぎるかもしれないが、俺は自分のことを異端児と称すべきレベルの天才だと自覚している。

だが、彼はそうではない。正直疑わしくはあるが、魔術の才は凡人以下らしい。

ならば、どのような経験を積んだのだろうか?

ある程度までの事ならば力技で解決できる、という俺たちのような強者ではないのに、俺たちのような……………そのままだったら周りから疎まれ、日の目を見ることが出来ないような異端者^{はみ出し者}たちのことを庇護し、周りとの緩衝材の役割をし、育て上げることが……………

―無事に芽を出させるようにしてくれる存在になれるのだろうか？

今のガキでしかない俺に判るのは、この人には一生敵わないのだろう、ということだけだった。

もしかしたら、今日のような話は以前にもされたのかもしれない。もしそうだとしたら、その時に、今のようなことを感じただろうか？

なんとなくだが、教授が参加した聖杯戦争のことを聞いてみたいと思った。

何時もなら話してくれないだろう。だが、聖杯戦争を生き抜いてからなら話してくれるかもしれない。

「――そういえば、先ほどの絶叫は何だったのですか？」

その敬語をやめろ、正直違和感がすごい。――失礼な。

『……………あの大馬鹿者に襲撃されてな』

「……………ああ――」

俺はその悲痛に満ちた一言で全てを理解した。

「――このたびはご愁傷様でした」

『勝手に殺すな馬鹿者』

「ところで教授。■■■■■さんを放っておいていいんですか？あの、聖杯戦争に参加した事あるらしいですけど、令呪なくても勝手に参加したりしないですかね？」

受話器の向こうから聞こえる咳き込むような音。

まあ、今話せるのはせいぜいこのくらいまでだろう。

なんとなく、今日は自分が誰よりも尊敬している恩師に親近感が湧く日だ、と思った。

その後、■■■■■さんに聖杯戦争のことをバラしたことに加え、あることないこと吹き込んだことが居もずる式にバレ、たつぷりと怒ら

れた。

ついでなので着信履歴を整理すると、最新のところに新しく懐かしい番号があった。

それは、4年前中学卒業とともに海外留学——（本当はまだだが）時計塔に入学——したために音信不通になってしまった、という事にして自然解消した、かつての親友のもの。

何時の間にか、携帯から電話していた。

そいつは、電話の相手が俺だという事が分かると一気に興奮し始めた。

曰く、■先生から今日帰ってくることは聞いていたが連絡先が分からなかったが、先ほど携帯番号を先生から教えてもらったらしい。

電話の間、4年間の隙間は存在していなかった。そのことが無性に嬉しかった。

最終的に明日会うことを約束して、通話を終わらせる。

コートから煙草を取り出す。

未成年だが、特殊なものなので問題はないだろう。

唯でさえ、日本人は年下に見られやすいらしい向こうでも、実年齢より上に見られることが多かったのだ、まだ19だろ、などと言われることはまずないだろう。

仮にバレたとしても、今すでに吸っているこの煙草は、簡易的ではあるが魔術礼装としての効果を——様々な種類があるが、今回のものは認識阻害の効果を——持っている。

ある時、教授が煙草を吸っているのを見て、その煙草の効果と便利さに一発で気付き、5人の仲間と協力して半ば徹夜で一週間の時間や様々な物品を費やし、製法を編み出したものだ。

その5人とは煙草以外にも様々なものを作ったり、同じ『バイト』に参加したり、ギリギリ笑い話になるかどうかという危険な事も含めて

色々なことをした、いわば悪友どうし。若干規模と危険性が違うが、仲の良い高校生っぽい感じの付き合いなのかもしれない。

煙草を吸うことで誤魔化したはずの目頭が、再び熱くなるのを感じた。

眼鏡をかけることで誤魔化する。その眼鏡がアイツらとお揃いで作った魔術礼装であることに気が付き……………。

……………今吸っているのが、認識阻害の煙草で良かった。

先ほどまで感じていた再会した時の気まずさに対する不安はもうなかった。

根拠はないが、何とかなるだろう、と無責任きわまるが、楽観している自分がいた。

足取りを軽くして、俺は帰路を急ぐことにした。



「Trace簡易同調開始」

余談だが。歩いている最中暇だったから——ではなく、何となく気になったので、ベンチに座り込み、魔術回路を励起させ、携帯電話に『解析』を掛けてみた。

——ありふれた工程を経て作成され、ロンドンにあるありふれた携帯会社で販売される。

——『私』を買った男は、家に帰るなりすぐに『私』の全身を解体し、様々な改造を施した。

——改造は完璧だったらしいが『私』にはよく分からない。それよりも、この男がこのような技術を手に入れるまでに、どれ程の同胞の犠牲があったのだろうか？『私』は心底恐ろしかった。

——『私』を改造したこの男は、私のことを大切に扱ってくれた。しかし、『私』を『任務』に同行させないで欲しい。毎回の事だが、結構酷い目に合う。この男の体は頑丈らしいのだが、『私』はそうではないのだから。

「——同調強制終了」

『解析』によって読み取った情報を、半ば自動的に『構築』して疑似的な記憶として再現する。

なんというか、思ったより酷かった。

手の上にある傷だらけの携帯を見つめる。

……せめてもう少し大切にしよう。

疑似的に再現したものとはいえ、携帯の半生を追体験したのだから、体感的にはかなりの時間が経過しているような気がするが、実際には5分も経っていない。

これは、『記憶を読み取る』ではなく、あくまで『情報を読み取る』ものだからであり、先ほど追体験したものは疑似的に再現したものに過ぎないからである。

これが、様々な感覚や『感情』、そして強固な『自我』を持つ高度な動植物、例えば人間の情報を読み取るのならば、それだけ情報量が増え、より多くの必要な時間と、より強固な精神的強度が必要になる。

無機物な機械の半生を上手く編集して『記憶』として読み取った情報をそれほど価値のないもの、として認識して『記録』として劣化させ処理をする。

何となくそんな気はしていたが、休憩のつもりで行ったが全く休まらなかった。

ベンチから立ち上がる、座ってからの時間は十分に満たない。

まあ、足は休められたからよし、とすべきかもしれない。

さてと、一言呟いてからキャリアバッグの持ち手を掴み歩き出す。

名前でも付けるべきだろうか、と続けながら。

因みにこの後、商店街で何度も声をかけられたり、明日会うことになった友人と再開したりして、つい話し込んでしまい、到着が更に遅れてしまうことになる。

4 再会————しようと思っただらもつと早く出来るんだからもつと早く帰ってやれよ

俺たち双子には4年ほど会っていない、8歳年上の兄がいる。

その理由は、魔術を本格的に学ぶことが出来る組織、時計塔に留学するから。

入学するのは中々大変らしく、それと同時に大変名誉な事でもある………らしい。

あれから4年経経ち、11歳になった俺たち二人はある程度の魔術を使いこなせる様になった。

今になって思い出すと、兄の魔術の腕前は相当のものだった……と思う。まあ、歳が離れているので比較することは難しいのだが。

そんな兄は、魔術師としてだけではなく人間としても優れていた。———とは言え、7歳の頃までの俺達には魔術の事はほとんど分からず、単純に兄として———人間の面で尊敬していた。

ひいき目に見ているかもしれないが、優しく、頼りがいがある、手先が器用、基本的に家事は万能………。ついでに頭も顔も体型も良い。

そんな自慢の兄だが、何処か強がりなところがあり、そのせいか留学の間はずっと音信不通だった。

兄は交友範囲が広く、ほとんどのグループでその中心に居た。頼りがいのある事が理由だと思っただが、それは違うらしい。

曰く、人によって付き合い方を変える社交ではなく、所属している組織ごとに人格そのものを変える『鍍金』をしているから。『鍍金』よりも仮面の方が分かりやすいかもしれないけどね、と言葉を繋げた。

ほとんど顔を覚えていない父が暮らしていた武家屋敷ではなく遠坂家の洋館で、時計塔に留学するまでの日にちが余り無くなっていったので、夕食の後家族四人で何となく時間を過ごすようにしていた。

———そんな頃。

兄は膝の上に、不自然に眠ってしまった母の頭を乗せながら、それを告げた時の兄は、何となく寂しそうだった。

もしかしたら、その時の表情こそが兄の本当の人格——『鍍金』という比喻に合わせるならば地金——の一部なのかもしれない。

何故兄が、その時にその話をしたのかは分からない。

母には内緒にして、俺と曜ひかりだけに話したのかも分からない。

でも、本当の兄が寂しがりであり、普段はそのことを隠している、という事は分かった。

正直に言うと、本当の人格に興味が無いわけではなかったが、それは積極的に追及しない事にした。

あの時の寂しそうな顔を見たせいか、社交ではなく『鍍金』をしているのは寂しがりな自分を隠したいから、という考えが浮かんだからだ。

無理をしていることや寂しがりなことを隠す、強がっていること自体さえも隠してしまう。そんな自慢の兄。

その兄が久しぶりに帰ってくるらしい。

……正直、気まづさがない、と言えど？になる。

四年間という時間は懐かしさを募らせる。そして同時に錆び付かせる。

具体的に言うと、なんといつて会えばいいのか分からない、という感じに。

心の錆の原因は分かっている。不安や困惑といった仕方のない物。

そして、意地やプライドといったつまらない物。

前者の解決はできない。強いて言えば、期待や興奮といった肯定的な感情で誤魔化すくらいだろう。

対して後者の解決はできる。いや、しなくてはならない。絶対に。

私たち双子には一人の兄がいる。

八歳年上の、頼りになるが、何処か危なっかしい兄。

一人で何でもできるけど、どうしようもなく寂しがりで、それなのに強がりな兄。

そんな私たち二人が敬愛して止まない兄が、四年ぶりに帰ってくるらしい。

普段通り、寂しさを『鍍金』しているのか、留学中は音信不通だった。

全く、強がるのもいい加減にして欲しいものだ。

………まあ、そんな所もいいのだが。

母曰く、そんな感情を身近な女性に抱かせるところは、今は亡き父にそっくりらしい。

ついでに言うと、一見普通なのが兄で、普通に危なっかしいのが父らしい。

そして問題なのが、一見普通に見えること。

兄曰く、『鍍金』。

本心地金を覆い隠鍍金し、一切晒さない。

そんな正気の沙汰では成し遂げられない、そもそもやろうとしない事。

………ならば、兄は一体どれ程の感情地金を隠蔽鍍金しているのだろうか？

———私はそれを知りたかった。それがパンドラのピトスだと知っていないながらも。

その前段階として、『鍍金』がどれ程大変か。

先ずはそのことを知るために、自分の精神を分析したことがある。魔術などを用いて強引に行うのではなく、時間を掛けてゆっくりと。その行為に最も近いのは自己暗示、だろうか。

———自分自身をのぞき込む。

———汝が深淵を覗き込む時、深淵もまたこちらを覗いている

———自分が誰だか分からなくなる。

———地面に足がつかないような錯覚。

———自分が覗き込んでいるはずなのに、覗き込まれているような嫌悪

感、違和感、恐怖。

精神崩壊していても可笑しくはなかったのだろう。それほどの危険と引き換えに得たのは、自分の精神構造に詳しくなったこと。

——— 自分の中に、精神の深淵に潜んでいた、魔術師としての自分に気が付いた、気付いてしまったこと。

魔術師としての自分に？ まれなかったこと。

このことに関しては、運が良かったとしか言えないだろう。

——— そして、兄が抱えているものはこれよりも重い十二カだという実感出来たこと。

その重さを軽くしてあげたい。

私はその時思った。

兄に会いたい、そう強く思った。

四年ぶりに会うという事で、母や優暉ゆうきは何と言って会えばいいのか分からないらしい。そして、兄も同じだろう。

本当にしようがない人たちだ。あの兄の事だ、次に会えるのが何時になるのか分からないのに。

——— ならば、私がすべきことは一つだろう。

つまらない意地やプライドを張る余裕を無くす。

具体的な方法については…………… 私たちは11歳、子供っぽく振る舞っても大丈夫だろう。

久しぶりに大好きな『お兄ちゃん』が帰ってきた、そんな可愛らしい妹になればいい。

驚いた兄の…………… 『お兄ちゃん』の顔が脳裏に浮かぶ。

さて、今ぐらいいは猫を被るのを止めよう。

今の私は、甘えたがりなお兄ちゃんっ子。

——— あの頃のような。

因みに、兄は話をした後、薬を盛ったのは僕だからと、膝の上で眠っ

てしまった母を俗にいうお姫様抱っこで寝室まで連れて行った。

その後、困惑した声や何かを叩くような音がしたが何があったかは分からない。そのことで分かったのは、兄がある意味勇者だ、という事だけだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

緊張が酷い。

遠坂邸の洋館ではなく、父の暮らしていた武家屋敷。

現在、父の義姉の■■■姉さんが管理、保有している。そして、父と交流があつた魔術関係者の集う、言わば魔境。

そんなBUKEYASHIKI——もとい武家屋敷。

——そして、その門の前で佇む俺。

……………どうしよう、本当に。

因みに20分経過。

気まずさは増していくばかり。

このまま門前待機していても、気まずさが募るばかり。

気まずさは既に天元突破している。

これ以上待っていても仕方がない。

そんな風に自分に言い聞かせ、腹をくくり、門をくぐることにする。

目に入ったのは、玄関に座り話し込む少年と少女。

見覚えのある二人。——双子。

——目が合う。

息を?む。

——深呼吸。

「やあ、久しぶり——」「久しぶり、兄さ——」

「お兄ちゃあああああん！」

飛び込んでくる。俺と赤毛の少年の動作が全く同じように硬かったことを気にさせなくするぐらい唐突に。

誰が？——俺と——否、母さんと同じ黒髪、碧眼。

いつもの癖で、思わず迎撃しようとしていた全身^{本能}を思い留まらせる。

——^{ひかり}曜。四年間会っていない妹。双子の片割れ。

キャリーバッグが倒れる音で正気を取り戻す。

気が付いたら、5メートルの距離を一瞬で縮め、残りの距離を一気にゼロにしよう、とばかりに両手を延ばして大きくジャンプをしている曜。

——時間が急減速するような感覚。

着弾（？）予想は腹のあたり。

避けるのは論外。ならば受け止める。

どうやって？

このまま受け止めれば、後ろに倒れてしまう可能性が高い。兄としての、なけなしの沽券に関わるのでそれは避けたい。絶対に。

身体強化はアウト。下手をしたら、愛しの妹を傷つけてしまう恐れがある。上手く調整する自信はあるが、万が一という事もある。

ならば、己の身体能力を信じるしかない。

大丈夫。俺なら出来る。ルーンなどで身体能力を上げて物理で殴る、というRPGの名言染みたスタイルの封印指定執行者（物理）に鍛え上げられた自分の肉体を信じる！

静かに気合を入れ、極限まで高まった集中力の影響で遅くなった体感時間の中でも滑らかに肢体を動かす。

体勢を下げ、延ばされた両手が肩に乗るように、頭が胸のあたりに来るように調整。

両手が肩に乗り、そのまま肩をしっかりと掴んだ事を確認する。

体勢を上げ、同時に曜の腰に手を伸ばし、引き寄せる。

姿勢を直しながら抱きとめ、体を回転させることで勢いを殺す。

——何とかなかった。

碧色の瞳と目が合う。

大きくのけぞるような恰好となっている曜は一瞬戸惑ったような表情だったが、混じりっ気のない満円の笑みを浮かべ、抱きついてく

る。

「お帰り、お兄ちゃん」

耳元で小さく、囁くように一言。

瞬間、心の中の何かが瓦解する。

目元から溢れそうになる熱を誤魔化し――

「ただいま、曜」

――一言、返す。

その一言が涙ぐんでいることを必死で隠す。

「ただいま、優暉」

赤毛の少年に――優暉に声を掛ける。

そして、――

「ただいま。母さん」

――慌てて飛び足してきた母親に応える。

「俺は、――否、僕は帰ってきました」

――出来る限りの笑顔で。

「お帰り、晶」

母さんの一言。

それだけで、今まで我慢してきた何かが崩れていく。

まだだ。

このまま、号泣するわけにはいかない。

もう少しだけ。もう少しだけ耐えたい。

玄関口で泣きたくない、というのもあるが、ここで泣いたら、これ

から会う皆の前でも泣いてしまいたいそうだからだ。

――よし、誤魔化そう。

「――ぶつちやけると、大量のガントか十円玉、もしくは数枚の
テレホンカードを食らうと思っていたので、安心していきます」

「――ねえ晶、ブラックジャックって知ってる？」

ロンドン仕込み(?)のジョークで強がってみたら、すぐに返され

た。

どうやら冗談を言うことについての強さは太刀打ち出来ないようだ。

——そう、こんな感じだったはずだ。

四年という月日は、思ったよりも早めに埋まっていきそうだった。

——取り敢えず、カモフラージュのキャリーバッグを家に入れなさい。

——了解。………って分かるの？

——一般人の振りに使ってるんでしょ。手荷物検査とか盗難対策とか。

——ご名答。この中に入っているのは、一般人に見られても大丈夫なやつ。

——最低限の着替えとか、普通のお土産つてところかしら？ ついでに、パスポートとかはコートかしら？

——それも、と言うか全部正解。はい、優暉、曜、ロンドンの（よく分からない）お土産。

——ありがとうございます。大事にするよ。

——ありがとうございます。………でも、これって何？

——そして、コートに入っているのが魔術師としてのお土産。

——ありがとうございますお兄様。一層鍛錬に励みます。

(×2)

——………成長したなあ。——あ、母さんは後

で、と言うか後日で。

——あつ、お帰りなさい晶君。

——本当にお久しぶりです。ただいま帰りました■姉さ

ん。■■■■姉さんもお久しぶりです。

—— はい、お久しぶりです晶君。何となく、大人っぽくなり
りましたね。

—— ホントね。久しぶりアキラ。—— やっぱ
りだけど、■■■■つぽくなつたわね。■■■■じゃなくて。

—— へえ、どういう意味かしら、■■■■？

—— べつつにいい。ただ、■■■■よりも■■■■■■に似てるって
思っただけ。

—— それ以外に言いたいことがあるなら、はっきりと言っ
てくれないかしら？

—— ふ、二人とも止めてください。せつかく晶君が帰って
きたのに。ね、晶君

—— そう言えば、四年前もこんなかんじだったなあ。

—— 現実逃避ですか。そう、ですか。……………フフフ。

—— ちよっ■■■■!?

—— お、落ち着きなさい■■■■。

—— フフフ……………クスクスクス。

—— 大丈夫？ ■■■姉さん？

—— はうあつ。あ、頭を撫でられるのは、その……………

—— 取り敢えずは、これでいいかしらね。

—— まあ、そうね。と言うか、毎回やるの？この茶番。

—— ……………さあ。

—— えーつと。ヤッツホー、お帰り晶君。元気にしてた

？

—— ただいま、先生。特に病気や怪我などはなかったで
す。

—— うんうん。何よりもまずは健康第一。元気があれば
何でもできる。

—— 先生、意味が被ってます。

—— 細かいことは気にしないっ。そんなんじやモテない

ぞく。

………フツ。

おっ、その余裕な笑み。教えなさいよ、というか根ほり穴掘り聞き出してやるから覚悟しなさい。

先生、酔ってません？

ん？酔ってないわよ。まだ。

まだ、ですか。

ところで、もうそろそろ晩御飯の準備が出来るかしら。

露骨な話題転換ですね………。それよりも、僕も手伝ったほうが良いのではないのでしょうか？

疲れてるんだろうし、休んでも良いと思うけどね。まあ、今更かもしれないけど。

いえ。先生が様子を見に、この部屋に入ってきた時には、もう起きていましたから大丈夫ですよ。

そう？ならいいけど。遠坂さんと■ちゃん、■ちゃんから様子を見て来て欲しいって言われてきたけど、本当に大丈夫っぽくて安心したわ。

本当に、ですか……。

そうよ、本当に。■もそうだったけど、晶君も無理しちやいやすいから、心配なのよ。

父さんも、だったんですか？

そうよ。今思えば、■さんもそうだったわね。

祖父もだったんですか……。

そうなのよね。何となく危なっかしくて、ついでに女の子にモテるところも同じなのよね。

そこですか……。おや、夕ご飯の用意が出来たようですね。

えっ、ホントに？

ええ、■姉さんの階段を上る音が聞こえます。

すごいわね……。

——それほどこでも。さて、今夜は飲みましようか。
——そうねえ。……………あれ？晶君、今19歳よねえ。

——っ！しまったッ！

——ふくん……………ねえ、晶君。

——黙秘権を行使します。

——まあいいわ、■ちゃんも、もうすぐ呼びに来るだろうし。晩御飯の時に話すことが増えたわね。

……………やってしまった。

——■先生、晶君。晩御飯の準備が出来ましたよ。——

……………

——まあ、晶君も一杯。

——ちよつ。先生。僕まだ未成年なんですけど。

——まあ、向こうでも飲んでたんだし、大丈夫よお。ね、遠坂さん。

——あーうん、晶。

——な、何でしょう。

——あきらめなさい。

——ちよつ。母さん……………

「——さて、■先生は酔いつぶれて寝ちやったから、■が二階に連れて行つたわ。起きなさい晶。まあ、とつくに起きてるんでしようけど」

「まあね」

——上体を起こす。畳の上に手を付き、そのまま立ち上がる。

——少し足元が覚束無いが、頭痛や吐き気、倦怠感はない。

——何時ものコートを羽織り、魔術回路を励起。

——念のために軽く『解毒』を使い、魔術回路をクールダウン。

「大丈夫？」

「ええ、大丈夫です——」

「このまま英^{サレザアント}霊の召喚、という無理を実行出来るぐらいには万全です」

「そっか。……じゃあ」

「はい。——今夜、召喚を行います」

12月上旬の寒い夜。

縁側に座って、空を見上げている壮年の男。

四年前よりも痩せている、と言うよりも大分やつれている。特徴的^{ワカメ}な髪も、一見分かりずらいが染めているようだ。

「久しぶりです、おじさん」

僕はその男に声をかける。

間桐 ■ ■

僕が姉さんと呼ばされている、もとい呼んで慕っている叔母、■の義理の兄。

聖杯戦争における、礼呪、というシステムを開発した(元)御三家が一角、間桐。

その長子にして、最後の生き残り。

——そして、魔術回路を持たない『一般人』。

「なんだ、晶か。久しぶりだな」

一度振り返ってから、興味なさげ、という感じで再び星空を眺める。相変わらずと言うべきか、懐かしいと言うべきなのだろうか？

まあ、取り敢えず。

「女性陣とは違って、老けましたね」

「いまお前、言っちゃいけない事を言ったな！しかもはつきりと言っただな！」

「四年ぶりに顔を会わせる相手に、興味ない振りをしたのが悪いんです。それと、夕ご飯に来なかったことも。あと、大事だからってワザワザ二回も言わないでくださいよ」

「そんなの僕の勝手だろ」

「■姉さん心配してましたよ」

——隣失礼します。——別に、勝手にすれば。

雲一つない、ついでに新月なので月も無い。そんな満天の星空が目映る。

「体調はどんな感じですか？」

「どうしたんだ急に？お前に心配されるような事はないぞ」

「——そんなはずは無いんです」

「晶？」

「魔術師じゃなくても分かるはずですよ。その体が今、どれ程危ないのか」

「——晶」

「憶測ですが、何かの後遺症ですよね」

「晶、止めろ」

「はつきりと、言いましょうか？」

「はあ……分かったよ。——久しぶりだな、晶」

「はい、お久しぶりです。地味に会いたかったですよ」

「地味にかよ。ま、お前らしいか。どうだった？四年間は」

「大変でしたよ。——主に女性関係が」

「ハッ、そうだろうな。やっぱりお前は■■■に似てるよ」

「そ、そうですか……。そ、そういうえば、父さんはどんな感じの人だったんですか」

「女性関係では、どうしようもないぐらいに鈍感だったな」

「……………そうですか」

「ああ、そうだったな。ホントにアイツは——」

——ま、アイツはこの僕みたいに、口を唇で塞ぐ、何てこと出来なかったからなあ。

——そんなことイタリア人でもしねえよ。いや、出来ねえよ。

「——まあ、酷かったよ女性関係は」

「……………エピソードが余りにも多すぎる」

「何処のエロゲ主人公だよ、って感じだったからな」

「ああ……………。何というか、余裕さも優雅さも足りていない、とても

言うべきなのでしょうか」

「まあ、気にするな。女性関係を除けば、いいやつだったよ。割と」

—— 何というか。素直じゃないというか。

—— やっぱりだけど——

「—— 変わりませんね、おじさんは」

「そう言うお前は、相変わらず失礼だよ」

「それでしようか？」

「おいおい、心外です、みたいな顔するなよ」

—— ホントに懐かしい。

煙草を啜える。

—— 吸っていいですか？—— まあ、今ぐらいはいいよ。

紫煙を燻らせる。ゆつくりと味わい、吐き出す。

魔術礼装としての特別な効果はなく、単に有害物質を含まない、というだけの唯の煙草。

—— というより、もうそれは煙草ではないのではないか、むしろ煙草に対する冒流なんじゃないか、という煙草モドキ。

「—— 吸います？」

「……………まあ、偶にはいいか」

コートの中から、今吸ってるのとは違う煙草を箱から一本取り出す。

—— どうぞ。—— ああ。おい、火を。—— おっと、了解です。

「どう、ですか？」

「まあ、良いんじゃないか？」

「……………(よしっ)」

「何？自作なのこれ？」

「よくぞ聞いてくれました！この煙草は——」

「—— 煙草本来の用法である医療用。精神安定に加えて、肉体面にも作用するって感じか？」

「……………絶句」

「口で絶句って言うなよ。全く、見たら分かるっつ」

「そうですねか……………、『エターナルアイズ眼鏡眼鏡同盟』の粋を集めて作ったのに

「……………、一瞬ですか。そうですか」

「お前が、分かりやすかったからな。効果も半分ぐらいは当てずっぽうだ」

「——効能を当てたことに対する賞品代わりに、一箱どうですか？」

「……………お前が薦めるなら、貰っておこうかな」

——と言うか、なんだその組織名？

——時計塔の仲間と作った、僕を含めて学生6人のサークルっぽい何かの名前です。因みにリーダーは僕、『ワインレッド紅眼鏡』です。そして、(勝手に任命した) 特別顧問の『黒眼鏡教授』がいます。

——……………そうか、楽しそうで何よりだよ。——

——そうだな、いい機会だし、話してみろよ、4年の間に何があったのか。

——確かにそうかも知れませんか……。分かりました、了解です。

——その後、中国からネパールに国境越えをする途中、その山越えの時に——

——さつきから思ってたけどさあ、何してんの！ホントに何してんの！

「——さてと、もういい時間なので」

「……………嘘だろ、あれから小一時間経ったのに時計塔どころか、ヨーロッパにすら着いてねえ」

「ホントはもつと話したいことがあったんですけど……………」

「いや、もういい」

「え〜〜〜」

「いや、え〜〜、じゃねえよ」

「さてと、それじゃあ——」

靴を履き、縁側から庭に下りる。そのまま振り返らずに——

「これから俺は準備に入ります」

「そうか」

男はそう応じた。

「はい」

短く返答する。

男も立ち上がる。

しかしながら縁側を歩き、そのまま立ち去って行く。

「晶」

「はい」

後ろからの声に応じる。

「お前は絶対に帰ってくるだろうから、一言だけ言うぞ。いいな、――」

「何があっても、■を巻き込むな」

数瞬の間。

床の軋む音に振り返った時には、気配すらなかった。

「やしてと」

時刻は、新月が地球の真裏を通り過ぎてからほんの少し。

星空の下。土蔵の入り口に佇む。

深呼吸。

意識を入れ替える。

これから挑むは真正銘の大舞台。その第一歩。

万が一、億が一にも、失敗は、決して、許されない。

「^L ^a ^u ⁿ ^c ^h
気合を入れろ」

――自らの力を以って、最強を証明せよ――

5 召喚——よりも回想のシーンの方が長い件

武家屋敷の土蔵。

開放的な造りの日本家屋は、魔力が散逸しやすい、という欠点があり、大魔術——今回行う英^{サイヴァント}霊の召喚は其の極みだろう——の行使には適さない。

だが、木造平屋な日本風の家屋でも開放的ではない、閉塞的な場所もある。

例えば、今いる土蔵のような。

ここはかつて幾人もの魔術師に受け継がれてきた工房だった。

最後にその工房を用いた魔術師は■■■■——遠坂晶の実の父親であった。

床に残るのは膨大な魔力によって焼き付いた魔法陣の跡。

もちろんだが、英^{サイヴァント}霊の召喚の方法は熟知している。

とはいえ、これを利用したほうが簡単なのは自明の事だろう。

——さてと。

コートの中から、大きささまざまな布を取り出し、魔法陣の痕跡の周りに敷いていく。

布に刻まれているのは様々な魔法陣。

更にコートから透明な——トレーシングペーパーのような——使い捨ての、特殊な紙を取り出し、先ほどの布や魔法陣の痕跡の上に敷く。

次に取り出したのは、十数個の小粒の宝石。

光源の少ない土蔵の中でも、なお煌めくそれらは、魔術師の手の中で液化する。

錬金術と宝石魔術によって操られた液体は透明な紙の上に緻密な経路^{パス}を刻んでいく。

——準備完了。

思ったより準備が早く終わったのか、青年は一息入れることにした。

彼は土蔵の中を懐かしそうに見渡し、中央の魔法陣の跡に手を伸ばす。

その魔法陣は、まだ召喚の魔法陣として成立していないので、召喚は行われない。

——閃光が、旋風が舞い散る月下の召喚——

——涼やかな青白い月光と、風になびく金砂の髪——

——凜とした美貌の、蒼銀を纏う女騎士は小さく口を開く

ノイズ塗れの映像^{ビジョン}。

脳裏に映るは何時かの記憶。

誰が見たものなのか、あの美しい騎士が誰なのかは知らない。

——だが、悟^{分かった}った。

魔法陣の跡から手を放し立ち上がる。

召喚の予定の時刻までもう少し。

締め切られた扉の向こうには満天の星空があった。

——現在判明している参加者の情報だが……………。

——教えてください。

——よし。先ずはだな……………。

お前以外の6人の内、アインツベルンと間桐の2枠は

既に確定している。

—————そして残る4枠の内3人までの情報を手にしている。
————— 凄いです教授。そこまで分かったら事前準備として
は最上に近いではないですか。

————— そこまでの事ではない。その3人の内二人は事前に
通達が有った。

————— それでも凄いですよ。俺では手に入れることすらで
きなかった情報なんですから。

————— ……フン、まあいい。さて、誰から話したものか。
うん？情報量の少ない順……か。分かった。

先ずは、アトラス院から一人。

先方曰く、“プロビデンツ”の運用実験。

そもそもアトラス院は優れた魔術回路を持つものが少なく、その魔術師本人では聖杯戦争に参加するのは不利だ、と考えるだろう。

だが、アトラス院には『自らが最強である必要はなく、最強であるものを作り出せばよい』というコンセプトが有る。

その考えから、錬金術師の集団であるアトラス院は数多くの『兵器』を作り上げてきた。

そして今回の件についてだが、アトラス院が錬金術師の集団であることや、奴らの宣告の言葉尻を捕らえると、プロビデンツ Providence という名をしたホームクルスなどの生体兵器、もしくはそれに準ずるナニカだろう。

正直、『Providence Providence / プロビデンツ 神の摂理、摂理のしるし』という物の情報は一切ない。

そもそも、アトラス院は『自己の研究は自己にのみ公開する』という規律が、有名無実化しているとはいえ、時計塔よりは徹底されており、その『兵器』の情報が流出することさえ稀だった。

今回、何故彼らが大々に公表したのかは分かっていない。

だが、推測するのならば、聖杯戦争に参加する事が必要、という事だろう。

もしこの推測が真実ならば、その性能は計り知れないだろう。

召喚の触媒は候補が多すぎる。一覧を資料として渡すから、飛行機の中ででも読んでおけ。

次は、今次の聖杯戦争の開催地の杉羽良及び付近の土地のセカンドマスター管理者である魔術師。

のまきよるす
野蒔夜栖。

管理は確りと行はれているとはいえ、本来ならこの男はセカンドマスターに、しかも杉羽良のような霊脈の強すぎるような、重要な場所の担当に値するほどの魔術師ではない。

この男がセカンドマスターに任命された理由は、この土地で16年前に行われた亜種聖杯戦争だ。

元々、杉羽良はそれほど霊脈の強い土地ではない。………そうだな、どれ程過大評価しても、冬木より勝るといふ事は無い、という程度だった。

5騎のサーヴァントが召喚された、その亜種聖杯戦争において、杉羽良のセカンドマスターを務めていた一族が没落。

この戦いにおいて、のまきよるす野蒔夜栖はパーサーカー狂戦士の英霊を召喚し、これに勝利した。

その戦いの後、杉羽良の霊脈が何らかの要因で活性化。それと並行して、時計塔は野蒔夜栖をセカンドマスターとして認定した。

この男が聖杯に依ってどのような願いを叶えたのか、詳しいことまでは分からない。

しかし、その願いが魔術師としての願いならば、全ての魔術師の天敵である、今のお前の敵ではないだろう。

触媒については、何かを取り寄せた、という情報は一切知りえない。本人との相性での召喚。又はお前のように、元々持っているかどうか。

最後は時計塔から。

召喚科の一級講師、バーナード・ライナス・タウンゼント。

この名前はお前も知っているだろう。

というより、こいつが一級講師になった要因の一つはお前だからな、向こうもお前のことをよく知っているだろう。

触媒についてだが、特殊な召喚をする為、不要とのことだ。

聖杯戦争において、英^{サーヴァント}霊は七つの役割で召喚される。

基本となるクラスは、劍^{セイバー}騎士、弓^{アーチャー}騎士、槍^{ランサー}騎士、騎^{ライダー}乗兵、魔^{キャスター}術師、暗^{アサシン}殺者、狂^{バースカー}戦士の七つ。

その中で、劍^{セイバー}騎士、弓^{アーチャー}騎士、槍^{ランサー}騎士のクラスの英^{サーヴァント}霊は特に優秀とされ、俗に三騎士と呼ばれる。

そして、三騎士以外の四つの枠は基本となるクラスとは異なるクラス、エクストラクラスとして呼ばれることがある。

エクストラクラスの例として、冬木^{アヴエンジャー}の復讐者やルーマニア^{ルーラー}の調停者などがある。

ところで、特定のクラスで英^{サーヴァント}霊を呼ぶ方法は、一部のクラス限定ではあるが、存在する。

———それならば、エクストラクラスで意図的に、英^{サーヴァント}霊を呼ぶことも可能なのではないか？

私、バーナード・ライナス・タウンゼントは道教における、仙人、という存在に目を付けた。

仙人とは道教における不滅の存在であり、神と同一視されることも有る。

本来、仙人は不老不死であるために英霊の座に登録されることは無いが、何かの要因によって『仙人の力を失った、元仙人』だったら召喚は可能だろう。

そのような『元仙人』であっても、サーヴァントは全盛期の状態で招喚される為、『仙人の状態』で招喚される。

聖杯戦争のルールでは東洋の英^{サーヴァント}霊を召喚することは出来ないが、

その件はもう既に解決した。

これから行う召喚では、道教に關係しない、つまり中華を中心とした東洋の英霊以外が現れることは無い。

もし、仙人を呼ぶことが出来たのなら、そのクラスは救世者セイヴァーとなるかもしれない。

仮に失敗して、エクストラクラスで英霊サイヴァントを呼ぶことが出来なくても、『将来仙人となる』英霊サイヴァントを呼ぶことが出来る。

例えば、道教において神に祭り上げられた斉天大聖せいてんたいせいを救世者セイヴァーで呼ぶことが出来なくても、それ以外のクラスで孫悟空として呼ぶことが出来るだろう。

場所は、杉羽良にある霊脈の側に、半月の時を掛けて作成した地下工房。

そして、目の前には英霊サイヴァント召喚為の魔法陣。

さて、始めよう。

『三代目魔術師殺し』が今回の聖杯戦争に参戦する。

これを知った時、この聖杯戦争に参加しようと思ったことを後悔し、直後に大きな機会だと思いなおした。

この男の持つ『遺産』や『篡奪物』を手に入れば、我々の研究にどれ程の助けになるだろう。

無尽蔵に、無秩序に、無頓着に振るわれるそれら。

たとえ断片だとしても、私たちにとっては探求という暗闇に差し込んだ一筋の光なのだ。

そもそも、私が召喚科の一級講師になれたのは、あの恐怖の具現とでも言うべき男が、単独で『私たちの派閥が対立していた派閥』の主要人物を皆殺しにしたからだ。

その時殺された魔術師の中に、偶然私の前任がいた。

詰まるところ、私はただおこぼれを貰ったに過ぎないのだ。
実のところ、一連の行為の証拠も理由も分かかっておらず、犯人も正確には分かっていない。しかし、実行犯はほぼアイツで確定している。

現代魔術科のロードに匿われたことで、うやむやになってしまったが。

アキラ＝ピットオサカ
遠坂晶

この男には勝てない。

強固な工房を作り上げても、幾人もの手練れを集めても、あの男はその全てを突破し、撃破した。

数少ない例外として、当代の執行者最強の一角と言われる極めて強力な封印指定執行者がいるが、あの女でも殺すことは出来なかったと聞く。

因みにその時は、依頼者を皆殺しにして逃げ切ったと聞く。その中の一人が私の前任だったのだが………今だけはどうでもいい。

これらの事を総合すると、遠坂晶の打倒には究極の『個』を以って当たるしかない。

そう、例えば――。

光が溢れる。

聖杯戦争におけるサーヴァント召喚のシステムに則り、英霊の座から一人の稀人が招かれる。

そこにいたのは、小柄な人影。

――圧倒的な存在感を放つ存在。

――サーヴァント。

聖杯戦争において最も必要な要素^{ファクター}。

「問おう、――」

口を開く。その一言はこの領域を支配する。

「お前が俺のマスターか」

この瞬間。私、バーナード・ライナス・タウンゼントの聖杯戦争の幕が開ける。

時計塔に渡ることが決まった時、俺は一つだけ『わがまま』を言った。

——旅をしたい。

表向きの理由は父親の痕跡を辿りたいから。

本当の理由は知れなくてはならない事があったから。

自分は何が出来るのか、何をしなくてはならないのか。

——どうすれば、自分の身を守れるのか。

さて、旅と言ってもその経路は非常に単純。

——飛行機などの空路を一切使わずに時計塔に——

——否、ヨーロッパにたどり着くだけ。

東シナ海を船で渡り、ヒマラヤを踏破し、インドを横断し、紛争地帯を駆け抜け、鉄道に揺られる。

当たり前ではあるが、それなりの準備をして行ったにも拘らず、その旅は困難を極めた。

——そして、『旅を通して得たもの』が無ければ、俺は時計塔で何度も命を落としていた。

これは分かり切ったことだった。

そして恐らく、母親たちもだろう。

そうでなければ、単なる『わがまま』で二年間も留学を引き延ばす
はずがないのだから。

■■■■の息子。

それだけで、狙われる理由は十分だった。

いや、正確には『■■■■の魔術の全てを引き継いだ弟子』、だ。

————— 殺してでも奪い取る —————

時計塔は魔窟だった。

敵対者を殺す………だけでは足りなかった。

自らの力を、敵意を、恐ろしさを示す。

遠坂晶に戦いを挑んでも無駄死にするだけだ、という事を骨の髄ま
で理解させる。

その為に、襲い掛かってきた相手の魔術刻印や礼装を全て奪い、『残
骸』を中途半端に焼くことで証拠をある程度残す。

————— 奪った魔術刻印は、全て俺に移植した。 —————

俺の————— 遠坂晶の起源は『解析』と『構築』の二つ。

その二つを兼ね備える俺の起源を言い換えれば、適応。又は、学習。
どのような毒や精神汚染、拒絶反応も俺には効果を示さない。

それらの構造を『解析』し、その解決策を『構築』すれば、多少時
間は掛かるが、それらの全ては無力化される。

————— 本来、膨大な記憶を持つであろうそれらから読み取れ
た記憶は、人間性に乏しく、一辺倒な物ばかりで非常に薄く、何処か
味気ないものに感じられた。

とは言え、『一代で固有結界に至った魔術師』に匹敵する魔術師など
まずいないだろうし、『その男』より記憶の親和性（とでも言うべきナ
ニカ）が高い人物もない事から、当然の事ではあるが。

基本的に、遠坂晶の持つ魔術属性は『空』。

宝石の属性を利用することで多彩な魔術を操ってきた。

しかし、取り込んだ無数の魔術刻印に刻まれた魔術を全て『解析』し、新たに『構築』することで、ほぼ全ての属性及び系統の制度が飛躍的に向上した。

そして、当然のことながら反感を買う。――狙い通りに。

――その全てを叩き潰した。

一連の騒動は半年に渡って続き、終止符を打ったのは――最強の執行者。

初めて、魔術師に殺されかけた。

戦闘を初めてすぐに勝てないことを悟った。

俺の持ちうる全てを利用し、何とか逃げ延びた。

先に結論を言うと、正式な方法で彼女に命令が下されていたら、俺が死ぬのは時間の問題だった。

具体的には、依頼者――敵対者とその関係者ごと粛清した。

件の封印指定執行者結果があまり乗り気ではなかったことも有り、彼女には殺されなかった。

しかし、新たな敵対者が現れることを予想するのは非常にたやすく、俺は何れ死んでいただろう。

――教授が庇護してくれなかったら。

――俺への襲撃が始まってからの半年、魔術に関係する人の中で初めて、人道的な面で接触してきた人物だった。

それからの一年半で、教授に『魔術師としての振舞い』を叩きこまれた。

俺にとっての“魔術師としての祖”は彼以外には存在しないのだ。

—— 気が付けば、召喚予定時刻の直前となっていた。
物思いに耽ってしまふことは悪い癖であることは自覚している。
さて、気持ち切り替える。

先ほどよりも、幾分か高価な宝石を溶かし、中央の『魔法陣の跡』を『正式な魔法陣』に作り替える。

魔法回路を完全に励起。

戦闘時を除いて嚴重に掛けている、『■■■■の魔術刻印』の封印を完全に解く。

続いて、コートからの魔力の供給を開始する。

—— 始めよう。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

—— 詠唱を始める。

—— 魔法陣に、魔力に起因する光が強く走る。

「祖に——」

—— 一息。

「祖に我らが恩師、グレートビックベン☆ロンドンスター」

—— 彼なりの敬意を彼なりに誤魔化しながら、詠唱は続く。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

—— 一言一言区切りながら詠唱を続ける。その一言一言に思いを込めるように。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

—— 次第に魔力の消費が激しくなり、

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

——それに応じるかのように魔法陣の放つ光が強くなる。

「——告げる」

——大きく、息を吸う。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

——赤光が舞い、旋風を招く。

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

——激しい魔力消費に体が悲鳴を上げる。

「誓いを此処に」

——魔術回路が限界まで酷使され、体は激痛を訴える。

「我は常世総ての善と成る者」

——だが、それは当たり前前の事。覚悟は初めから出来てい
る。

「我は常世総ての悪を敷く者」

——この聖杯戦争に参加する事も、魔術師として生きるこ
とも。

「汝、三大の言霊を纏う七天」

——余りの光量に、その光が魔法陣が放つ光なのか、それ
とも単純に意識を失いつつあるのか分からなくなる。

——魔法陣は与えられた役割を果たすため、限界を超える
魔力をつぎ込まれながらも、最後の瞬間まで耐え抜いていく。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

——全てが弾け飛んだ。

最初に光が目と体を焼き、直後に暴風が襲い掛かる。

衝撃の激しさに、失いかけていた意識が一瞬で覚醒する。

——目を開けた時、そこには一人の騎士が立っていた。

まだ、召喚の余波である光と風が吹き荒れる中、その騎士は告げる。

「——サーヴァント、ライダー。召喚に従い参上しました。
問おう、——」

——貴方が私のマスターか。

それは、遠坂晶が見た記憶風景によく似ていた。

彼が、第二魔法の使い手に連なる家系の血を引いており、また、ほんの一端とはいえ、それを使いこなすことが出来ることが原因で偶然たどり着いた、何処かの平行世界における一幕。

目の前の騎士は、身長などの体格は異なるが、その時に見た女騎士とよく似ていた。

6 召喚直後——満天の星空の下で

土蔵。

土の蔵、という言葉の——イメージの通りに古めかしい、寂れた、時間に取り残されたかのような場所。

普段から十分に手入れされていてもその雰囲気は変わることが無く、何処か素朴な感じがする昔の風景の一部として残り続けるだろう。

だが、この時、この瞬間は違った。

埃に紛れていた焦げ跡は本来の——魔法陣としての役割を取り戻した。

その魔法陣の役割は、時空を超えて稀人を現世に誘うこと。

「——サーヴァント、ライダー。召喚に従い参上しました」

召喚による光芒と颯風の中、その騎士は口を開く。

「問おう、——」

その声は、吹き荒れる烈風にも関わらず、不思議と耳に通った。

——貴方が私のマスターか。

凜とした、耳障りの良い声。

その声に、茫然としていた自分を取り戻す。

一拍。

「私が——否、俺が貴方を招いた魔術師だ」

その一言を待っていたのだろうか。騎士は小さく肯く。

「その宣言を受けよう。」

——この時を以って、我が武威はマスターである貴方の為に振るわれ、貴方の運命は私と共にある」

——ここに契約は完了した。

何時の間にか風は収まっていた。

目の前に立つのは、一人の青い武装の騎士。

腰の辺りまで伸びた金砂の髪を持つ男性。

透き通るような緑の瞳をした男性。

少し目線を下すと、鎧に覆われているが、比較的大き目なことが分かる男性。

鎧に覆われていない箇所から見える四肢は細身で、しなやかという印象を受ける男性。

そんな、男性的魅力にあふれた青ね……ん………？

何処か違和感を覚える。

しかし、原因が分からない。

目の前の青年に『解析』を掛ける。

——失敗。

普段は失敗しない『解析』が失敗したことに、少しショックを覚える。

気を取り直して。魔術礼装である眼鏡をかけ、再び『解析』。

——失敗。

スキルまたは宝具による影響。

『解析』の結果に納得する。

それならば、どうすればいいのか。

英^{サイヴァント}霊のスキルや宝具に神秘で対抗するのは不可能に近い。

ならば、別のアプローチをすればいい。

例えば——、

「——マスター、どうしました」

コートから携帯を取り出そうとした俺に不審感でも抱いたのだろうか。

耳に入る声は涼やかな。かなり高めな、男性の声。

——分からない。

いや、気にしなくてもよい事なのだろう。

それ以前に、気にする必要そのものがなかったのだろう。

「いや、何でもないよライダー。……心配を掛けたのなら
すまない」

「いえ、問題ないですマスター」

「ならよかった。」

「……ああそうだ、自己紹介しないか。マスターって呼ばれるのは何となく抵抗があつて」

気まずさから話題の一環として、自己紹介を提案する。

それを聞いた騎士の反応は——表情は硬いまま。

「その前に「つだけ確認したいことがあるのですが」

失敗したかなあ、と思つていた俺に掛けられる声。

それに「構わない」と返す。

「それでは、この部屋の外に居る二人に見覚えはありますか？」

その一言で、何故ライダーが自己紹介を——真名を公開する行為を警戒していたかが分かった。

「——そのうち一人はおそらく魔術師。もう一人は……よく分からないのですが、我々サーヴァントのような気配を感じます。……マスター？」

——当たり前だ、見知らぬ人が居る前で真名を明かすことは自殺行為。しかもサーヴァントの気配を感じたのなら猶更だろう。俺が操られていて、ライダーを召喚した直後に礼呪を使う、という可能性すらあつただろう。

「その二人なら大丈夫だ」

先ずは安心してもらおう。

「二人は多分俺の母親で、もう一人は受肉した元キャスター。」

二人とも信頼できる人だから大丈夫だ」

それは当たり前前の事。それを怠つたなら、警戒されて当然だろう。目線を合わせる。

やがて納得したのだろうか、こわばった表情を少しだけ緩める。

「分かりました、その前に——」

——宝具を解除します。

「え」

光が溢れる——そんな錯覚。

抱いていた違和感の正体が分かり、霧散していく。

「警戒してしまい申し訳ありませんでした。」

今解除したのは、ステータスの一部を隠蔽し、更に外見から感じられるイメージを湾曲するもの。

今ならば、マスターはステータスを見て、私の真名を確認することが出来ます。

ですが、やはり自己紹介は面と向かって、自分の口で言うものでしょう」

長い台詞の間、茫然としていた。

「私の名は、ブリテン王アーサー・ペンドラゴンが娘、メローラ。」

これからの戦いにおいて、私の握る手綱が貴方を勝利にたどり着かせることを約束しましょう」

そう告げる。

その表情は、まだ少しだけ硬かった。

——青い武装の騎士。

旅に出るときに男装をした、という逸話。

——ライダーは女性だった。

「よろしく、ライダー」

そう返すのがやっとだった。

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

さて、次は貴方の番では」

「え、ああ………そうか、そうだよな……、よし」

自己紹介。

互いに初対面の状況で、相手にだけ自己紹介をさせるわけにはいかないだろう。

………しかも、相手が女性ならば特に。

「俺は遠坂晶。とおさかあきら晶の方が名前。」

既に知っているだろうとは思うけど、魔術師だ。

その実力はこの聖杯戦争の間に知ってもらいたい。……まあ、十分満足してもらええると思っではいるけど。

——願わくは、この戦いで俺の魔術が君を勝利に導く助けになることを」

俺の鍛え上げられたスキル『対人関係（女性）：A——』を駆使して作り上げた自己紹介。

——完璧。

短い間だけど、という前置きをしてから、「よろしく」右手を差し出す。

差し出された俺の手を見て、視線を上げて、視線を交える。

籠手を霊体化させた後、手を伸ばして——

「ごちらこそ、短い期間ですが——いえ、だからこそ、よろしくお願いします。アキラ」

しっかりと握りあう。

頬が緩むのが自分でも分かる。

訪れる沈黙。

包まれるは、短い静寂。

先ほどとは変わらない状況だが気まずさは全くない。

もう少しでもこの心地よさに浸っていたい、という欲求はあるが、その前にやらなくてはならないことも有るし、土蔵の外で待っている人もいる。

何方ともなく手の力を緩める。少々名残惜しいが、手を放す。

——さてと。

「それじゃアライダー、このまま狭い土蔵に居るのもなんだし、取り敢えずだけ外に出よう。」

早速ではあるけど、君に紹介したい人もいるしね」

「例の二人ですね。アキラ」

「そう、その二人。どちらも性格に難が有るけどいい人だから。まあ、

覚悟はしたほうが良いけど安心して」

「そ、そうですか……。まあ、貴方がそういうのなら安心してしまし
う。……警戒はしますが」

互いに、小さく笑いあう。

その笑いも収まり、「じゃあ、行こうか」と背を向け――

「二人きりの時は名前で呼んでもいいのですよ、アキラ」

その背中に投げかけられる爆弾発言に思わず振り返る。

其処にあるのは、イタズラに成功した、というような笑み。

まあ、実際成功しているのだが。

やられた、本当にしてやられた。

耳まで真っ赤になっているであろう顔を背ける。

……いや反則だろう、あの笑みは。

豊富な女性関係（偽）を以てしても、余りにも魅力的だった。

「何というか、その、ライダー」

取り敢えず今の内はクラス名で呼ばせてもらうよ」

「今の内は、ですか」

「う……。まあ、そういう事。」

何れはそういう風に言い合えるように成れたらいいな、とは思っ
けど今はこのままで。

何というか、取り敢えずは……。……そうだな――

一旦区切り、息を整え、言いなおす。

「取り敢えず今は、『旅の途中で偶然出会った、目的地が同じで、その
場の流れで目的地まで一緒に行くことになった、やけに気の合う旅
人』という感じの関係でお願いしたい……。かな」

相当な長文をほぼ最後まで息を切らすことなく口走る。

……。……どれだけ必死だったのだろうか。

何となくだが、後ろで笑っているような気配。

そのまま歩き出し、土蔵の扉の鍵を開ける。

――やれやれ。

まさか、ボーイと名乗ることに抵抗が出来て来た頃に、金髪ロング

碧眼巨乳美女とボーイミーツガールするとは思わなかった。

ゆつくりと扉を開ける。

満天の星空が放つ光が、土蔵に入ってくる。

その光がこれから始まる戦いに対する祝福のように思えた。

一生に一度歩かないかの出来事だ。

不謹慎かもしれないが、せっかくの機会なのだ。

唯でさえ短い期間なのだ。思い入れのあるほうが良い。

願わくは、宝石箱を開けるような、万華鏡を覗き込むような、満天の星空を見上げるような――――そんな輝かしい体験にしたい。

心からそう思う。

「―――性格に難が有って、悪かったわね」

「誰だって、召喚を出菌亀されたら文句の一つでも言いたくなりますよ」

土蔵から出る。

待ち受けていたのは二人の女性。

赤と紫。

―――赤。

母親。俺を育て上げた、人生の師。

宝石翁の系譜である魔導の名門、遠坂家の6代目当主。

―――紫。

師匠。俺を鍛え上げた、魔術の師。

第五次聖杯戦争において受肉を果たした、神代の魔女。
信愛と敬愛。感謝と信頼。

俺の原点であり、目指すべき終着点。

常に味方で在って欲しい、何が有っても敵対したくない。

———そんな二人。

「———で、何処から聞いていたんですか」

「何処からってねえ」「最初からとしかねえ」

「ぐあああ……………」

「大丈夫ですよ、アキラ。一人称を言いなおした時の、決意に満ちた顔はとても素敵でしたよ」

「ら、ライダーあああ！何言ってるの、ホントに何言っちゃってるの！」「ライダー。貴女、分かっているわね」「そうね。アンタとならおいしくお酒が飲めそうだわ」「結託された!」「よろしくお願いします。お義母様方」「フルコンボ!」……………」

「———貴方は相変わらず^{からか}揶揄いが有るわね」

「揶揄われる方は堪ったもんじやないんですけどね……………」

閑話休題。

散々玩ばれてしまった。

そんなことよりも、先にやるべきことが有るのに。

……………本当に沢山あるのに。

「さて、遅れてしまいましたがお久しぶりです。師匠」

「ええ、お帰りなさい。まあ、自覚が有るようだけど、もっと早く、自分から会いに来るべきだったわねえ」

「やっぱりそうでしたか……………」

「まあ、強いて言うなら、もっと頻繁に連絡するべきではなくて？」

「はい……………おっしゃる通りです」

四年前からほとんど、というか全く変わってないように見える。

本来、英霊は完成した状態であり、召喚された姿から容姿が変化す

ることはほぼない。

だが目の前に居る女性は受肉したことで、その限りでは無くなっているの、26年という年月が積み重なっているはずなのだが、“妙齡の”という形容詞が相応しい外見を保ち続けている。

それが、魔術に依るものなのかは分からない。………まあ、この世界には知らない方が良い事も有る、という事なのだろう。そういうことも山ほど有るのだろう。多分、きつと。

「殺されたいのかしら？」

「ごめんなさい」

基本的な扱い方は、向こうでライダーと話し込んでいる母親と同じである。

「……さて、サーヴァント英霊を召喚してどう思ったのかしら？」

「正直、圧倒されました」

「そのようね。人生経験で」

「………蒸し返さないでくださいよう」

「このやり取りからも懐かしさを感じる。」

「まあ、概ね成功といっても問題ないのではなくて。」

サーヴァント英霊召喚用の魔法陣を補強することで、ステータスが上昇した状態で召喚する。

魔法陣の補強をしていない場合との比較が出来ない以上、確かなこととは言えないけど、効果はあつたと視ていいでしょう。

強いて言うとしたら、魔力のロスが多すぎるぐらいかしら。

いくらコートが工房としての役割を果たすとは言え、内蔵している魔力炉の出力にも限度があるわ。

貴方の事だからメンテナンスはしているのでしょうけど、第二魔法の一端や虚数属性魔術、神代の魔術を使って作成した、この時代の魔術師では再現できないようなレベルの礼装なのだから、幾ら修復機能が付いているとはいえ、もう少し大切に扱いなさい」

「……………おっしやる通りです。はい」

指摘が的確すぎて反論が出来ない。

魔法陣をチラ見しただけでその効果を見抜き、そこから必要とされる魔力の量を量り、魔力のロスからコート^の酷使具合まで憶測する。

比べるのが無駄とは言え、正直恐ろしいぐらいに的を得ている。

幼い頃から身に染みて知っているとはいえ、その技術は文字通り、時代通りの神業。

果たして現代の魔術師が、『魔術的にオーパーツ』^とでも言うべきこのチート染みたコートの仕組みを考えるようなレベルに至ることが出来るのだろうか？

そもそも、『ほぼ無限に収納することが出来る』なんて代物が^{彼女の時代}にあつたのかさえ分からないのだ、現代^{この時代}に在っても新たな物を作り出している可能性があり、その可能性を否定できない。追いつくべき相手の技量すらも性格に推測できないのだ、追いつくのはほぼ不可能と断言しても良いだろう。

だからと言って、諦めなくてはならない、という事ではないが。

「さて、師匠はライダーについてどう思いますか？」

「それを私に聞いて？」

出来の悪い生徒を見るような呆れた目。

まあ、言いたいことは分かる。

一部の例外を除いて、^{サーヴァント}英霊の性能そのものは^{サーヴァント}英霊同士で試すしかない。

そして、単なる性能では測れない部分は聖杯戦争という短い期間で知るしかなく、こちらの方が重要な要素であることが多い。

——という事を言いたいのだろう。

分かっているなら聞くな、^とでも言いたげな目と視線が合う。

……さて、ならばどうすればいいのか。

まあ、色々と試すしかないだろう。

「——取り敢えず、郊外の森に結界張つといてください」

——自分自身で。

「そういう事。まあ、結界は張っておくわ」

「お願いします」

「——まあ、あのライダーと貴方とは相性のいいのではなくて」

ライダーで召喚されている、という事から持っている宝具はある程度まで予想できる。

メローラという英雄が成し遂げたことを考えると、突破力は無いが、不測の事態には強いことが想定される。

俺のように、英霊が相手でも不意を突かれなければならば十分戦える、逆にこちらが不意を突けば十分打倒しうる、というようなイレギュラーな魔術師にとつてはありがたい存在。

ライダーにとつても、狙撃は無効にできる、突破力が無いことで戦闘が硬直状態に陥っても、あなたの支援が有れば打開できる可能性が十分ある。

互いの弱点を補強できるだろうし、性格的な相性も今のところ問題はなさそう。

「——むしろ、この英霊を狙って召喚した、つていう方がしつくり来るぐらいには」

そう言つて、締めた。

先ほどまで、何となく感じていた不安。その事を『上手に誤魔化した同じぐらい何となくな希望的観測』で打ち砕いてくれた。

正直ありがたい。

「さて、そろそろ向こうも終わる頃のようなね」

「……………ああ、そういう事だったんですか」

俺のことは母さんが、ライダーの事は師匠が説明する。

非の打ちようのない配役。

「ええ、察しの通り」

相変わらずだなこの二人は。

……………やっぱりこの人たちには敵わないのだろう。

「——流石です。正に年の功」

「……………どうやら殺されたいようね」

—— 全く、憧れや照れを隠す時に、相手を揶揄って誤魔化す癖は変わらないよね。

—— ちよつ、なんてこと言うんですか。

—— さつきまでの発言と比べたら優しい方でなくて？

—— そんなことよりも、早めに体を休めるべきよ。そろそろきついのでしよう。

—— バレてました？

—— 貴方が分かりやすいだけの事よ。

—— 結界は張っておくから早く寝なさい。

—— 了解です師匠。それじゃあ、後はお願ひします。

—— 言われるまでもないわ。

—— そうですか、安心しました。

—— ええ、言われるまでもなく押し付けるわ。あなたの母親に。

—— ですよね。まあ、母さんも同じこと考えてると思うけど、どちらがやっても安心できるので大丈夫でしょう。

—— ……………、それはワザとなのかしら？

—— さあ、どうでしょうか。まあ、よろしく言っておいてください。

—— 全く。分かったから早く寝なさい。

—— そうします。それじゃあ、また朝に会いましょう。

翌朝—— 朝食の場にて。

「おっつはよう、皆ー。いやー昨日はごめんねえ、酔いつぶれちゃって。」

—— ところで■ちゃん、今日の朝ご飯は何？

—— つてこの金髪ロング碧眼巨乳美女は誰えー！！！！」

7 旅支度・前編 ———— 長い間家を空けるな

ら、確認が必要な事。

——— 火花が散る。

比喩ではなく、現実には

切り結ぶは短槍スピアと双剣。

直線は連円に防がれ、楯円は螺旋に弾かれる。

——— 現在の状況は硬直。

騎乗兵は馬上槍ランスでも騎乗剣ロングソードでもなく短槍スピアを手に持つ。

対して、若き魔術師が握るは黒白の比翼。

手綱ではなく短槍スピアを握っている、仮初めの槍使いが振るうは神秘の未だ色濃き時代に磨き上げられた槍捌き。

女騎士の握る聖槍は魔術で鍛えられた剛体内、宝具に関わらない物ならば、一撃で破壊することが出来る。

それに対し、同じく仮初めの剣使いが振るうは欠ける事の無い連理。

中華に伝わりし、とある宝具——— 史実本では、担い手のいない筈の其れ——— を投影した物。その質量は聖槍の加護をすり抜け、受け止める。例えば片翼が強引に破壊されたとしても、その数瞬後には両翼は再会を果たしている。

二人にとっての一切は途絶える事の無い剣戟に集約される。

月光のように淡い青光を放つ聖槍と夫婦剣の異名を持つ陰陽剣。
それぞれの軌跡が交差する。

「え、誰って……、ああそうか。」

先生にはまだ説明していませんでしたね、本当は昨日の内に話そう
と思っていたんですけど酔いつぶれちゃいました……………」

こちらの女性は大学の先輩です。

専攻が民俗学で、一度日本に来てみたかったらしくて――

――

翌朝――朝食の場にて。

――取り敢えず誤魔化す。

自分で思うのもなんだが、相変わらずよく動く口だ。

台所で皿を洗っていた■姉さんの協力を得て、疑問点が多いが、無
理の無い（多分）理由を手ぶりを交えて納得してもらおう。

「――という訳で、何日かこの家に滞在してもらおうと思う
んだけど……………いいかな？」

「はあ……。まあ、いいわ。」

そういえば、■の時も似たような事があったし、■ちゃんも■
さんも■■ちゃんも賛成しているなら私が反対しても仕方がない
わ。

それに、晶君が連れてくる女の子なら大丈夫でしょう」

「ありがとう、先生。」

俺と先輩はそういう関係じゃないけど、本当にありがとう」

「まあ、そういうことしておくわ。」

……………じゃあ、そろそろ時間だから、私は行くわ」

「え、本当だ。いってらしゃい、先生」

弁当を渡し、玄関で先生を見送る。

先生の説得に協力してくれた■姉さんは、そのまま台所に戻ってい
く。

――さてと。

霊体化しないで、ご飯を食べているライダーを見る。
因みに、■姉さんの服を着ている。

「……………おいしい?」

「……………(くくく)」

「そっか…………」

口の中いっぱい頬張る、先生曰く『金髪ロング碧眼巨乳美女』は
幸せいっぱい、という感じに頷く。

霊体化していない理由とか、一般人に姿を見られた事とか、色々と言いたいことも有ったのだが……………。何というか、気が抜けてしまった。

サーヴァント
英霊。

人々の信仰が具現した存在。

神話伝承伝説逸話、そんな神秘と幻想の霧に霞む世界から招いた稀人。

当然のことながら、外見や価値観は現代の其れらとは異なる場合が多いが、『物語から飛び出してきた』という文言がそのまま当てはまるであろう彼らは人を引き付ける。

その外見で、精神性で、存在そのもので……………。

—————まあ、なんというか。

中てられた、と言うべきだろうか?

……………それとも、魅せられた、だろうか。

空いた茶碗にご飯を盛りながら、そう思った。

—————さて、食べ終わって少ししたら出かけよう。少し、付き合っしてほしい事がある。

……………(もぐもぐもきゅもきゅ、ごくん)、

分かりました。ところでアキラ、その……………ですね。

—————ん、了解。味噌汁もどうだい?

……………お願いします。

—————まあ、いいか。

——もう少しだけ、母さんのことを起こさないでくれませんか？

——ええ、そのつもりです。

何時もの事ですけど、余り無茶をしすぎないでくださいね。

——……………善処します。

——はあ……………。ほんっつとうにいつもの事なので半ば諦めていますけど、晶君がいくら頑丈だとしても限界はありますし、そもそも魔術に絶対は無いですよ。

そして何よりも、晶君の事を心配している人もいることを忘れないでください。

——……………ごめん、■姉さん。

——痛々しい顔で謝らないでください、申し訳なくなりません。

——まあ、分かっているんだけどね。軽い確認しからしいから、大丈夫だよ。

——……………『今日は軽い確認しからしいから、多分大丈夫だと思うよ』、ですか……………。

——はあ、……………ちゃんと帰ってきてくださいね。

——分かりました。出来るだけ早めに帰ってきます。

——はい、早めに帰ってきてくださいね……………本当に了解です。

——それじゃあ、行ってきます。

——ところでアキラ、何処まで行くのですか？

——もう少し、かな。

——そうですか……………これは結界ですか？

——そんな感じ、対魔力で壊さないでね。

——はあ……………。

「——それで、何をするのでですか？」

「武装を編んでいる状態で言われても、分かっているんだろ、としか言いようがないかな」

場所は空地——アインツベルンの森郊外の森に敷かれた結界の中。

「という訳だ。少し付き合ってもらうぞ」

空地は大体50メートル四方。

二人の間合いは約25メートル。

「構いません。私としても貴方の実力は知りたかった」

速坂晶魔術師の服装は何時も通いな黒のシャツとズボン、ルーンが刻まれたブーツと手袋グローブ、高位の魔術礼装である紅のロングコート。

普段と異なるのは左腰に帯びた細身の剣。柄頭ポメルには柔らかな青光を放つ宝玉がはめ込まれた細身の西洋剣。

対するは——サーヴァント自らの従者、ライダー騎乗兵。

メローラ彼女の呼称である『青い武装の騎士』の通り、サーコートの色もそれを覆う軽鎧白銀の装飾も青。左腰に提げられた騎乗剣ロングソードの鞘や柄もまた青。

「こちらから誘っておいてなんだが……先手は貰うぞ、ライダー」
「ええ、分かりました」

青年は右手を俗にいう“指鉄砲”の形をとる。

開幕を告げるは黒球の弾幕。

フィンの一撃——ガンドと呼ばれる北欧の呪術の密度を上げ、物理的破壊力を帯びたもの。

術師の実力に依るが、彼が放った弾幕の一撃一撃が鉄板と穿ち、大岩を砕き、大木を押し折るほどの威力を持つ。

それに対し、ライダーは不動。
明らかな殺意を帯びた漆黒の呪詛は——触れた瞬間に霧散する。

対魔力——『正式な』聖杯戦争において、多くのサーヴァントに与えられるスキル。

その効果は文字の通り、魔術の軽減もしくは無効化。

ランクによりその効力は差があり、今次のライダーメローラのそのランクはA。如何に高い破壊力を持つとも、そもそもが単純な魔術。Aランクの対魔力を突破するには神秘の濃さが足りない。

そして其れは、放った魔術師も承知の事。

弾幕の奥、ライダー騎乗兵の目の前に迫るは紅玉の鏃を持つ矢。

宝石魔術の起点となる宝石を『強化』と『錬金』の応用で変形させ、『投影』した矢幹やがらと矢羽に接続した物。

宝石魔術——蓄えられた魔力を開放することで、高価な宝石の消失と引き換えに、瞬時に大魔術を展開することも出来る。このことから、魔術師の戦闘の際に使われることも多く、それは聖杯戦争も例外ではない。

「叩Fきつlける熱は激情aの其れmに似て!!」m

魔力が込められた紅硬玉ルビィが、魔力の開放という負荷に耐え兼ね灰になる。

解放された魔力は主の詠唱オーダーに従って神秘を紡ぎだし——
顕現するは爆炎。

灼熱を帯びた暴風を叩きつける。

——目くらまし。

ライダーは自身の経験と直感に従い、実体化させた短槍スピアを後ろ手に回す。

響く金属音。——状況はつばぜり合い。

両の手それぞれに握っているのはコートから取り出した片手剣。

タングステンを魔術的に加工し、彼が自身の手で鍛え上げた高位の魔術礼装。

質量鋭度耐久重心形状密度組成結合効率質感外見——全
てにおいて申し分なし。

そんな自慢の一品は英サーヴァント霊の持つ短槍スピアに——宝具である聖槍に防がれる。

魔術師は短槍スピアを通して双剣に与えられている臂力を利用し、大きく距離を取る。

その距離を一息で詰めるライダー。

放たれる刺突を双剣を盾にして受けとめる——つまり
だった。

月光を思わせる蒼光を帯びた穂先が触れた瞬間、崩壊する双剣。

——ザ・ホーリーランス
『破岩の聖槍』。

ライダーの旅の目的の一つであり、その過程で手に入れることにな
る聖槍。

十字教キリスト教における伝説の槍の名声あやかに肖あやって名付けられた名前を持
つ、聖性を帯びた槍ランス。

彼女の逸話において、恋人に掛けられた三つの呪いの内、魔術的に
『硬化』された岩を完全に破壊した。

この宝具の効果は『穂先で触れた物のうち、宝具に関する物を除い
て、魔術によって加工、強化された剛体を強度を無視して砕く』とい
うもの。

——T r a c e
「Trace 図面読込、即時投影」

そして、寸止めされるつもりの刺突は金属音と共に弾かれる。
聖槍の穂先を弾いた武器——それは即ち宝具。

その事実に気付いたライダーは、自らの召喚者である少年を——
——彼が握る双剣を見る。

その双剣が放つ剣花は明かに宝具のそれ。

即ち、この魔術師は——
——ゴッズホルダー
「ゴッズホルダー 伝承保菌者。いや、先ほどのは——」

——宝具を魔術によって創り出した？

「正解。半分ぐらいだけどツ」
投擲。

両の腕に握る煌めきを躊躇なく投げる。

その行為に一瞬驚き、宝具の効果が未知数だったことから、回避を
選択。

強力な回転スピンを掛けられた曲刀は弧を描いて飛来する。

——その軌道を予測。

一步後ろに下がることで、迫りくる凶刃から逃れ
スキル『直感』が働く。

目の前を通り過ぎる中華風の短剣。

そして、大きく躲すことを予想したのだろうか——そばを
すり抜けていく、六本の投擲用と思われる細身の刃。

『直感』の原因は未だ不明。

だが、このままではマズい。

自らのマスター——遠坂晶。

先ほど彼は宝具を作り出した。

このことがどれ程の異端なのか、それは文字通り『計り知れない』だ
ろう。

それよりも今考える——否、感じるべきは剣戟の果ての
事。

大事なものは、どれ程の種類の宝具を創り出せるのか、という事。

今の双剣のみなのか、あと数種類なのか、それとも無限に保有して
いるのか？

それが分からないとかなり厄介だ。

何せ、距離を詰めるべきなのか、それとも離れるべきなのか——

——それすらもハッキリとしない。

間合いが分からない相手と戦うことは困難を極めるだろう。
……なるほど。

つまり目的は『適切な間合いを悟らせない事』なのだろう。

「宣告。風を超え、理を乱せ」

詠唱。

魔術師の詠唱命令に従って、物理という絶対が覆される。

その身に回転を加え、軌道を変えて、細身の刃が——聖堂教会に
伝わる、魔力で編まれた刃と漆黒の柄を持つ、浄化の概念礼装『黒鍵』
が——迫りくる。

「Trance 凶面読込、即時投影」

続いて唱えるは宝具を創り出した時と同じ文言。
フレーズ

行使される術理は、先と同じ輝きを魔術師の両手に創造する。

——同じ宝具を創り出した!?

その疑問から、魔術師の持つ『異端』の正体についての手がかりを掴むが、今、この瞬間に真相それに至るまでの時間は与えられていない。彼は創造した宝具に膨大な魔力を注ぎ刀身を肥大化させ、直後先ほどと同じように無造作に投擲する。

魔術師が初めに投擲した双剣が、強力な回転スピンに由来する独特な軌道を描き、背後から奇襲を仕掛けてくる。

魔術によって、退路を断つように軌道を変えた黒鍵が形成するは——
——正に剣の檻。

剣の檻を『魔力放出』で強引に吹き飛ばしても、特殊な逸話概念を内包しているであろう黒白の双剣は強引に突破し返すだろう。

——剣の檻ごと叩き切るように飛来する黒と白、二重の
大刃ギロチンが正面から迫る。

観客のいない公開処刑、というある種滑稽な茶番劇。

その可笑しさを訴える変わりに、無辜の騎士は断頭台からの脱出を試みる。

具体的な方法として——ライダーが宝具以外の武装として保有している円ラウンドシールド 盾で黒鍵を防ぎつつ、魔力放出で強引に突破する。

しかし、その強引な脱出方法は行われることは無かった。

——宝具を創り出せるのなら、破壊することも出来る——

強引極まりない理屈だが、彼——否、彼らにはそれが成立した。

——壊れた幻想ブローケンファンタズム。

宝具を自壊させ、内包された神秘を使い捨ての、爆薬のように作用させる、絶対の禁忌。

宝具。

英霊の逸話そのものが具現したもの。

大なり小なり成し遂げたことがあるから英雄になるのであり、その『成し遂げたこと』は彼らにとっての誇りであり、同時に自己同一性そのものである。

文字通り、無限に剣を製造出来る、という特異性を持っているから出来うる行為、絶技、ある種の極地。

———そんな、英雄ではなく魔術師だからこそ出来る、『奥義として行使される異端』。

ブローケンファンタズム

壊れた幻想——— 宝具を自壊させ、魔力と神秘の爆発を引き起こすこと———

——— を行った直後、立ち上がる爆炎に対して、投影した弓を構える。

秒間3発、3秒で10矢。強引に吹き飛ばされつつある爆炎の中に速射。

——— 手ごたえは皆無。恐らく全て弾かれた。

——— 膨大な魔力を感じる。

それは自身が契約した英霊と同じもの。

——— 煙炎が払われる。

スキル『魔力放出』。

ライダーが保有するスキルの一つであり、その効果は『武器や身体に魔力を纏わせ、瞬間的に放出することで能力を向上させる』という物。いわば魔力によるジェット噴射である。

——— その応用。

ブローケンファンタズム

壊れた幻想によって叩きつけられる魔力——— それを『魔

力放出』を以って、強引に弾き飛ばす。

「——— 驚きました。まさか魔術によって宝具を再現、複製するだけではなく、自壊させることで込められた神秘を純粋な破壊にのみ転化させるとは……………」

「失望した、若しくは怒りを覚えたか？ 例え投影した偽物とは言え、俺は英雄の誇りを使い捨ての爆弾にしてんだからな」

——魔力の烈風を受けて、靡き流れる金砂の髪。

纏う蒼銀には翳一つなく、その立ち姿には一部の毀も無い。

微かな笑みを浮かべる、そんな瞳と目線が合う。

「いえ、例え同じことを英^{サーヴァント}霊が行ったとしても、咎める英^者霊はいないでしょう」

「だが、俺は魔術師。英^{君たち}霊のような立派な誇りは持ち合わせていない。あるのは人として当たり前の価値観だけだ。そんなありふれた存在に過ぎないものが、英^{君たち}霊の誇りそのものを汚している。そのことについて、何も思うことが無い、という事は無いのではないのか？」

「皮肉ですか？ 似合いませんよアキラ。逆に聞きますが、貴方は宝具を使うことに何か負い目でもあるのですか？ この時代の魔術師なら、そのような事を些事として気にしないでしょ」

「……………」

「沈黙は肯定と取りますよアキラ。仮に、英^者霊の誇りである宝具を勝手に使われることを気に食わないような英^{我々}霊なら、英^者霊の存在そのものを勝手に使う聖杯^{儀式}戦争そのものに参加しようとは思わないでしよう」

目の前の騎士は続ける。

「……………そもそも、確かに宝具は完成した存在である英^者霊にとつて、生前に——英雄だった頃に成し遂げた偉業の象徴。

確かにそれは掛け替えの無いものであるでしょう。ですが、高が誇りの為だけに失ってはならない物だって存在するのです。我々が聖杯^{儀式}戦争に参加するのは誇りよりも大切な物を手に入れるためであり、それは貴方たちでも同じでしょう」

そう続け、絞めた。

その言葉には重みがあった。

そして、そう告げる姿は光り輝いて見えた。

特殊な条件が揃ったから英雄に成るのではなく、彼ら自身の在り方そのものが英雄を形作るのだ——そう思わせるには十分すぎる立ち姿だった。

「……………凄いな」

普段の誤魔化しも出来なくなるぐらいの感傷。

「いえ、凄いのは貴方でしょう。生身で我々、サーヴァントと渡り合ったのですから」

それに気付かなかったのか、それとも気付いていたのに気付かない振りをしてくれたのか——其れは分からない。

「さて、先ほどまで私を楽しませてくれたのです。まさか、もう終いということはないでしょう?」

「ああ、そうだな……そうだよなライダー!」

勿体無いよな、終らせるなんてなあ!!」

「ええ、そうでしょうとも。次はこちらから行きます」

「来い、ライダー!!」

迫りくる青い疾風。

寸止めするつもりなどない、神速の突き。

——迎撃。

即座に手になじんだ双剣——中華に伝わる夫婦剣。黒い刀身の陽剣・干将、白い刀身の陰剣・莫耶——を投影する。

俺の、遠坂晶の父親は英雄である。

本来矮小な一個人の力で、人の摂理である戦争——正しくはその一つを終結に導いた男。

死ぬことを以って英雄が完成するというのならば、彼の最後は英雄としての其れに相応しい物であろう。

そして俺はその力を受け継いだ。………受け継いでしまった。

受け継いだ事は、その成り行きを含めて後悔や不満は無い。

だが——どうしようもなく不安であった。

本当に、自分なんかを受け継いで良かったのか。

■■■■の息子の中で覚悟が出来ていたのが自分しかいなかったから受け継いだのであって、本当ならばもっと相応しい人物がいたのではないのか?

そして、もしそのような人物がいるのならば、彼または彼女ならば、人を傷つけることでしか人を救えない俺よりもっと上手く、優し

く、平和に人を救えるのではないのか？

自分に対して自信がなくなつた時、そんなことを感じる事が多かった。

そんな、言わば劣等感染みた蟠わだかまりりを見抜き、跡形もなく砕いてくれた。

——英雄に成るための条件は、優れた血筋や武器ではなく精神性そのものである——

——ならば、悩んでいる暇などない。今の自分が相応しくないのならば相応しくなれば良い。ただ、それだけの事だったのだ——

無自覚に伴っていた、自身が振るっている優れた血筋や武器に対する、遣る瀨無ちゆちよい躊躇ちゆちよや負い目といった陰り——今やその影や残滓すら感じられなかった。

存在するのは——

——自らが、英雄である父親から受け継いだ技能を存分に振るえる相手が目の前にいる事——

——その相手が、長年抱いていた蟠わだかまりりを解消してくれた恩人である事——

——そのことに対する感謝と感動、歓喜と爽快感。

ただそれだけであった。

今感じている興奮を、喜びを、心の高鳴りを——存分に叩きつける。

心の熱を武器を通して伝えるように。

斯くして、二人の戦いは冒頭に至る。

そして——

「……なあ、ライダー。サーヴァントに、疲れっ……てない、の？」
「ええ、私たちは十分な魔力供給さえあれば、どのような状況でも十全な力を発揮できます。精神的な物とはかく、肉体的な疲労はしませ
ん」

「そつ、かあ………」

俺は仰向けに倒れていた。

細かな切り傷はあるが、ほとんどは戦闘中に治っているし、今現在も急速に治りつつある。

——完敗だった。

特に心情的、技術的な面で。

聖杯戦争において、英霊サーヴァントに与えられるクラスの一つである
騎乗兵ライダー。

その特徴は——騎乗物、主に幻獣の召喚。

其処から考えられる対策——近距離戦闘での高速戦闘。クロスレンジ

今回の戦いは……単純に相性が良かったからに過ぎない。

もしかしたら、百歩譲ってくれば、結果だけで判断するならば、辛うじて引き分けになるのかもしれない。

——だからこそ、実力の差を感じさせる。

嫌と言うほどに。

ただ——

「……楽しかった、なあ」

「そうですね、アキラ」

——すごく満たされていた。

「……まったく、二人して何をしているのかと思えば……」

ふと、影が差す。

発動に気が付かないほど自然な空間転移。

「やあ、師匠。……おはよう、ございます」

「凄まじい程の精度ですね。美しいと思えるほどに」

「……私は呆れたわ」

ははは……。口から出るのは乾いた笑い声。

対する薄紫の表情は冷ややか。

「全く、サーヴァントの性能を知りたいのなら、わざわざ戦う必要は無いでしょうに。」

まあ、細かい場面を想定して実験的にやる手間を考えれば、確かに効率的ではあるわ。

貴方に掛かる負担のことごとくを外視すれば」

「はは……返す、言葉が無い、や。まあ大丈夫、師匠。治癒はいらない」
「でしょうね、症状は単なる疲労と魔力切れ。暫く休めば回復するでしょう」

「了解。じゃあ、もう……ちよつとだけ、このまま……で……」

「——さて、どうだったかしら？」

「素晴らしい」即答。「この時代の戦士の实力は知りませんが、私たちの時代に在っても、運が良ければ一角の英雄に成れたでしょう」

「そう——」伝説の魔女は何処か満足げに、「——現代において、戦闘という面でなら最高と言っても過言ではないでしょう」

「そうですか」

沈黙。

互いに、目の前で寝ころび、寝息を立てている少年に対して思うところがある。

その共通認識によって生じた時間的、对人的な間隙。

「——その坊やは色々な物を背負っている」

沈黙という名の帳を破つたのは、神代の魔術師。

「貴女のようにAランクの対魔力を所有している相手に戦いを挑むぐらいには自信も好奇心もある。」

自身の持つ力がどの様な類の物なのか、周りにどう思われているのか、そのことを正しく評価している。

今まで知らなかった事に対しても恐れずに挑み、新たな価値有る物を手に入れる。そのための度胸も経験もある。

——だからこそ不安だった」

視線を合わせる。

今次の騎乗兵は無言で続きを促す。

受肉を果たした何時かの魔術師は領き、続ける。

「自分が何をしたらいいのか、自分よりも相応しい人が居るんじゃないか。

そんな答えの出ない、一生考え続けなくてはいけない泥沼に嵌まって、抜け出せなくて、苦しんでいた。

『自分には何が出来るのか』じゃなくて、『自分がやってもいいのか』。

幸か不幸か、英雄の子として生まれたからには、その将来は——少なくともその方向性はある程度決まってしまう。

そのことを受け止めきることを決め、近い将来、自分の精神がその重さに耐えられないと悟って、自分から強固な『殻』で自分を守ることにした。

そして、その『殻』は丈夫だった——丈夫過ぎた。当の本人にも『中身』が見えなくなるぐらいに「

区切る。

感じ取る。

頬の強張りをほんの少し緩める。

——続ける。

「世界中、と言うと過言かもしれないけど、二年ぐらい旅をした。

その二年間は多くの物を手に入れることになった、貴重な経験。

そして、そこからの半年——欲望の渦に飲み込まれ、揉まれる。経験してはならない暗黒。

自分が敬愛する英雄から受け継いだ輝き、それを醜い物の為に使う日々。

心身共に軋むような行為、その連続。

いくら丈夫な『殻』で守っていても、その『中身』に衝撃は伝わってしまう。

「そして、泥沼に足を取られた——」
ひびきを折り、手が届くようにする。

そのまま頭を撫でる。

優しく、慈しむように。

撫でられた、紅の少年の表情は安らかだ。

「——その泥沼から脱出することは出来ない。

長い時間を掛けて、付き合い方を覚えていくしかない。

諦める、割切る。——そんな感じにね」

頭を上げ、再び目を合わせる。

思いを伝えるように。

「——貴女には感謝してるわ。

意図しなくても答えを示してくれたんだから。

それが『考えてもしようがない』って言う開き直りに近い答えでも

ね」

神代の魔術師の偽りなき感謝。

「なるほど、そういう事だったのですか」

騎兵は——神秘溢れる時代に世界中を見て回った旅人は

受け止める。

「貴女も知っての通り、私は意図して行ったことではないのですが……。

私が彼の成長の一助になった、と思うと嬉しく思います。

今感じている誇りと共に受け取りましょう。心優しき伝説の魔女

よ」

「……本当は魔女と呼ばれるのは好きではないのだけど、今回は例外のようね」

「なるほど、本当に長い付き合いなのですね」

「……………?どういうことかしら」

「誤魔化し方がよく似ています」

ふふっ、と悪戯に成功した子供の様に笑うライダー。

そう言う貴女もね、と返す元キャスト。

「さて、私がここに来たのは貴女に渡したいものがあつたからなのだ
けど——」

——ほっ……本当にこの時代の女性はこのような洋服を
着ているのですか!?

——ええ、そうよ。……何処で、とは言わないけど。

——なツツ。騙しましたね、キャスト。

——ふふ……、騙せれる方が悪いのよ。

——くっ……。しかも脱ぎづらい……!

——強引に脱ごうとすると、破れてしまうのだけど……。

——そ、そんな悲しそうな顔をしないでくださいキャスト。
ター。

——その……こちらが悪いような気になってしまいました。

——本当に正直なのねえ。

——だ、騙しましたねキャスト! 果たしても、しかも同
じような手でツツ!

——いい加減怒りますよ。

「——いや、何してんのさ。二人とも」

目が覚めたら、目の前で繰り開かれていた寸劇。

いや、何というか……。

「おッ……起きていたのですかっ、アキラ」

「あら? 気付かなかったのかしら」

青を基調としたドレス。

それは成熟した女性という事を前面に押し出した物……では
なく、可憐という印象を与える。

師匠が選んだのだろうか? ……らしい、と言えばらしい選択。

ライダーは男装をして旅をした、という逸話からなのか、サーコー
トを始めとした男性的な恰好をしていた。

それゆえに今の恰好との落差はすさまじいものが有る。

それに、ライダーの恥ずかしそうな表情が加わる。

「感想は正直に言ってもいいのよ坊や」

「一言だけ。 師匠——」

超COOLだよアンタ!!

すげえッ！これは凄い!!

色々な書物に触れて、色々な経験をしたけどこれ程の感動を覚えたのは何時ぶりだろうか？

まいったな、彼女の素晴らしさを形容する言葉が見つからない！」

「なッ——」

「喜んで貰って何よりよ晶」

「——正直、こんなに凄いとは思わなかったですよ」

「喜んでもらえて何より、かしら。」

「そこまで喜んでもらえると、作り手として誇らしいわ」

「まさか、お願いした普段着以外にもこんなに素晴らしい物を見れるとは」

「ふふ、自由にしてもいい最高級の素材があるって言われたら、本気を下さざるを得ないでしょう。」

「強いて言えば、もう十歳……いや五歳若ければさらに良かったのだけれども……。」

それでも逸品であることには変わりないわ。

「ついでに言うと、男装したっていう逸話があるから、女の子として褒められることに慣れてなかつたり、違和感が有ったりするかもしれないって思ったけど……杞憂だったようで何よりだわ」

「それはどういうことですか？」

「ドレスを着せても、機性能が悪い、とか言うのよ……。」

「ああ…………。それは……。」

「でもッ!!^{この娘}メモローラは違うわ!」

「ええ、そうですね。」

『長い旅をして、無事に恋人に掛けられた呪いを解く為に必要な三つ

のアイテムを手に入れて、助け出した恋人と幸せに暮らしました』って言う話ですからね。

ぶっちゃけると、幸せな結婚生活してますからね。この女性^{ひと}」

「まあ、サーヴァントは全盛期の状態で呼ばれるから、どのくらいの時系列の精神で呼ばれたかは分からないのだけど……、顔を真っ赤にしているところを見ると、ちゃんと可愛がられてきたらしくて安心(?)したわ」

「まあ、さつきから一言も喋ってませんからね……」

「なるほど……つまり、共犯、という事で、いいのですね」

「……あれ?」

「揶揄い過ぎたかしら……」

「ふふ、ふふふ。取り敢えず記憶を失うまで攻撃すれば良いのでしよう」

「まずい、ですね。言うならば……熱暴走、でしょうか?」

「……逃げてもいいかしら?」

「まさか、手伝って貰いますよ」

「まあ、そうよね……。ここで逃げたら追って来そうだし、しょうがないかしらね」

「じゃ、そういうことで――」

「――覚悟はできましたか?」

「――師匠ツ支援を頼むツ!

ヒヤッハー!!祭りだー!!」

「やっぱり、それが目的だったのね。

まあ――せつかくだし楽しむとしましょうか」

全身に『強化』が働く。

無駄の一切ない其れに敬意と――興奮を覚える。

疲れを感じさせない動きで、自分でも驚くほどに滑らかな駆動する

肢体。

魔力放出を利用して突っ込んでくるライダーに、目眩まし用の魔術が飛んでくる。

その隙に、下位の宝具である長剣を無数に投影、爆炎を突っ切つて来たライダーに同時斉射。

ライダーは武装の一部である円ラウンドシールド盾に身を隠し、剣群を突破しにかかる。

ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想。

魔力放出突進力を防御に使わせることで、足を止める。

稼いだ刹那の猶予。それを神代の魔術師は数瞬に変える。

その隙に、新たな武器剣を投影する。

とある中世の騎士の愛剣。一説には天使から与えられたとされた其れを『古の英雄の用いた物』という説を採用し、その設定の下で投影する。

この剣の持つ性質故に、夫婦剣の次に使い慣れた其れの重さを再現する。

右手の重さを変形させ、両手で握る。——— 迎撃の準備は整った。

妨害を突破した蒼が迫る———。

先ほどの続きとばかりに再開する、途絶えることのない剣戟の応酬。

その途中から、大元の理由は些事になり果て、思考から消え去る。火花を散らし、独特の協和音を響かせる。まるで子供がじゃれ合うかのように、踊り続ける。

時たま、剣戟の合間を縫って変幻自在の体術が織り交ざり、調和を乱すように無粋な銃声が不協和音を形成する。

短槍スピアの間合いに深く入り込んで振るわれる、初見での対処が難しい独特の体術。

エーテルや宝石など、特殊な弾頭での銃撃はサーヴァントにもダ

メージを与えうる。

体術や火器以外にも、使い捨ての礼装や錬金術の応用による物理攻撃などの奇襲を交える。

振るう武器も、生来の魔術属性『空』と受け継いだ『剣』、両者の特徴を生かした半実体のエーテル剣に変わったりする。

しかしながら、切れる手札や消耗品の残量、そして“一手間”に掛かる時間が無くなっていく。

それに従って、次第に間合いが固定されていく。

両の手に握る重さは最も慣れた物に限定される。

しかしながら、受け継がれ、極限まで使いこなされた双剣による鉄壁の守りは破れることは無く、頼りになり過ぎる後衛の支援により局面が進展することは無く――。

そして、そのまま戦い続けるも根本的な決着が着くことは無かった。

匂いや汚れを魔術で誤魔化して帰宅したが、■姉さんの目を誤魔化すことが出来ず、ライダーと共に長時間拘束されたことを記しておく。

そして――今日消費した使い捨ての礼装などの補充に数日を要することになる。

8 旅支度・後編 ―― 別に、ゆっくりして

いっても構わんのだろう？

―― ちゃんと帰ってきてくださいって言いましたよね。

―― えつと…… ■姉さん。その、ですね………これには訳がですね。

―― 言・い・ま・し・た・よ・ねえ。

―― ……ハイ、言われました。

―― そうですね、思い出してくれたようで何よりです。

―― ……貴女もそう思いますよね、ライダーさん。

―― はっ、はい。その通りです。

―― マスターがこのような状態で帰宅した責任は全て私にあります。

―― ライダー?! い、いや、そもそも僕と師匠が、いや僕が、僕だけに責任があつて、ヒイツツ

―― 美しいですねえ、その仲間思いの強さは。

―― ……(ライダー、今すぐ逃げて。俺がいなくなっても、単独行動スキルがあれば次のマスターを探す時間は有るはずだから)

―― ……(何を言うのですかアキラ、マスターを捨てるようなサーヴァントだと思っっているのですか。そもそも私たちは目的地を共にする仲でしょう)

―― ……本当に仲がいいんですねえ。

―― ふふ、顔を見れば内容は大体分かりますよ。

―― じゃあ、そういうことで。

―― どういう事ですか？ 晶君。まだまだ言わなくてはならない事はたくさん在るんですよ。

―― 待つてください、これには海よりも高く山よりも深い訳があるんだ！

―― 落ち着いてください晶君。ライダーさんも、そんな恐

ろしい物を目にするような顔をして……どうしたのですか？

—— はい、ライダーは大丈夫です。

—— ライダー……!! 戻ってこーい!!

—— しょうがないですねえ、足に乗せる重石を持って来るので、正座したまま待つていてください。

—— って、まだあんの!!

あ、いや。なんでもありませんよ。まって、お願いだから待つてください。それは、その触手はマズい。まさかそこま……ガッツ——

「—— 酷い目にあつたな……」

「……そうですねー」

「おーい、ライダーさーん。思い出させちゃったのは謝るから戻つてきてくださいーい」

「—— 本当に恐ろしかったですね」

「ああ、普段おとなしい人ほど怒ると怖いって言うのは本当なんだなあ」

「ところで、アキラは何をしているのですか？」

「うーん、兵糧の作り置き、かな」

「成るほど、先の戦いでも見ましたが……例えば、魔力が充填された寶石を準備する、というような事でしょうか？」

「そういう事」

遠坂邸。

武家屋敷で夕食を食べた後、久しぶりの遠坂の本拠地に戻ってきた。

まあ、昨日の内に戻るべきではあつたのだが……。

「—— 余計なお世話かもしれないませんが、休息をとるべきでは」

「まあ、それもそうなんだけどね」

四年前に使っていた部屋。

——懐かしい自室。

旅立つ前に必要な物は全て持っていったため、ほとんど空っぽになっただが本来の主が帰って来たことで、その部屋はかつての姿を取り戻す。

……コートの中に収納していた物品を配置していく様は中々シニールではあったが。

遠坂邸という『神殿級の工房』の中にあるため、結界としての効果などを大幅に——完全に、ではない——省いたコンパクトな『工房』。

在りし日の、懐かしむべき自室。

椅子に座り紅茶を一杯。そして、目の前の机の上にはいくつかの寶石。

結界の設置を速やかに終えたとはいえ、時は既に夜半。

しかも、ライダーと模擬……戦?……:……まあ、ライダーたちと模擬戦と称したナニカをした疲れは残っている。

「——取り敢えず、二時を少し超えるぐらいまでは起きているつもり。俺の魔術回路は二時頃が一番調子がいいんだ」

「そうだったのですか……」

「まあ、そんな感じ。ついでに言うとうと宝石に魔力を注ぐならこの時間に、この家でやるのが一番効率が良いというものもあるからね」

「なるほど……久しぶりにこの家で寝たかった、ですか」

「……まあね」

「分かりやすかった?」「いいえ、鎌を掛けました」「してやられたってワケか……」

「——ところで、こんな作業見ていると退屈じゃないの?」

「いえ、面白くは無いですが、興味深くはあります」

「そうなの?」

「ええ。生前はあまり魔術師に良い感情を抱いていなかったので、魔

術の準備などの前段階を見たことがほとんど無いのです」

「そういう事、か。……君を召喚した時から聞いてみたいと思っただけ、ぶっちゃけ、マーリンってどんな奴なの？」

「えっと……何と言うか、アレでした」

「そうか……。……。論点がズレるけど、宮廷魔術師のマーリンとオルランドを呪ったマーリンは同一人物なんだね」

「えっと、はい。彼以外にマーリンはいませんでした。」

円卓における宮廷魔術師。その肩書のわりに少々奔放過ぎましたが、夢魔の血を引く花の魔術師マーリン。

彼の行動は結果的には丸く収まるのですが、何と言うか……。ハッキリ言うとかズレましたね」

「うわあ……。……。そうか、そうだったのか。」

何となく否定したくて、同名の別人がやったって風に解釈してたなあ。

同名、たとえばオルランドもだけでも」

「というか、私のオルランドは重要度が低すぎて、名前が失伝した可能性すらありますからね……。」

もしかしたらですが、サーヴァントとして呼ばれたせいで、私がオルランドという名前を彼を認識していますが、本当は違う名前だった、という可能性も考えられますからね」

「なるほどなあ」

「本当の名前とか、気にならないの？」「気にならない、と言ったら？になります。私はオルランドという名前だったから恋人になったわけではないので」「……そうか。不躰な質問をしてすまなかった」

「——先ほどから思っていました、全く分からないですね」

「そりやそうか。……というか分かったらマズい……マズいかな？」

せっかくだし説明しようか」

「ところで、これ食べる？」「先ほど作っていたものですね」「たくさん有るからね」「……まだあったかいですね」「コートの中の時間は止まってるからな」「……作業工程以外にもコートについての説明もし

て欲しいぐらいですね」「第二魔法の一端とか虚数属性魔術とか、神話にその名を連ねるような伝説の魔術師直伝の神代の魔術とかを使つて空間を捻じ曲げて作った携帯型工房、とでも思ってもらえばいいかな?」「……余計分らないです」「……四次元ポケット、みたいな」「なるほど、何となく分かりました」「……聖杯から与えられる知識は凄いなあ」「まあ、無いと大変ですからね。……あ、おいしい」

今やっている作業は宝石に魔力を封入する事。正確にはその準備。見れば分かると思うけど、さっきからやってるのは注射器での採血。

因みに、さっき飲んでいたのは造血剤。

血液というのは魔術的な媒介としては非常に有用でね、何もなくても特殊加工してストックしている。

そのまま輸血用にしても良いからね。

媒介の話をしたからついでに話すけど、俺の場合は切った髪の毛とかも保存している。

血液もだけど、『ある程度融通が利く体の一部』だからね。

魔術師にとって、手軽に手に入れられる上に、相性が最上に近い。集めない理由は無いだろう。

ついでになんだけど。俺は代謝が異常に良くてね、月に10cm程伸びてしまうから、こまめに散髪しないと大変なんだ。

そのうち面倒になって、伸ばしっぱなしにしそうではあるんだけどね。

余談だけど、魔術師の遺伝子は貴重だから、きちんと処理しないとマズいことも有る。

髪の毛や血液ならまだしも、卵子や精子の場合は特に気を遣う。

一回分幾ら、なんて事例も無いワケじゃないからね。

このご時世、科学技術で体外受精が出来るんだから、魔術を用いればより容易いだろう。

戦闘特化の魔術師の遺伝子を組み込んだ戦闘特化型ホムンクルス、

なんてフザケタ代物を創り出す輩すらいるからな。

さつき、代謝が良いって言ったけど、俺の場合は少し事情が有つてね。

知り合いの遺伝子を専攻する学者に、遺伝子検査してもらったことがあるんだ。

異常なほど代謝が良いってことは細胞の劣化、老化が人よりも早いつてことだからね。

その結果は『遺伝子——特にテロメアを見る限り、特に老化は見られない。誤差の範囲内だが、同年代の物の平均よりもほんの少しだけ長く、大体15歳前の物の平均に近い』だった。

もしかしたらだけでも、俺は細胞的には歳を取らないのかもしれない。

うん？テロメアって何かって？

流星に遺伝子関係の知識は聖杯も無用と判断したのかな？

……基準が気になるな。凄く。

まあ、そのことは後でもいいから一端置いておいて、テロメアだね。

……その前に、クッキーのおかわりはいるかい？

「——さて、そろそろだな」

午前二時。俗にいう丑三つ時。

机の上にあるのは二十数個の宝石。

大粒の其れらは先ほどまでに血液を使って『契約』したもの。

——コートから取り出したのは刀身が宝石でできた一本の短剣。

その『剣』が放つ光は単なる宝石特有の反射光だけではない。

「——それは？」

「宝石剣。

まあ、母さんの持つ模造品レプリカよりも性能は圧倒的に低い出来損ない。

精々が、模造品レプリカの模造品ハリボテの模造品出来損ないって感じだよ」

「いや……だからですね」

「宝石剣キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。

宝石の刀身を持つ、第二魔法の能力を持つ限定概念礼装。

我ら、シユバインオーグの系譜に連なる者にしか扱えない魔剣。

かの宝石翁のように平行世界への門を開けることは出来なくとも、その『門』の僅かな隙間から無限に魔力を引き出せる。

俺の母さんが作成した模造品レブリカを参考にして、その模造品ハリポテを作ろうとしたんだけど、模造品ハリポテの更に模造品出来損ないっていうレベルが限界でね。

あの母さんですら、たとえ材料が揃っていても『本物』を作るには十年や二十年じゃ出来ないって言う代物だからね。

そもその話、俺は第二魔法についての適性が低いからな。多分だが第二魔法や宝石剣についての研究は優暉ゆうきと曜ひかりが続けることになるだろう。

だから——構造を強引に『解析』して、変化と投影の魔術を使って強引に『構築』することで模造品レブリカの模造品ハリポテを作ろうとしたんだけど、何回作っても酷い出来でね。

魔力を供給できるとはいえ、そのスピードは遅々たるもの。仕方がないとはいえ、ある程度貯まるまで待っていたんじや時間が掛かってしょうがない。

まあ、そういう物だつて割り切つてしまえば使いようはあるんだけどね」

そう言つて、『宝石剣』から魔力を抜き出し、魔術回路を通して魔力を宝石に移し、その宝石の限界まで溜められたら次の宝石に移る。

その作業を繰り返し、『宝石剣』に蓄えられた魔力が空になった時点で残っていた二三の宝石は自身の魔力でそれを行う。

「——ふう」

一息。

自身の魔力を八割ほど一気に使ったことで、中々の倦怠感を感じる。

「——魔力が溜まるのに時間が掛かるなら、素直に時間を掛ければいい。」

そう考えれば、適当に放置しておくだけで平行世界から魔力を集めてくれる便利グッズだし。

満タンまで溜めてもエーテル砲撃したら一発で空になる。——
——けれど、工夫してエーテルの斬撃を飛ばすような使い方をすれば五六発は使える。

それ以外にも、今みたいに宝石に魔力を移し替えるとかするって言うてもあるしね。

——伝説の限定概念礼装を便利グッズ扱しておいてなんだけど、そもそも作った動機が何となくだからね。

まあ、使えない使えないって言って放置とか、文鎮の代わりぐらいにしかならないし、何より礼装は——魔術なんて使ってナンボだろう」

「お疲れ様です。アキラ、我がマスター」

「どうしたのライダー？急に他人行儀になって」

「……………そうですね——」

「——貴方が聖杯戦争に参加する理由を教えてください」

「えーっと、理由か…………」

「ええ、理由です」

「というか、ホントどうしたの急に」

「そうですね…………。この一日、随分と親切にさせていただいて本当に感謝しています。

この時代の景色や空気、匂いや味を知ることが出来ました。

貴方自身の事もそうです。

魔術や体術といった戦闘技能から、性格や嗜好といった戦闘そのものにはあまり関係しないものまで。

強いて言えば自己紹介、でしょうか？

お互いの事を知っておくことは、連帯行動が必要な事をするに中つて最も大切な事、と言っても過言ではないでしょう。

しかしそれは、急いで行う事ではないでしょう。

……貴方は少し性急に過ぎましたよ、アキラ」
「……………なるほど」

優しく諭すように、ゆつくりと言ひ聞かせるように。

——まるで、年の離れた弟に対するような口調で窘められる。
そんな、体験したことは無いのに、覚えているような、懐かしい感

覚。

——気の強く、自信に満ちた少女。

——好む色は赤。ツインテールに纏めた長い黒髪と並んで、トレードマーク。

——出会ったばかりの頃は、時折見せる寂しげな顔を変えてあげたかった。

——でもそれはお節介だった。……何故なら彼女も同じような事を思っていたのだから。

——今になって思えば、世話を……迷惑を掛けっぱなしだった。

——最後まで。

……………駄目だ。

これは記憶してはいけない。

知識として持っているのはまだいい。

でも、この願いは、感情は、——輝きは僕のものじゃない。俺が、僕が記憶して、銘記していいものではない。

決して、絶対に。僕なんか——鍍金でしかないのに。

「アキラ？」

「大丈夫。……大丈夫だ。

……………本当だよ」

「そう……ですか」

「——さっきは済まなかったね。心配させてしまった」

「いえ、それは構わないのですが……」

「分かってる。でも、もう少し待ってくれ。」

今まで、このことを人に話してことは無いし、知っているのは恐らく二人だけ。

だから、もう少しだけ待ってくれ」

——踏ん切りが、度胸が、覚悟が出来るまで。

「分かりました。では、もう少しだけ待たせていただきます」

——貴方が向き合う事が出来るまで。

「ありがとう」

——本当に。

「さて、俺が聖杯戦争に参加する理由か……。

うん。なんだろうね？」

「誤魔化している………という訳ではないようですね」

「まあね。」

……誰かに強制された、とかそう言うんじゃないんだけどね」

「そう、ですか」

「うん、そんな感じ。」

聖杯戦争に参加したいって、特に理由は無いけれど、そんな風に思っていたよ。

そんな中、数日前に突然令呪が現れてね、向こうロンドンで出来ることを出来るだけやって、慌てて里帰りしてっていう感じだからね。

もしかしたら、令呪が現れるのが遅かったのは、聖杯に託す願いがなかった、って言うのが原因かもしれないな」

「なるほど。」

ではアキラ、令呪が現れる前と現れた後。または今、この瞬間^{とき}。貴方にとって、何か変わったことはありませんか？」

「そうだな……時間が出来たかな。聖杯戦争に参加するって言えば大体の予定は何かなるし、何とかならないやつは、まあ、何とかしたし」

「では、その時間を使って、何か新しい事を始めたりとか」

「そうだなあ、久々にゆっくり眠ったりしたかな？」

それ以外には久しぶりに新聞読んだり………。

……何とか、久々に真人間に戻ったような感じだなあ

「……………」

「……………いや、そう言うんじゃないんですね」

「それは分かっているんだけど……………、特にないかなあ。」

いや、自分を見つめるとか、そう言う事は魔術師なら当たり、前の……………」

なるほどね、魔術師としてではなく、人間として自分を見つめる機会が出来たってことは変わったことだな」

「つまり、自分と向き合いたかった、という事ですか？」

「そこまで、高尚な物じゃないけどね」

自分と向き合う。

言われてみれば、当たり前的事なのだろう。

だが……………」

だが、それだけが聖杯戦争に参加しようと思つた理由としては弱い。

——自分と向き合う。

そんな、決まつた答えのないような事柄に費やせるような纏つた時間が欲しい、なんて道楽と言つてもいいような物の為に時間を費やすような性格はしていないことは自分自身が一番知っている。

そもそも、自分なんてものは探そうと思つて探せるようなものではないだろう。

それ以前の問題で、二年間も旅をしておいて、今更自分探しも無いだろう。

というか、今までの四年間で自分という物の性質は大体把握することが出来ている。

死に懸けた事ですら両の指で数えきることはないだろう。

ならば、己の鍛錬の為に参加した、というのだろうか？

否、それも違うだろう。

ならば、なぜ俺に、僕に令呪が発現したのか、というところから考え直した方が——

「——そんなに考え込んで答えは出るものではないでしょう」

そう投げかけられた一言に、初めに聞いたのは君だろう、と苛立ち混じりに返そうとして――

――氷解する。

盲点と言えば盲点だが、初めから気付いていなければいけないような当たり前の事。

………というか、相当失礼だろう。

聖杯戦争において、魔術師は己の命運を託すべき英^{サーヴァント}霊を召喚する。

ならば――。

ならば、英^{サーヴァント}霊に――英雄という存在に会ってみたい。

彼らがどの様な冒険を、功績を、偉業を成し遂げたのか――それを見てみたい、感じてみたい、直接聞いてみたい。

そんな動機で聖杯戦争に参加した、という呆れた奴が一人二人いてもいいだろう。

「……………確かにそうだね。

ありがとう、ライダー」

「どういたしまして、アキラ」

――君を呼んでよかった、という一言は微笑みに抑えられた。

全てお見通し、という訳らしい。

英霊相手に心理戦を挑んで勝ち目などない、という事なのだろう。

赤面している事を隠すように、少年は机の上を片付け、ベットに潜り込む。

そのまま、明日の予定などを一方的に伝え、その直後に寝息を立て始める。

その様子を、男装の騎士は慈愛の表情で眺めていた。

真白い建物の中。

何名かの人と話をしている。

白亜の楼閣。その通路。

歩幅を合わせ、誰かと歩いている。

親しげに何かを話しているようだが、その内容は全く分からない。

白亜の城、その中庭。

微かにだが、草木の匂いや、風の音を感じる。

椅子の上（？）に座って緑を眺めているのだろうか。

立ち上がる時に、自分と頭身が異なることに気付く。

大理石の床の上を走る。

息も切れ切れになるほどに激しく動いているのに、自分と頭身が違

うことに違和感はない。

両開きの大扉を開ける。

光の溢れる大広間。

正面。玉座に座るは、偉大なる――。

何時かの中庭。話しているのは、誉れ高き騎士と結婚した叔母。

旅の選別として示されたのは、身の丈を遥かに超える紅蓮の大剣。

伝説の大英雄が用いたと言われる其れは、父から借り受けた名馬に

勝るほどの助けになるだろうが……………。

――さすがに冗談です。こんなものでは旅の邪魔になる

でしょう。

ホツとする気配。

同じく苦笑いをした叔母に、男装をしていくことを勧められ、特別

に設えた男性用の武装を貰った。

日を経ていくごとに少しづつ鮮明になっていく『夢』。

――英^{サーヴァント}霊と契約した魔術師^{マスター}は、英^{サーヴァント}霊の過去を夢という形

で追体験する事が有る――

そんなことを思い出した。

11月30日。
0日目

早朝。駅舎で始発を待ちながら。

朝日を拝みながら、吐き出した息の白さの煌めきに目を細める。

ライダーを召喚してから六日程。

午前二時に召喚したため、日付の換算が面倒になっている事に気付く。

……………まあ、どうでもいい事だが。

「……………聞いていますのですか。アキラ？」

見慣れた横顔を見ながら、そんな下らない事を考えていたからか、話しかけられていたことに気付かなかつたらしい。

「わるい、ライダー。ぼーっとしてた」

「やっぱりですか」

ため息。

冬の早朝の寒気が、吐息を真白く染める。

漂っていた白はゆっくりと空気に溶け込んでいく。

「今後の予定についてです。

何度も聞いたことですが、念のために確認しておいた方がいいでしょう」

「……………それもそうかもしれないね。

ちよつと待って。軽く人払いするから。

——と言っても、ほとんど人いないけどね」

「……………じゃあ、これからの予定を確認しようか」

「そうですね、アキラ。

まずは、飛行機、という乗り込める鋼鉄の大鳥のような物に乗るの

「ですよね」

の主従は舞台上上がる

「——本当に、こんな風景がこの世界には、この時代にはあるのですね」

鉄筋コンクリートの林——乱立する摩天楼の中を歩く。

杉羽良市。

近畿地方に在る、比較的大き目な盆地の南東の一部とその周りの山々を内包している地方都市。

その盆地の端は北西から南東方向に広がっており、北東部および南西部にはほとんど人は生活していない。

盆地という立地なのでその気候は、季節による温度の差が少なく、四季を通して雨が少なく乾燥している。

その盆地は北西部から南東部は比較的なだらか。逆に、北東部および南西部は不活化した元火山が有ったりと起伏に富んでいる。

………そして、恐らくだが大聖杯が設置されているのは南西部にある霊地の何処かだろう。

そんな地形からか、北西部には駅や幾つもの高層ビルなどが在ったりと、比較的発展した印象を受ける。

対照的に、比較的敷地面積の広い建物は、その大部分が南東部に在り、土地柄故か北西部から移転してきた神社仏閣などが非常に多い。

そして、神社や寺社などの多い地区から少し離れた北東部の丘に、今次の聖杯戦争の監督役がいる杉羽良教会がある。

さて、俺たちの乗った飛行機は朝日の方向に飛んで行った。

……ライダーが大はしやぎだった、ということは、わざわざ書くまでも無いかも知れない。

という訳で現在地は杉羽良市……を飛び越えて東京。

電子機器とサブカルチャーの街、秋葉原。

様々な目的の人が集まり、活気に満ちている。

神秘の漏洩、という面では非常にやりにくい場所の代表例と言ってもいいだろう。

そんな街に、魔術師としての遠坂晶が寄らなくてはならない『場所』があった。

魔術協会日本支部

随分とイイ場所に在るな。

初めて其処を訪れた時、そう思った。

——ドアノブを捻ると、そこはレトロだった。

文豪の残した名文の適当な模倣だが、今の心情を如実に示している。

幾重もの結界を広い範囲に、段階的に設置することで、魔術という『日常』の裏側の世界に関わりの無いような、そんな普通の一般人には立ち入る事の出来ない空間を形成している。

その結界群を決められた方法ですり抜け、開かせた自動ドアを通る。

外からは無人の廃ビルに見えたが、エントランスに入ると、一見普通の会社なのかと思わせるような賑わいがあるように見える。

賑わいを無視し、関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉のノブを握る。

周囲の制止を無視して、ドアを開く——。

ここは博物館、それとも骨董品店なのか。

そう思わせるに十分な光景だった。

先ほどまでの、襲撃されても良い拠点。

そして此処が——正確には此処からが——襲われてはならな

い、仮に襲撃されたら本気で迎撃するべき拠点、魔術協会日本支部。

「――ようこそ遠坂晶^{アキラ・ヘルトオサカ}。」

要件は知っているし既に準備済み。連絡を済ませたら早々に立ち去り給え」

「……………酷くないですか？」

「普段から忙しいのに、日本で聖杯戦争が起こっている。その上貴様は人員を割こうとしているのだ。迎撃されないだけありがたいと思うべきでは」

「やれやれ、神秘が漏洩する可能性を少しでも減らすためだ。仕方ないだろう」

「……………仲が悪いのは分かりましたが、せめて使用言語を統一すべきではありませんか？」

閑話休題。

初対面なのに、何故か陰悪な対応をしてきた目の前の女性。

名前が分からないので、取り敢えず司書風眼鏡さん（仮）としておこう。

そのまま応接室のようなスペースに案内される。

俺とライダーの二人と件の女性が机を挟んで向き合うように座る。

なんとなくだが、三者面談を思い起こすような位置関係だ。

因みに、紅茶やコーヒーといった喉を潤す類の物は、机上に存在していない。

……………もし要求したら、何となく敗北感に襲われそうな気がする上に、雑巾のしぼり汁を出される未来すら見えるので遠慮する。

「――先ほど門前払いしたように、あなた方からの要求の準備は既に整えています」

「それはありがたい。あなた方の配慮には本当に頭が下がります」

「……………二人とも陰悪過ぎませんか？」

「ほう……………彼女がサーヴァントか」

「あ、はい。サーヴァント、ライダーです」

「…………成るほど、君たちのような存在が戦いあうのか…………。」

ならば納得だ。むしろ不足とも言えるだろう」

「納得して貰えたならそれでいいだろう。」

前もって、書類にて依頼した事柄の準備は既に出来ているのなら、此処に用は無い」

「だったら、早く出て行きたまえ」

「言われなくてもそうさせてもらうよ。行こう、ライダー」

「結局、あの女性がアキラに冷たく接する理由は分かりませんでしたね」「そんなこと気にしてたの？違うんだよライダー。逆にあの女性は俺に気があることを、攻撃的な態度で隠している、って考えるべきなんだよ」「……呆れるを通り越して尊敬しますよアキラ」

「わぁ……。すごいですねアキラ。」

先ほどヒコーキに乗った時も思いましたが、この時代では『これ』が当たり前なのです」

「そうだね、日本で新幹線は当たり前のことかな？」

「言っても、開通から百年も経ってないんだけどね」

「そうですか……。科学技術がここまで発達した時代ならば、私たちのような存在は必要ないのでしょね」

「それでも、英雄は誕生する。」

英雄が必要ない世界。だがそれは、誰もが英雄に成れる、という事の裏返しでもあるだろう。

どんな時代であっても、君たちのような英雄は誕生する。……………

俺たちがそれを望む限り」

「……素敵な考えですね」

「こんな事で褒めんな、恥ずかしいだろ。」

そもそも、俺の父親も英雄の一人なんだから、こんな考えをするのは当たり前だろう」

「そうでしたねアキラ」

「なに？その微笑ましい物を見るような目は」

「いえ、貴方も父親の事が大切なのです、と思ったままで」「……ッ!!ライダーッ!何言ってるのッ、ホント何言ってるの!?!」「ごめんなさい。年の離れた弟を思い出して微笑ましく思っただけで、別に他意は無いんですよ」「いや、ありありだろう……」

——という事で、魔術協会で貸し切った新幹線で一気に近畿まで、そこから在来線に乗り換えて杉羽良まで向かう。

——なるほど、こちらへの敵意が無いので見逃していましたが、このホームにいる人のうち、魔力を帯びている者がほとんどだと思ったらそう事だったのですね。

——そこまで分かっていたのか。流石としか言いようがないな。

——この程度、サーヴァントならば当たり前でしょう。この程度が出来ないのならば、マスターの命をアサシンに奪われかねない。

——確かにそうだ。

——ここから、杉羽良市まで大体八時間。向こうに着くのが大体十時前になる。

——杉羽良に着く前も警戒は十分以上にするけど、ついからは今以上に警戒が必要になる。

——頼むライダー。君という存在がこの先、最も頼りになる。

——だからだな、その………。

——ええ、分かっていますアキラ。元より、わが身はサーヴァント。マスターである貴方を守り、敵を屠る剣。

——そして、マスターとサーヴァントという関係以上に、同じ未来を目指す旅人同士。

——そうでしょう、アキラ。

——ああ、そうだったな。

改めて言うけど、これからもよろしく頼むよ。ライダー。

——ええ、その願いを貴方のサーヴアクトとして、また共に旅をする友人として受けましょう。

こちらこそ、よろしく願います。アキラ。

——というわけで、杉羽良市に到着しました。

——アキハバラという街には劣りますが、コンクリートの……ビル？が多いように思えます。

——まあ、こちら辺はある程度発達しているから。

——さて、取り合えずだが教会に行こう。

——たしか、聖杯戦争の監督役がいる場所ですね。

——そうだね。

杉羽良教会。今次の聖杯戦争の監督役として、聖堂教会から派遣された神父がいる場所。

訪問する義務はないんだけど、まあ形式上は正々堂々と戦います、っていうパフォーマンズぐらいにはなる。

——成るほど、大義名分を得たい、という訳ですか。

——そういう事。

——取り敢えず、タクシーに乗ろうか。

——十一月最終日の午後十時とか、普通に寒いわ。

深夜。

杉羽良市、杉羽良教会。

「——ようこそ、聖杯の輝きに目を眩ませた6人目のマスターよ」

「夜分遅くに申し訳ない。丁重な歓迎に感謝する」

冷たく、張り詰めた空気が支配する深夜の礼拝堂。

歓迎も申し訳なさをも微塵も感じさせずに、魔術師と監督役は邂逅

する。

「——そう言えば、自己紹介をしていなかったな。既に知っているかもしれないが、名乗らせてもらいたい。

私は遠坂晶。元御三家の一角として、同時に時計塔からの参加でもある」

「これは丁寧には私も名乗らせともらおう。

美威修磨よみいしゅうま。第九次聖杯戦争の監督役として聖堂教会から派遣された」

魔術師の青年と壮年の神父は互いに値踏みをするかのような視線をぶつけ合う。

男装の麗人は少し悲しそうな、同時に何処か諦めたような目で二人を見ていた。

——相手からの利益が望めないならば、魔術関係者は関係改善に勤めることはない。

この一日の少年の振舞いで、ライダーは既にその歪みに気づき、その理由を察していた。

「——さて、ここまで聖杯戦争の注意事項の確認をしたが、何か質問はあるかね」

「特にない。強いて言えば、全部知ってた」

冷やかな空気の中、会話は続く。

そして今、カソックを着た神父による、極めて機械的な口調で行われた諸注意が終わった。

「それは失礼をしたな」

「もう言うことが無いのなら、失礼させてもらう。

何故か分からないが、どうやら私は貴方の事が苦手なようだ」

「そうか……。まあ、残念ではあるが仕方がない事でもある。

多くの人と人間関係を築かないとならないこの時代、一人や二人は仕方がないかもしれない。

だが、嫌ってばかりではどうしようもない事もあるだろう」

「まあな、だが『汝の隣人を愛せよ』とはいかない場合も多い。」

そういう相手には、社交として付き合う事になっている」

「それも、正解だろう。まあ、そもそも人付き合いに正解など無いがね」

「台無しじゃねえか」

「そう言うな。君には必要なくとも、必要とする人がいればそれは価値のある事だろう」

「———そういえば、さつき俺を六番目のマスターって呼んでいたが、現時点で、どのクラスのサーヴァントが喚ばれているんだ？」
「……………」

重そうな印象を受ける扉を開き、協会を後にする———直前に、思い出したかのように質問を投げ掛ける。

返答は無い……………と言うよりは、迷っている、という雰囲気。

「聞いたらマズい感じの事だったか？」

「いや、そうではない。」

確かに、一組にだけ伝えることが不平等かもしれないが、君たち以外に教会こゝに来たマスターはいないのだ。

ならば、この程度の情報ならば伝えてもかまわないだろう。知りたいのなら、直接聞きに来れば良いだけなのだから」

「なら、躊躇する理由は何なんだ？」

「端的に言えば、現在確認されているサーヴァントが七騎を越えているのだよ———」

「———マスター」

「分かってる」

ライダーが俺のことを名前ではなく、マスターと呼ぶ———

目の前に現れる、漆黒を纏う大男。

——つまりはそういう事だ。

——霊振盤の反応は六騎であり、召喚されていないクラスはセイバー。セイバーは必ず呼ばれるので、現時点でこの聖杯戦争にはイレギュラークラスはいない。

——しかしながら、セイバーを自称するサーヴァントが現れた。

——これだけでは、単なるクラス詐称だろうが、ランサーとアーチャーを称するサーヴァントと同時に現れた。

——その三人のサーヴァントは協力してバーサーカーと戦闘、戦闘を有利に進めながらも撤退したらしい。

「——さて、せっかくの情報だが、何処まで信じたらいいのやら」

「さあ、どうでしょうね。ただ、あの神父は胡散臭くは有りましたが人を見る目は確かなように思えます」

——いや、其れは単純に………ああ、そう言うことか。
——まあ、そういう事だ。

健闘を祈らせてもらうよ、遠坂晶。

「それに、貴方が思っているよりも付き合いやすい人物なのかもしれないよ」

「……さあね。まあ、警戒するに越したことは無いだろう」

教会を後にし歩く事十数分——。

何時の間にか森に迷い込んでおり、来た道に戻ってはみたが、森を抜けることが出来ない——この事から、迷っているのではなく、迷わされていることが分かる。

——保有する宝具による、Aランクの対魔力。

——内包する心象による、結界に対する反発。

六番目の主従は、この現象が魔術によって成されたことだ、と既に気が付いている。

その上で、敢えて罫に掛かったままにしてある。

—— (見事な結界ですね、どう思いますか?)

—— (起点が全く分からない、強引に破るのがもったいな
いぐらいだな。強いて考えるのならば——)

—— この魔術を行ったのは、恐らくサーヴァント。

特にキャスター、もしくは魔術や結界に関わる宝具かスキルを持つ
たサーヴァントの可能性が非常に高い。

サーヴァント以外でも出来なくはないが、これ程の結界を現代の魔
術師が敷くのは困難だし、非効率的だろう。強いて上げるのならば、
伝承保菌者などだろう。

—— (成るほど、妥当な判断ですね)

—— (同じこと考えていたでしょ)

—— (……………)

—— (まあ、いいけど。あと分かるのは……………多分ルー
ンを使っているってことぐらいかな)

—— (間違いなく、一番重要な情報ですね)

—— (う…………。済まない、もっと早く伝えるべきだった)

—— (まあ、良いですけど。参考までに、どうして気付い
たのですか?)

—— (俺の知り合いに、神代から続くルーン使いの一族の
末裔がいたから、かな)

—— (成るほど、そうでしたか)

—— (そういう事。ついでに言うと、その一族はケルト神
話に連なる)

—— (…………それで?)

—— (ぶっちゃけると、若干方式が違う。多分だけど、こ
れをやったのがサーヴァントなら北欧圏の英霊だろう)

—— (だからですね、アキラ)

—— (本当に済まない)

—— (それで、どうするのですか?)

—— (取り敢えず、このまま様子見で)

念話を終わらせ、向こうの出方を窺う。

——六番目の主従が、初のサーヴァント同士の戦闘を経験するまであと少し。

此処は森の中、開けた木々の切れ間。

何の因果か、模擬戦を思い出させる。

沈黙。

様子見。

二人のサーヴァントは互いに視線を交わしたまま微動だにしない。

「初めまして、でいいかな？」

沈黙を破る。

サーヴァントが話さないのならば、こちらから話すしかない。

………サーヴァント同士なら、見つめ合う事で互いに感じるものが在るのかもしれないが、この時代に生きる一般人——逸般人（？）には気まずいだけである。

炭のように黒ずんだ肌をした大男。

荒れ切った白髪を肩のあたりまで延ばしている。

マスターの持つスキルで確認すると、男のクラスは狂戦士^{バーサーカー}。

だが、こちらを見つめる深紅の双眸は澄み切っている。

加えて、いきなり襲い掛かってくる、といった素振りは見せない。

そして——恐らくだが、ルーンを用いた結界を張ったのは恐らく彼なのだ。

其処から推測されるに、狂化のランクが低い故に理性をある程度残しているサーヴァント。

その考えを確かめるために、対話を持ちかけてみたのだが——

「——そうなるな、ライダーとそのマスターよ」

重く響く声。

誰が発したかは自明。

ある程度以上の言語機能を残している。

それは狂化のランクが限りなく低い事の証。

「お初にお目にかかる。貴兄の言う通り、私は騎乗兵^{ライダー}。」

聞くに、聖杯戦争は未だ始まってはいないらしいが——前

哨戦に不足は無いだらう」

ライダーが槍を取り出す。

——月光を思わせる蒼銀を刀身に纏った聖槍。

「そうだな、我らはサーヴァント。ならば言葉などによる自己紹介など無粋の極み。」

私は狂戦士^{バーサーカー}として呼ばれた。ならば戦いに狂喜するべきだろう」

バーサーカーが大剣を取り出す。

——星明りまで吸い込んでしまいそうな漆黑。

約20メートルあつた間合いが——

「尤も、この身が狂乱のクラスでなくとも、強者との戦いは心躍るだろう」

「ああ、その通りだ。——行くぞ、バーサーカーツ!!」

「来い、ライダーアツ」

——一瞬でゼロになった。

両者がぶつかり合う。

——音より先に衝撃が届いた。

——疾い。

一瞬の鏝迫り合い。

——それだけで地面がひび割れる。

——重い。

其処からの殺陣。

——劍花と聖光が幾重にも重なる。

——巧い。

……なんだこれは。
強いとか、凄いとか、そんな簡単な言葉しか浮かばない。
こんな戦い……見惚れる以外に何が出来るのだろうか。
かなわないと分かりながらも、このまま走り出して剣を交えたいと
さえ思う。

今の戦況は互角。

——否、互いに互角にしている。

互いに全力で戦いながらも、余力を残し情報を集める。

字面だけでは一見矛盾しているように見えるが、戦いで余裕を無く
すことは直後の死を意味する。

様々な意見があるだろうが、心身ともに全力で熱狂しつつ、頭の何
処かに冷静に戦況を観察する自分がいる、という状態こそが相応しい
ように思う。

戦況を見渡す。

時折治癒を掛けながら、情報を整理する。

大剣の解析——妨害に会い失敗。剣特有の能力と思われ
る。

剣筋が乱れることは未だなく、本当に狂戦士バーサーカーなのか、と疑問に思う
ほど。

また、ルーンなどの魔術を使う素振りはなく、体術及び剣技のみで
戦闘を行っている。

こちらが与えるダメージについてだが、一部の傷が自然に治ってい
く。治らないモノはライダーの持つ槍の穂先による攻撃。

マスターからの支援は無く、使い魔などの気配もない。視覚などの
五感を共有しようにも、これ程の速さについてくることは困難だろ
う。

さて……。

恐らくほぼ単独で行動しており、それが出来るほどの技能またはス

キル及び宝具を保有していることが予想される。

傷が自然に治るといふ事だけなら何らかの魔術行使が考えられるが、ライダーの持つ槍による傷は治りにくい事から、何らかの条件があるように思える。

ここで考えるべきは、戦闘に直接関係する傷が治るといふ現象のメカニズム。

治療を行うスキルや宝具は魔術関係の物を除くとどのような物があるだろうか。

ライダーの持つ槍には幾つかの性質がある。

一つは魔術及びそれに準ずるものによって強化された剛体を穂先が触れただけで破壊する、というもの。

それ以外に、十字教キリスト教において最も有名な聖槍の名に肖って銘を付けられており、常時聖性を帯びている。

其処から推測できるのは、バーサーカーのスキル又は宝具が十字教キリスト教において邪悪とされる類の物に縁があるという事。

しかしこれだけでは情報が足りないだろう。

ならば、こちらも新たな手札を切るべきだろう。

しかし、魔術による攻撃はライダーを巻き込みかねない。

ライダーの対魔力はAランク——ほとんどの魔術を無効化できるが、だからと言って進んで巻き込みたくはない。

とは言え、直接殴り込みに行くわけにはいかない。

そこまで考えた時——

「構造把握、読取——宝具投影、完了」

——気付けば、剣を投影手に取ってしていた。

「匂いは覚えたな。お前は血に飢えた猟犬、ただそれだけでいい」

——おぞましい魔力を放つ魔剣に手を加える。

「血塗れの平野を走り往け——」

——右足を引き、左手に弓を構え、魔剣を矢として番う。

フルンティング
「赤原獵犬」

劍は音を彼方に置き去りにし戦場に飛び込んでいく。

こちらに背を向けているライダーは超音の殺意を容易く躲す。

元より、魔劍を投影した時点で、こちらの行動はライダーに伝わっている。

そして、バーサーカーは体の一部のように振るい、使いこなしている大劍で容易く弾く。

弾かれた深紅の魔劍は彼方に消えていく———ことは無い。

背後から迫る閃光をバーサーカーは神速の振り抜きで再び弾き飛ばす。

フルンティング
赤原獵犬。

殺した敵の血を吸い、その力を増すという逸話を持つ魔劍。

それを矢として改造したこの魔弾は、例え弾かれても獵犬のように再び相手を狙い飛び迫り続ける。

「ハアッ!!」

数度の接触で威力が弱った後、バーサーカーは命をつけ狙う獵犬を全力の振り下ろしで叩き壊す。

仕切り直し。

互いに強引な乱入にも気を害した様子はない。

寧ろ、嬉しそうにさえ見える。

「マスター」

こちらを見ずにライダーは声を掛ける。

「アキラ、とではなくマスターと。」

コートから宝石劍の出来損ないを取り出し左手に持つ。

意図は分かる。

「マスターとして判断し、振る舞え。」

だが、対魔力があるからと言って巻き込むようなことはしたくない。

ならば———

ガラクタから魔力を引き出す。

そして――ライダーへの魔力供給を意図的に増大させる。単純にステータスを僅かに底上げすることに加え、魔力放出の効果を發揮しやすいようにする。

戦闘において、マスターが出来ることの中で最も基本である魔力供給だが、サーヴァントの戦闘力にこれ程直接関係するものは無いだろう。

顔は見えないが、なんとなくライダーがほほ笑んだ気がした。

そして、再び激突する二騎のサーヴァント。

こちらはガラクタに残る魔力量と魔力供給の配分に気を使いながら戦闘を眺める。

――だからこそ、気付くのがわずかに遅れた。

「――アキラっ!!」

ライダーがマスターという役割では無く名前で警告する。直後、結界が強引に破られる。

殺意が、すぐそこまで、迫って、いた。

10 12月1日／未明①———白銀の
流星、紅蓮の大鎗

「アキラっ!!」

目には見えないナニカが、僅かに歪む音が聞こえた気がした。直後、ガラスが割れるような音が感じられ、ナニカが砕けた。

——風を切り裂き、鏃が迫る。

右斜め後方から迫る矢^{殺意}に対して———コートから取り出した深紅の宝石を手首のスナップを利用して放り投げる。

「見えましたか？アーチャー」

「ああ、確認したよメセネト」

時間は僅かに前後する。

高層ビルの屋上———。

締め切られたその場所に居るのは一組の男女。

「何度も言いますが、私の事はマスターと呼んでください」

褐色の肌と腰まで伸ばした白銀の髪、そして紅い瞳。

メセネト、呼ばれた異国情緒を感じさせられる長身の女性———

——^{マスター}魔術師。

「繰り返し言うけど、断らせてもらうよ。メセネト」

色素の薄い肌、白金の髪と凩いだ海を思わせる碧眼。

アーチャーと呼ばれた、殴りたくなるような雰囲気青年———

——サーヴァント。

吹き荒れる寒風の中、彼方を見つめる二人。

——この二人こそ、アーチャーの主従である。

「何故あなたは毎回私の事を名前で呼ぶのですか？」

「理由なんてないよ。美しい女性の事を名前で呼ぶのは当たり前じゃないか。」

なんなら、俺のことも名前で呼んでくれてもいいんだよ」

「分かりました、下半身」

「うっわ。ひどいなー」

「言われ慣れているのですね……………」

無表情のマスターと積極的に話しかけるアーチャー。

そして今、そんな主従が見ている先に在るのは――

「――そんなことより、狙えますか？」

「うーん……。良く見えないんだよなあ」

「そうですね、上から見る限りでは問題なく見えるのですが……………成る程、結界ですね。ふつうに見た分には違和感がなかったのですが、解析を掛けてみたら壁が見えました」

「やっぱりかあ……。詳しい位置は分かる？」

「視覚共有をすれば何とか伝わります。……………何故、貴方ほどの弓兵に千里眼のスキルが無いのでしょうか」

「俺の瞳は普通の千里眼よりもよく見えるんだが……。今回は相手の結界の方が上手だったのだろう」

「成るほど、使えませんね」

「相変わらず、君は辛辣だね」

二人は（ほぼ一方的に）軽口を叩きながら、『行程』を進めていく。

「さてアーチャー、視えますか？」

「ああ、視えるよ。メセネト」

標的は結界の中。

紅のロングコートを着た青年――マスター。

都合の良い事に、サーヴァント同士の戦闘中であり彼自身のサーヴァントの支援に集中している。

アーチャーはマスターメセネトに悪いと思いつつも、これから狙撃を受ける青年に期待していた。

――生き残って欲しい。

勿論手を抜くつもりはない。

聖杯戦争が正式に始まる前にサーヴァントを召喚したマスターを

殺害する、という方針に不満は無い。

だが、それではつまらないだろう。

戦う前に脱落されては拍子抜け以前にもつたいない。

それ故に期待する。

何らかの魔術を使ってもいいし、左腰の西洋剣で切り払ってもいい。

——頼むから、生き残ってくれよ。

アーチャーは自分が理不尽な事を思っていることを理解しながら、己が弓に矢を番える。

「ではお願いします。あと名前で呼ばないでください」
「分かったよ。メセネト」

——杉羽良市北西部。

とある高層ビルから、一条の流星が放たれる。

放たれた光は不可視の結界を容易く打ち破る。

そして——

——咲き誇る深紅の花弁に防がれる。

——半透明の盾越しに、元標的と目が合う。

——紅硬玉の種子宝石から深紅の花弁円盾が開花展開する。

——半透明の盾越しに、射手と目が合う。

「——距離約8. 000。盾の感じからして速度は2. 000
毎秒パーセント。」

結界ぶち抜いてこれか………」

膨大な魔力をため込んだ宝石で、詠唱を省略して展開する。

——高度な投影には投影する物の精密な構造把握が必要になる。

今回の、宝具の投影なんてものはその最たるものだろう。

反射的な投影で杜撰な設計になってないかが不安だったが、何度も投影していることが幸いし、いつも通りの強度を保っていた。

普段から作り続けていた料理をレシピ無しで慌てて作ったけど、材料が無駄に良かったせいで何とかなってしまうた、といった感じだろうか。……背に腹は代えられないとはいえ、材料を無駄遣いしている所も含めてよく似ている。仕方がないとはいえ、宝石魔術はそんなものだ。

守銭奴思考を追い出し、彼方の高層ビルを見つめる。

その男——弓を使ったサーヴァントと再び目が合う。

此方を見るソイツが、微かに頬を緩めたような気がした。

化け物だな、という一言を飲み込む。

その代わりに、頬を歪ませる。

——だからこそ越えたい、と。

「アキラ……ッ。大丈夫、夫……見たいですね」

「何とかね。」

今確認した、アーチャーのサーヴァントだ。

———すまないが、この場はお開きにさせてもらおうか」

「私も構わない。」

不安を抱えてはライダーも全力で戦えないだろう。

前哨戦としては十分。美しい戦場の華には、こんな戦いで立ち枯れて欲しくは無い」

「いろいろと言いたい事もあるが———同感だ。」

貴公のような大英雄とは、もっと相応しい舞台で相見たいもの

だ」

ライダーは己のマスターと目を合わせ、頷く。

二人の英^{サーヴァント}霊の間を分かつように、光が渦を巻く。

光の粒子が集まり———現れるは黄金の光子を纏う白馬。

「———私たちは、アーチャーを討ちに行きます。」

バーサーカー———何れ、また」

召喚した騎馬に乗り、先ほどまで戦っていた得難い強敵に別れを告げる。

涼やかな宣告をバーサーカーは快く受け、剣を消し、戦闘の間合いから離脱する。

それと同時にアーチャーの矢に貫通されて半壊した結界が、淡い光を放ち完全に消失する。

「アキラ」

「念のため聞くけど——前、それとも後ろ？」

「前をお願いします。貴方の盾が必要だ」

「了解。——後ろだと吹き飛ばされるのか……………」

ライダーが差し伸べてくる手を取る。

そのまま引つ張られ、抱きかかえられるように馬に騎乗する。

「しっかり掴まってください」

「出来たら、その台詞を言う側になりたかったなあ」

「今回は諦めてください。——それでは、行きますよ。」

「お願いします、スプマドール」

——スプマドール。

ライダー——メローラが冒険の旅に連れていた相棒にして、アーサー王の保有する名馬。

太陽神の眷属の血を引いているが故に、僅かなの神性を帯びているこの馬に乗って旅に出たという逸話こそが、メローラという英霊サーヴァントがライダーの英霊として呼ばれることになった所以である。

呼び出された愛馬は主人の言葉に、一鳴きし空を蹴る。

そしてそのまま——空中を走り出す。

圧倒的な浮遊感。

暴風が頬を撫で叩く。

身体強化を重ね掛けする。

「——どうですかアキラ、空を飛ぶ感覚は？」

こんな状況なのに暢気に訊ねてくるライダー。
返答は決まってる——。

「控えめに言って、最っ高だよっ!!」
大声で返す。

そうしないと届かないだろう。

轟轟と吹き荒れる風とは無関係に、そんなことを思った。

ライダーはそんな答えに満足したのか、己が愛馬に更に加速するよ
うに迫る。

そんな気配に、やれやれと思いながら身体強化を更に重ね掛けす
る。——新たに宝具を投影する準備をしながら。

——この時、ライダーと晶の二人、そしてバーサーカーは
アーチャーのマスターがアーチャーの側にいた事に気が付かなかっ
た——いや、気付けなかった。

「——受け止めたか」

高層ビルの屋上で。

アーチャーは感心したように「良い盾だ」と呟く。

「感心している場合ですかアーチャー」

相変わらずの鉄面皮、だが微かに浮かび上がるのは呆れ——
——で誤魔化した恐怖。

それを悟り、硬くなった精神を緩めるように、軽めの口調で続ける。

「感心するとも、俺の全力の狙撃から生き延びたんだ。それもサー
ヴァントではなく魔術師^{マスター}が。」

俺の弓は戦場ではなく狩りで使うもの。人間よりもアイツらは殺
気とかに敏感だから、俺の射はそういうのは出来るだけ隠すように打
つんだが……………」

「——遠坂晶」

ぽつりと呟いたその名前からは怯えが感じられた。

アーチャーは「それが彼の名前かい？」ととぼけるような口調で返

す。

「現代の英雄 ■■■の長子。

父親と同じく理由は不明ですが、常軌を逸する精度の投影魔術を使用する。

その投影は宝具でさえ複製することが出来る、と聞いています」

「成る程、あの盾はそういう事か。

でも、どれだけ良い武器を持っていようとも使いどころを間違えたら意味が無い。

そして、彼は間違えなかった。そういう事だろう」

「成る程——8. 037メートルを1. 98秒で、単純計算

で音速の1.2倍を超える速度で迫る矢を無警戒の右後頭部から受けて対処した、というのですか……………」

サーヴァントが先に気付き、警告したようですが、正に化け物ですね。私のように兵器として作られた訳ではないのにこの練度、此処まで鍛え上げるのにどれ程の修羅場をくぐったのでしょうか？

まあ、そうでないと運用試験の——」

アーチャーはメセネトの両頬を軽く押さえ、その言葉を中断させる。

「はい、ストップ」と目線を合わせて言い聞かせる。幼い子供にそうするよう。

「何回も言うけど、自分の事を兵器とか道具って思うんじゃないよ。

君は、メスケネト・プロビデント・アंक・ハロエリスって名前持っている。

その上で、メスケネトじゃなくてメセネトって呼んで欲しいって言っていたんだから、少なくとも僕は君を人間扱いするよ」

「あの時の一言は忘れてください、とっさの事態に出してしまった失言に過ぎないので」

「そういうのを本音って言うんだけどね。

——さて、やっぱりこっちに来るかライダー」

弓騎士は、サーヴァントとして召喚されても衰える事の無い生来の目ライダーの良さで、騎乗兵が其のマスターと前に乗せて空を掛けだすのを見

つめる。

そしてメセネトは――

「そのようですね、私も『目』で確認しました」

――淡い黄金の光を宿した『目』で見下ろす。

「さて、どうしますかアーチャー？――ランサーもこちらに迫っていますが」

「決まってるだろうメセネト――」

――紅蓮の英^{サーヴァント}霊。

遥かな上空からその姿は確認できた。

マスターの権限で確認すると、クラスはランサー。

――時折、尾を引く魔力の炎を纏う。

その炎は小柄な体に推進力を与え、ランサーの飛ぶような高速移動を可能にしている。

恐らくはスキルか宝具に因るもの――そこまで思考が働くと同時に保有スキルの一つが明らかになる。

ランクAの魔力放出（炎）――魔力放出というスキルはライダーも持つっており、武器や体に魔力を帯びさせその威力をブーストするという物。このランサーの場合は炎の魔力を帯びる。

――成る程。

アーチャーのいる高層ビルを目指して移動しながらも、こちらへの警戒を怠らないランサー。

彼に対して、遠坂晶は『厄介』という感想を抱く。

そして、ライダーに「取り敢えず様子見かな」と伝える。

「それもそうですね。」

アーチャーもこちらの戦闘を見ていたのでしょうから、こちらも見物するとしましよう」

返って来たのは賛成の言。

何時でも宝具を投影する準備をしながら、柔軟な対応が出来るよう

にほんの少しだけ気を緩める。

ランサーがアーチャーと接触し、戦闘を開始するまでに、今手にしている情報の整理をする必要がある。

「――バーサーカーについて、貴方はどのように思いますか？」

「彼の大剣の銘が分からないから確かな事は言えないけど、真名の見当はついた」

「やはり、貴方もですか」

アーチャーとランサーの情報はほとんどなく、間もなく始まる戦闘で確かめればいい。

ならば、先ほどまで戦っていた強敵についての情報を整理する、という事を選んだ二人。

互いに、サーヴァントの真名という最も重要度の高い情報についてある程度の見当が付いており、二騎への警戒を怠らずにそのすり合わせを行う。

「――直接会ったことは無いが、久しぶりだなアーチャー」

「そうなるな、ランサー」

スキル魔力放出(炎)によって幾つもの高層ビルの屋上を経由し、ランサーは昇って来たばかりの月を背負ってアーチャーの目の前に降り立つ。

件の高層ビルの屋上はそれほど広くない。

精々15メートル四方、といったところだろう。

数羽のカラスが見守る中、コンクリート打ちっぱなしの広間で二騎の英^{サーヴァント}霊は向かい合う。

「ところで、得意の狙撃はしないのか？」

「お前の場合、炎で強引に焼くだろう」

「そりゃあそうだ」

「それに、的が小さいからな」

「言ってる」

アーチャーは辺りを見渡しながら「ところで」と切り出す。

ランサーがこのビルに到達する少し前から大量のカラスがこの高層ビルの周りに集まって来ている。

「このカラスはキャスターか？」

「そうみたいだな。」

まあ、別に問題ないだろ。キャスター以外に見ている奴もいるしな」

ランサーは上空を指さしながら告げる。

「それとも」ランサーは長大な杖に炎を纏わせ刃を作った大鎗を構えて「誰かに見られてたら戦えないのか？」と挑発する。

ランサー自身の小柄な身の丈どころか電柱に届きそうな長さの業火の大鎗を付きつけられたアーチャーは――

「そう挑発されては仕方ない。キャスターが美しい女性だったら恰好悪いところを見せることになるだろう」

――弓ではなく、棍棒を構えながら応じる。

「いや……………弓使えよ、アーチャー」

「俺の弓は燃えたりしないが……………霊体化すれば直るとはいえ、ちよつとでも歪んでほしくない」

直後、二騎のサーヴァントが激突する――ことは無かった。

ルーンを使うことから、恐らく北欧神話に登場する英雄。

大剣を自在に使いこなす美丈夫。

正直にいうと、これだけの情報でかなりの精度で真名にたどり着く。

更に――

「――あの時、バーサーカーはライダーが女性ってことを看破している」

「恐らくそうでしょうね」

ライダーの宝具『男装の青騎士』ドレス・アー・マメント

この宝具は、男装をして旅としたことに由来しており、ステータスの一部と宝具を隠蔽する。

それと同時に、ライダーを男性だと錯覚させる、という効果がある。常時発動する隠蔽させるという効果とは異なり、錯覚させる効果は、些細な理由で解除することが可能である。

「北欧神話には、鎧を着ていた女性から鎧をはぎ取った逸話がある英雄がいた」

「彼はその鎧をはぎ取るまで女性だと気づかなかった」

「彼はその女性と恋に落ちる」

「その女性は戦乙女ワルキューレ、北欧神話の主神にしてルーンの起源ルーン——大神オーディンの娘」

一拍。

既に分かり切ったことを確認しあう作業はこれで終わり。

「——シングル」

二人は一人の英雄の名を告げる。

北欧神話において、主神の力の象徴である槍を砕いた北欧神話最強の英雄。

愛する女性の父親を失権させることで、その父親から彼女への支配を破った。

しかしながら、主神を渡り合った青年は親族から利用された。

その結果、最愛の人を忘れた彼は——全てを知り、もう青年が自身の名を、愛する女性の名として呼ぶことが無い、と知りながらも——尚、彼を愛し続けた女性に殺されることで、その生涯を終えた。

さて——

「——で、どうする？」

二人の声が見事に被る。

彼は竜の心臓を食べることで、戦乙女ワルキューレと渡り合える無類の膂力と動物の言葉を理解するなどの神々の智慧を手に入れたされる。

この逸話こそが、ライダーの聖槍でのみ有効な攻撃をすることが出

来た理由だと推測できる。

だが、納得できない事が数多くある。

治癒魔術を使っているように見えなかったのに、何故聖槍以外の攻撃による傷以外はすぐに直ったのか。

どうして、バーサーカーなのに理性を保っているのか———とか、何故バーサーカーで召喚したのか。

「まあ、バーサーカーの真名については目星がついたけど、間違っている可能性も有るってことなのかなあ」

「そうですね………。ほぼ正解だとは思いますが、これからも情報を集めるべきでしょう」

「そうなるね。」

アーチャーとランサーの戦いも始まるみたいだし、バーサーカーについての話は此処までにしようか———って何あれ？」

遙か上空で、アーチャーとランサーの一騎打ちを見物しようとしていた二人は———

ランサーが背後から正体不明の衝撃を受け、アーチャーに向かって吹き飛ばすランサー。

それに対し、アーチャーは右に避け、そのまま南方に逃走していく。

体勢を立て直したランサーはアーチャーを追いかける。

そして、様子見をしていたライダーと晶も二騎を追う。

アーチャーのマスター、メセネトの行方はアーチャーのみが知っている———。

「———オレから逃げられると思ったのか？」

「いや、単純に場所を変えるのに都合が良かったから利用しただけだ。」

あそこは人が多いからな、ランサー」
杉羽良市南西、森林地帯――。

金髪碧眼で長身の青年と外見だけなら十歳に思える男。

謎の遠距離攻撃から約十分――場所を変えて、両雄は再び相見える。

「さて、決着をつけるとするか。

此処は見通しが悪いから、さつきみたいな妨害は無エだろう」

「そうだね――キヤスターは例外みただけだね」

対峙する――

そして、今度こそ――激突する。

ランサーの鎧は長すぎる。

獲物が長物の場合、そのリーチは大きな長所でもあるが――

――同時に大きな短所でもある。

相手からの攻撃が届かない距離から一方的に攻撃を出来るが、柄が長い武器は取り扱いずらく――特に狭い場所では振り回しづらい。

ここは森、障害物が多すぎる。

いくらサーヴァントの膂力が埒外でも、木々を倒しながら戦っては威力が減少するだろう。

しかも、ランサーの鎧のように長さが6メートル近くもある場合は、地面すらも障害となるだろう。

だが、彼の場合は異なる。

そもそも、使いこなせない武器を使うはずがないのだから――

ランサーの持つ鎧は、武骨な長杖に炎を纏わせて刃を作った物である。
炎で刀身を形成しているが、炎故にその形は不定形であり――

――業火の鎧が、業火の杖に変わる。

――不定形が故に、どの場所に炎を纏わせるかは自由である。

アーチャーが、己の直感に従い飛びのく。
直後、アーチャーのいた場所を灼熱が通過する。
横薙ぎの一撃。

その軌道上にあった数本の木は切断——いや、焼き切られている。

ランサーの杖は木に触れた瞬間、水分を多く含む生木の断面だけを
一瞬で焼却——蒸発させた。

二発目は振り下ろし。

左後方に躲したアーチャーは、杖の軌道に沿って地面が気化するの
を目撃する。

——頬が引きつるのを感じる。

そして——ランサーの炎によって、周りが燃えていないこ
とを確認する。

続いて、大振りな突き。

赤熱する杖が引き戻される動作から、アーチャーはランサーの攻撃
を予想していた。

突きの場合、ある程度軌道を変更することが出来るため、選んだの
は棍棒による防御。

そして、受け止めた瞬間、失策を悟る——

——杖が棍棒に触れた瞬間、杖が火を噴いた。

体勢が崩れかけたアーチャーは、炎の威力を利用して、自分から後
ろに吹き飛ばす。

空中のアーチャーに対し、ランサーは火を噴く鎗で袈裟に薙ぐ。
鎗から放出された烈火の大鞭を大振りの棍棒で防ぐアーチャー。

——炎の軌道が不自然に変わる。

アーチャーは避けられないことを悟り、ランサーは己の炎が直撃す
ることを確信する。

——不可視の衝撃によってアーチャーが吹き飛ぶ。

謎の衝撃のが飛んできたと思われる方向を、とっさに振り向くランサー。

しかし——彼方には、昇つて来たばかりの月が輝くのみ。

ランサーは舌打ちをし、アーチャーを追う。

「——どうなってんだ」

怒りが限界を越えた能面のような顔で、ランサーはアーチャーに向かって憤りをぶつける。

——確執に仕留めたと思うたび、アーチャーは原因不明の衝撃によって吹き飛んでいく。

何度繰り返したか、数えるのも馬鹿らしくなる。

「しかも、こんな状態で仕舞いだと……っ」

「仕方ないだろうランサー。正直こちらにとってありがたい」

「クソっ!——」

「——目撃者だと……!」

「諦めるしかないだろうランサー。

不完全燃焼なら、君にその目撃者の始末を任せよう」

「チ——」

魔力放出による炎を撒き散らしながら、ランサーは霊体化せず目撃者を追いかける。

「やれやれやっと思ったか。

「さて——」

アーチャーは空の一点を見て呟く。

「——こちらも、目撃者を始末するか」

——アーチャーと、上空のライダーの目が合う。

「ライダー……………」

「ええ、そのようですね」

遠坂晶とライダーは、アーチャーとの戦いが避けられない物だと確信する。

「——アーチャーのヤロウ…………ツ」

目撃者を追うランサーは、アーチャーがライダーと戦おうとしているのを見て、思わず殺気立つ。

ふざけるな。

此方が目撃者の始末のような作業を行っているのに、彼方はサーヴァント同士の戦いという花々しい戦闘を行おうとしている。

其処を変われと声を大にして言いたい。

ランサーはそのまま遣る瀬無い感情を抱いたまま目撃者を追いかける。

しかしながら、此処は森林で見通しが悪い上に、何らかの魔術による結界が存在するらしく、中々距離を詰めることが出来ない。

ランサーは、魔術師とはいえ一般人を未だ殺害出来ない事に苛立ちながら追跡を続け——

——ランサーの望む、花々しい戦闘を行うことが出来る相手と遭遇することになる。

11 12月1日／未明②——招かれ
るは、幕を切る者

その屋敷は広大な森林の中にあつた。

——月が昇ってくる。

その少年は、彼しかない洋館の窓から、他にする事も無いので月の出を眺めていた。

月齢は24——下弦の月よりも少し欠けている。

——ここ数日、ナニカがこの街に居る。

彼は十八年ほど目を覚ますことは無かつたが——数日前に再び目を覚ました。

原因は大量に魔力を持ったナニカ（恐らく、誰か）がこの街に現れ、活発に行動し始めたから。

杉羽良市には、かつて華楼かろうという魔術師の一族が住んでいた。

自明のことだが、『かつて』としたのは既に滅んでいるからである。

二十四年前に杉羽良市で行われた亜種聖杯戦争によつて、その一族は衰退。

保有していた管理セカンドオーナー人という役割も失い、華楼かろうという魔導の名門は元名門となり四散した。

かつて彼らが住んでいた屋敷には、一人の老いた魔術師のみが残つた。

その魔術師にとつて、その豪邸は広すぎた。

その為、屋敷の管理をしてくれるダレカを創つた。

ダレカを創り出した時、魔術師は気付く。

屋敷の管理だけなら適当な使い魔でいいはずなのに、何故わざわざニンゲンを創つたのかを——

その魔術師が作ったニンゲンは無垢な少年だった。

その少年は、何かを教えようと貪欲なほどに吸収していった。

魔術であつても例外ではなく、魔術師はその少年に物事を教え、その成長を見守ることが生きがいになっていった。

老いて朽ちていくだけの古い先短い余生、時間を持って余しているのなら他の事をすればいいだろうに、我ながら酔狂な事だと呆れながら、老いた魔術師は少年を育て続け――

魔術師が死んだ後、少年は時間を掛けて、屋敷の有る森林の全域に大規模な結界を敷いた。

その後、屋敷の敷地全体を『中に彼がいる状態で』封印し、結界に異常が生じそうになったときのみ、その封印が解除されるようにした。

その封印が解けたのは十八年前に一度だけ。

彼の住んでいる洋館は、文字通り時間が止まっていたのだ――

――数日前までは。

少年は異常の原因を探ろうと思ひ、十八年ぶりに屋敷から外に出る。

異常が自分の手に負えるならば自力で解決――排除するだけの事であり、手に負えないのなら――

少年は意図的に、その先を考えることを止めた。

――今感じているナニカの気配が、十八年前に遭遇したソレと似通っていることに気付きながら。

そして少年は目撃する――神話の戦いを。

二十一年前、何故彼が広大な結界と強固な封印を成したのか――
それは彼以外知らない事であり、知る必要もないだろう。

「やれやれ、やっと行ったか」

偶然現れた目撃者によって、ランサーとの戦闘を切り抜けたアーチャー。

戦いの余波で森は荒れ、辺りは開けている。

炎を操っていたランサーが目撃者を追って去って行ったことで空気が冷え、周りから冬の寒気が吹き込む。

乾燥した空気に低い気温、そして強い風。

東の空、低い位置にある月が良く映える。

もう少し見ていたい気持ちもあるが、視線を上にはズラす。

「さて――」

――騎影。光纏う駿馬と騎乗する二人。

――ライダー騎乗兵のサーヴァントとそのマスター。

前にマスターを乗せ、美しい騎士は凧いだ瞳でこちらを見ている。

先ほどの狙撃で標的にしたマスターの少年の目からは強い意志を感じる。

フ、と頬が歪むのを感じる。

勝手に狙撃しておいて生き残って欲しいと思ったのは此方だが、まさか生身でライダーの召喚した馬に乗ってくるとは思わなかった。

「――こちらも、目撃者を始末するか」

「――ライダー！……」

「ええ、そのようですね」

上空。

淡い光を纏う騎馬に騎乗し、目を保護するゴーグルの代わりに礼装の眼鏡を掛けた遠坂晶とマスターライダーの英サーヴァント霊は地上を睥睨する。

――ランサーがアーチャーとの戦闘を止め、森の奥に走り出す。

地上を警戒しつつ、二人はその先に建物の屋根が見えることに気が付いた。

そして直後、地上からの視線に反応する。

地上。

ランサーとアーチャーの戦闘によって荒れており、俯瞰して見ると、深い森に何か所か隙間が出来ている。

そのうちの一つ、アーチャーとランサーが最後にせり合っていた場所。

其処から此方を見上げるアーチャーからは、先ほどまで感じなかった強い意志を感じる。

遠坂晶とライダーの二人はアーチャーの戦いは避けられないと確信する。

——遠坂晶とライダーの二人は、アーチャーのマスターの行方を——存在すら知らない。

その頃、ランサーは目撃者の少年を追っていた。

森全体を特殊な結界で覆っており霊体化が出来ない。

その上、深い森故に視界が悪く、結界がさらに悪化させる。

それに加えて、結界を壊しても数秒経てば勝手に直ってしまう。

目撃者にアーチャーとの戦いに水を差された事。

自分がこんな汚れ仕事をしているのに、アーチャーはライダーを戦おうとしている。

苛立ちを溜めつつ、ランサーは目撃者を追い続ける。

——目撃者の少年は、自らの工房でもある屋敷に逃げ込もうとしていた。

さて、お立合い。

太陽の神性を持ち、天を駆る騎馬。

騎乗するは、騎士王の娘。そして英雄の子。

迎え撃つは、弓を構える美丈夫。

敵う者無きと神話に謳われた、美丈夫の狩人。

光纏う名馬が天を駆け下り、弓に矢が番えられる。

弓兵と目が合ったのは騎兵か、それとも魔術師か――

アーチャーは落ちて来る流星を見上げ、神速を以って矢を番う。

静かさと正確さが要求される狙撃とは異なり、向こうから向かってくる場面で要求されるのは速射。

元より彼の矢は必中であり、外れることはあり得ない……いや、間違っている。

先ほどは静かに行われた、弓に力を籠め引き絞るという工程――

――しかしながら、此度は弓が軋む勢いで行う。

――ライダーの前で馬に跨る魔術師が、右手を前に突き出し、静かに目を閉じる。

相手の目論見が分かったアーチャーは――敢えて自分から、その目論見に乗る事にした。

ライダーは弓に番えられた矢を視認し――敢えて、愛馬を

愚直に突進させる。

先の狙撃は、バーサーカーによる結界を貫通したことにより、威力が大幅に減衰していた。

従って、此度の射は先ほどよりも威力・制度共に高いことが明らかである。

このまま直進させ続けることは、自分から的にしてくれと言うような物である。

だが――目の前で、彼自身にしかできない事を成そうとす

る少年を見て、任せようと思った。

英雄の子として生まれ、英雄に成りつつある少年に、頼もしさと眩さを感じながら——ライダーは愛馬に更なる加速を促す。

——弓から、手が離される。

——放たれるは、一条の光。

遠坂晶は、矢が放たれたことを感じる。

心象に深く沈み込むために目は閉じており、超音の矢弾ゆえに耳で捉えたわけでもない。

——だが、感じた。

そのタイミングは正確——なおかつ何時、何処に、どれ程の威力で飛んでくるのかを大まかに把握していた。

さて、これから投影くり出すするのは——盾にして盾に非ず。

思い浮かべるのは、深紅の背中。

その男は不屈。

彼の精神は不朽にして無毀。肉体が減びようとも、減び、途絶えることは無い。

故に——

「I grew seeing the blade
——剣の男を知っている」

これから投影くり出すする概念は守り。

投擲に対して無敵と言う概念を保有する『絶対宝具』——。

その性質故に、今は亡き父親英雄が好んで多用した——そして

て、心象を継承した息子少年が信じ、頼りにする『至高の一宝具』——

「熾ロー天覆アう七イつの円環ア」

あの人はこの盾の投影を二通りの方法で用いていた。

一つ目は——人知を超える相手に対して行う、膨大な魔力で強化する一点防御。

そして二つ目、自分以外の不特定多数を守る時に使われる——

——綻びの一切無い城壁。

自分ではなく、誰かを守るために此の盾を投影する時、その心は凧いでいた。

誰のことを守りたい。その事こそが、自分の望みだと言わんばかりに

——天駆る光馬の目の前に、深紅の光盾が展開する。

熾^{ロ!}天覆^アう七^イつの円環^ス。

投擲に対して無敵という概念を保有した、七枚の花卉を模した円盾。

一枚一枚が古の城壁と同等の防御力を持ち、味方に向けて放たれた大英雄の投擲を防いだ逸話を持つ——自分だけではなく、誰かを守る事の出来る宝具。

——一条の光と円壁の光が衝突する。

その刹那、衝撃が撒き散らされる。

——拮抗はほんの一瞬。

——直後。高く、澄んだ音が響く。

光盾に陰りは無く、光条は失墜する。

展開した盾は、本体の弓矢および付随する衝撃を遮断する。

光纏う駿馬は一切の痛痒を感じていない。

速度を落とすことなく突進してくる、光盾を展開した騎馬に騎乗し、馬上槍を構えた重装騎士。

純白の尾を引きながら迫る、深紅の流星を見ながらアーチャーは——

——息が切れる。

『彼』は必死に逃げていた。

森の全体に広大な結界を敷いたからこそ、自分を追ってきている男の位置が、速度が——強さが分かる。

炎を司る異国の魔性。

読んで字の通りの人外。正に人知を超えた存在。

つまり——聖杯戦争に招かれた英^{サーヴァント}霊。

恐ろしくてたまらない。

あれほどの存在感を持った『敵』がこの街に七人いる。

一体、何の冗談なのだろう。

聖杯戦争、という儀式については育て親から聞いている。

万能の願望器を求める魔術師同士の争乱。

彼らは、各々が自身の戦力として英^{サーヴァント}霊を召喚し、互いに殺し合う。

令呪——聖杯戦争の参加権にして、英^{サーヴァント}霊を律する事の出来る三

度きりの命令権——を持つ七人の魔術師と英^{サーヴァント}霊による、最後の一人になるまで終わらない最小単位の戦争。

あの戦いを見てしまった、知ってしまった——だから殺される。

——ふざけるな。

何故そんなことで殺されなくてはならない。

この街の平穏を乱した余所者なんかに——

自分以外はどうでも良いなんて思っている奴らに——

例えば目撃者が一般人でも、我が物顔で殺すような人でなしに——

——ならば、どうすればいいのか。

逃げることは出来ない。

例えば地の果てまで逃げようとも、英^{サーヴァント}霊なら本当の地の果てだって

容易くたどり着くだろう。

それに——つまらない意地だとは分かっているが——自分だ

け逃げたくはない。

——ならば、どうすればいいのか。

右の手の甲に、焼けるような痛みが一瞬走る。

少年は、屋敷への最短距離である北西の入り口ではなく、敢えて迂回して南東の入り口から屋敷に入り込む。

——何をすべきなのか。そんな事、初めから分かっていた。

——熾^{ロ!}天覆^アう七^イつの円環^ア。

トロイア軍の総大将にして槍の名手。光明神アポロンに気に入られ、輝く兜と謳われた大英雄ヘクトール。

ギリシヤ軍最強の大英雄アキレウスを狙って放たれたヘクトールの投擲——あらゆる物を貫くと謳われた槍の投擲を、トロイア戦争における英雄アイアスは、七枚の皮を張った盾を用いて防いだと言われている。

その逸話が宝具となったが故に、この光盾は防御宝具と言うよりも、投擲に対しては無敵という一種の概念宝具である。

従って——この盾を遠距離物理攻撃で突破するのは、宝具以外ではまず不可能だろう。

——ならば、直接的な物理攻撃ならばどうだろうか。

アーチャーは僅かに反った刃を持つ長剣を抜く。

天に輝く星々を思わせるような光を帯びた白銀の刀身は、並みの宝具に匹敵する程の神秘を帯びているように思える。

形状はサーベルに近いが、柄の長さが両手でも扱えるように調整されており、反りの有る片手半剣^{バスタードソード}と言っても良いかも知れない。

前面に光盾を展開した、天駆る光馬に乗ったライダーが迫りくる。

同郷の英雄が用いた盾——その逸話に、アーチャー自身の死因に纏わる存在が関わっているだけに、何かの因縁すら感じる其れ——
——ごとアーチャーは貫こうとする。

——刺突。

線攻撃の斬撃とは異なり、一点に威力が集中する刺突。

この一撃をもつて光盾を突破し、ライダーの騎乗する輝馬を仕留める。

この時アーチャーからは、深紅の障壁によつて天駆る輝馬と騎乗している二人の様子が見えていない。

逆に、駿馬と二人からは——特に、盾を投影削り出したした魔術師の少年からは——アーチャーの様子が良く見えた。

——この差異が、これからの行動に大きく影響する。

隔てる距離はおよそ三十メートル。

——不意に、深紅の光盾が消失する。

驚き、一瞬だが動作が止まるアーチャー。

対して、あらかじめ知っていたライダー。

——その違いは些細だが、その刹那が命取りである。

天を駆る光馬が虹色に輝く泡を吐きだす。

高速で飛翔した輝く泡はアーチャーに纏わり付く。

失策を悟ったアーチャーは急いで飛びのくが、纏わり付いた泡が

アーチャーの動作を阻害しており、その動きはぎこちない。

天を駆る輝ける騎馬から距離を取るアーチャー。

——先ほどの、謎の衝撃による回避は使わない。

何故だ？

いや、考えるな。

——ライダー。

——分かっています。

「お願いします——虹泡吐く太陽の輝馬っ!!」

——光が溢れる。

真名開放。

此処にライダーの宝具が開帳する。

—— 宝具。

より正確に呼ぶならばノウブル・ファンタズム 幻想。

主に英霊が持つ、人々の幻想を元に編まれた武装のことを指す。さて、宝具には様々な種類がある。

例えば、剣や槍、弓といった武器からチャリオット 幻獣や戦車などの騎乗物、果ては巨大な建造物や世界そのものまで、様々な『カタチ』を持ったもの。それ以外にも、特定の『カタチ』を持たないような、その英霊が有する『特殊能力』などが該当する場合もある。

英霊には彼ら固有の逸話があり、逸話があるからこそ英霊として祭り上げられる。

それ故に—— 逸話から形成される宝具には—— 例え同じ英霊でも、場所や年代、解釈が異なるのならば—— 完全に同一の物は決して存在しない。

つまり、宝具とは—— 英霊が生前に築き上げた伝説について、呼び出した時間・場所・状況でどのように解釈しているのか、ということの具現にして象徴である。

第九次聖杯戦争において、ライダーのクラスで召喚されたサーヴァント。

—— 真名をメローラ。

アーサー王伝説に登場する女騎士であり、騎士王—— アーサー・ペンドラゴンが娘。

優れた容姿と知恵を持ち、それ故に多くの求婚者がいた。

そして—— 彼女は宮廷を訪れた一人の王子、オルランドと恋に落ちる。

その事に求婚者の一人が嫉妬。マーリンに対して、自身の領土の半分と引き換えにして恋人に呪いを掛け、監禁する事を依頼した。

その呪いを解くためには三種類の秘宝が必要な事が分かり、メローラは囚われた恋人を救い出すために、解呪の秘宝を求めて世界中を巡る旅に出る。

男装して旅をする彼女は、『青い武装の騎士』として知られるようになる。

そして、メローラがライダーのクラスで召喚される所以は、彼女が父親——アーサー王から借り受けた名馬にある。

その名馬の名をスプマドール。

太陽神の眷属の血筋を引き、虹色の泡を吐き出す稀代の名馬。

そして——姫としてだけではなく、騎士としても類稀な才能を持っていた彼女は、その名馬を十全以上に乗りこなした。

——光が溢れた。

使い古された一節だが、太陽がもう一つ現れた、という表現が相応しいだろう。

虹泡吐く太陽の輝馬。

その真名を開放することの効果は——太陽神の血筋を強調し、その力を開放する事。

疑似的な陽光を受け、アーチャーに纏わり付いた虹色の泡が乱反射。直後、一斉に弾けた。

そして、虹泡が弾けたことで発生した衝撃がアーチャーを襲う。

アーチャーは、生来の心眼と与えられた神眼によって次の攻撃を予測する。

しかしながら、体を貫く衝撃によって行動が大幅に制限される。

——一時的に硬直したアーチャーに、天駆る輝馬が衝突する。

辛うじて、呼び出した棍棒で防御したが、アーチャーは大きく吹き飛び——森に消えていく。

——森の中では、馬に乗ったままでは不利。

そう判断した遠坂晶は、馬から飛び降りる。

直後、弓と矢を投影し――

――殺気に気付く。

方向は、アーチャーが消えていった正面の森の方向からではない。別の方向、しかしながら程近く。

そして――視認できない。

――不可視。

その事に、アーチャーが利用した謎の衝撃と結びつく。

ならば、この殺気にはアーチャーの宝具――または、宝具に準ずる物――なのだろうか？

身構えながら、思考を巡らせる。

直後、不可視の斬撃が放たれる。

狙われた遠坂晶は、その攻撃の正体が宝具ではなく、風を利用した魔術によるものと気づいた。

広大な森の中にある、ひと昔まで栄華を誇っていた魔術師の一族が保有していた屋敷――幾代もの歴史を積み重ねた魔術師の大工房。

上空から見ると、その屋敷を囲む高い塀が八方位に対応した正八面体を形成していることが分かる。

正八面体のそれぞれの辺の塀にある門から中に入ることが出来、屋敷と塀の間のスペースに広い中庭が八つの辺ごとにある。

南東部にある中庭。

石畳の床に、家の外壁と塀に、大量の対人用の罾が仕掛けられている。

魔術師の少年は、紅蓮の槍兵と対峙する。

「――やっと思い詰めたぜ。魔術師」

「やっ、どうでしょうか？」

これから倒れるのは貴方かもしれませんよ」

少年がそう告げると、罾が次々と発動していく。

しかしながら――それらは、目の前の存在に対して、ほと

んど効果を成さない。

幼さの残る少年が、恐怖を抑えてサーヴァントと対峙している理由は、太刀打ちできる、という自信があるから——ではない。

ここで、敵わなければ後がない。

だからこそ、無いに等しい勝機を逃したくない。

——少年は決死の覚悟を抱いて目の前の『死』と対面していた。

「これで、仕舞いか？」

「そうですね、対人用の物は以上ですね」

「対人用の物は、か」

「ええ、時間稼ぎに付き合ってもらって恐縮です」

荒れ果てた中庭。

対して、紅蓮の炎を全身に纏った槍兵は一步も動いていない。

「——ところで、森を焼いたのは貴方ですか？」

「ああ、そうだが。」

必要以上は焼いていねえが……悪かったな」

「いえ、謝罪してもらえば必要はありません——」

——何故なら、その行為が本で貴方が死ぬことになるのですから。

——面白い。ならばやってみろ。

互いに、目線で会話を終わらせる。

その直後、石畳の下に仕掛けられた、屋敷全体と連動する大規模な魔法陣が光を放つ。

魔術師の少年の周りの空間だけが隔離され、少年の安全を守り、詠唱の速度を——否、時間の流れそのものを書き換える。

対人用の罫として使われる一工程の魔術ではなく、瞬間契約レベルの儀礼用の大魔術が牙をむく。

其れは、この屋敷にサーヴァントが攻めてきた時の為の最終防衛。華楼という魔術師の一族が聖遺物を利用して作り上げ、亜種聖杯戦

争を経ることで一部破壊されたものを修復した物。

聖遺物を利用し、この屋敷そのものを小さな世界と定義。

そして、かつて聖遺物が置かれていた霊脈を中心として周囲を八方位で区切る。

これに対応して八方位に、今は失われた聖遺物に纏わる一柱の守護者に当たる魔法陣を配置する。

「天上に在っては太陽、中空にあつては稲妻、地にあつては祭火。

家を、森を焼く火であり、精神こころに宿る確かな熱。

あなたは世界に遍在し、万物を流転し、浄化する」

守護者の総称を護世八方天ローカパーラ。

ヒンドゥー教において、八方向の守護者として祭り上げられたバラモン教の神。

世界を護る八柱の護世八方天ローカパーラの内、南東の方角を守護する護世八方天たる一柱の神。

その名を

アグニ
炎神よ。

此方に、炎で焼かれた森から逃げ延びた羅刹ラクシャスがいます。

この者は、この先災いを成す者。庇護する必要の無き者です。

供物として、この者をあなたに差し出します。

願わくは、あなたの火を以つてこの地の穢れを払い賜え

アグニ。

仏教では炎天と漢訳される、炎の神。

火に備わる様々な性質の神格であり、特に祭火として重視される。

祭火は儀式において人と神の仲介を行い、死体から全ての穢れを取り除き神々の下まで運ぶ。

また、浄化とも強く結びついており、天則リタを犯す者や羅刹ラクシャス、魔族アスラを容赦なく焼き払う神でもある。

「祭火カーを此処ンに。炎天ヴァ・サよ、森ルを焼き払い賜え」

純色の赤で視界が塗りつぶされる。

神性を帯びた炎で出来た千の舌が、供物として捧げられた紅蓮の炎

を纏った槍兵を味わう。

マハーバーラタにおいて、大英雄アルジュナは炎神アグニから借り受けた神弓ガンディーヴァで火矢を放ち、カーンダヴァの森を焼き払ったとされている。

——その逸話の再現。

予め指定した範囲の一切を焼き尽くす、戦闘で使える範囲を遥かに逸脱した、Aランク相当の対軍宝具に匹敵する大魔術である。

遠坂晶を狙って放たれた不可視の斬撃。

その一撃を——

「——アキラ」

「ありがとう。助かったよライダー」

——ライダーが深紅の光で出来た結界を展開して防ぐ。風の斬撃は結界に阻まれ消滅する。

ライダーも遠坂晶と同じく、不可視の斬撃が風の魔術だと気付いていた。

——リング・カーバンクル
石榴の指輪。

ライダーが、追い求めた解呪の秘宝の一つ。

装備しているだけでAランクの対魔力を発揮でき、あらゆる魔術の侵入を防ぐ深紅の光の結界を任意で展開することができる。

「不用心ですよ」

「申し訳ない……」

会話を続けながら魔術遮断の結界を展開したまま維持し、周りに意識を巡らせる。

先ほどまで強く感じていた殺気。しかしながら、今は全く感じない。

——逃げられた。

自ずと共通見解に至る。

何故、急に殺気を放っていた相手が逃走したのか？

何故、不可視だったのか？

恐らくだが、先ほどの不可視に感じられる風の斬撃とアーチャーが関係していると思われる謎の衝撃の正体は全く別物ではないのか？

そんな疑問を抱く——前に、六番目の主従はアーチャーを追い始める。

物思いに耽るのは走りながらでも出来る。

ならば、一瞬でも早く追跡すべきである。

この瞬間、二人の思考は全く同じであった。

遠坂晶という魔術師がメローラという英霊を引き当てた要因は、こういうった性格の相性なのかもしれない。

「——良い炎だった」

2分30秒。

業火の大魔術が治まった後、若干の消耗は見られるものの、槍兵は生存していた。

「まさか生き残つてるとは思いませんでしたよ」

「ああ……神性を帯びているとは言え、炎でオレにこれ程のダメージを負わすとはな……」

オレも、此度の現界でこれ程の炎に出会えるとはとは思わなかった。ま、火焰山の炎ほどじゃないがな」

「——ッ!!」

なるほど、やはりあなたの真名は……」

「別に構わん。昔を思い出させてくれた礼だ」

「そうですね。ならば、炎神^{アグニ}ではなく財宝神^{クペーラ}で相手をすべきでしたね」

「地中にある財宝の守護神か。確かに、地面から神性を帯びた刀剣に突き刺されたら厳しいな」

言葉を交わす。

穏やかに、それはまるで――

「さて、それでどうする？」

お前は魔術師だが、それでも殺しておかなくてはならんのだが」

――それが最期になると示すかのように。

「いいえ――」

否定する。

「僕はここで、死ねつもりないっ」

――強く否定する。

右手の甲を槍兵に見せる。

――血の色で刻み込まれた三角の文様。

驚愕の表情を浮かべる槍兵を置き去りにして、少年の周りだけ時の流れが書き換えられる。

「祖には我が育母、華楼蓮花」

少年は言葉を紡ぎ始める。

中庭の跡地に残った魔力が秩序を以って流れ出す。

「(ここ)に宣言する。

――刻は満ちた」

光が溢れ、風が吹き荒れる。

既に六騎の英霊が呼び出され、聖杯は最後の英霊を速やかに呼び出そうとしている。

故に正式な詠唱は必要ではなく、最低限の意思表示があればいい。

槍兵は静観している。

「汝三大の言霊を纏う七天。

聖杯の寄るべに従い、我が意に応じる者よ。

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――!!」

聖杯戦争というルールに則り、英霊の座から稀人が呼び出される。

僅かに時をさかのぼる。

魔術師の少年が炎の大魔術を展開する少し前。

『無事ですかアーチャー？』

——ああ、大丈夫だ。

切羽詰まったような声が、アーチャーの頭の中で響く。

場所は樹海と見紛うような森の中。

ライダーに吹き飛ばされたアーチャーはマスターからの念話に答えた。

『それは良かったです』

ホッとしたような声が響く。

表情を顔に出すことが少ない事を知っているアーチャーにとって、その声は少しだけ新鮮だった。

『ところでアーチャー。貴方が今いる場所から件の屋敷は確認できますか？』

——あれほどの魔力——しかも、これから大技を出そうとしてるようだ……嫌でも分かる。

で、どうする？撤退か……それとも偵察か。

沈黙。

アーチャーは受け身の体勢から立ち上がり、屋敷の方向を見据える。

『——貴方に任せます』

——そうか。

こういう時、俺がどうしたいか知ってんだろ。

『ええ。その上で、です。』

ライダーとそのマスターへの最低限の牽制はしました。後で合流しましょう』

——やれやれ。

いくらメセネトが戦場を俯瞰できるとはいえ、自分の目で確認することに越したことは無い。

その事を知っているアーチャーは屋敷に向かって移動を始める――

——ところでメセメト、一つ確認してもいいか？

移動を始める前に、アーチャーは真剣な口調（？）で告げる。

『何ですかアーチャー？』

普段の飄々とした態度には似つかない雰囲気は驚くメセメト。

少なくとも交流から、アーチャーが偵察に向かおうとしていることは分かっている。

その前に、何か言い残すことでもあるのかもしれない——

そう感じていた。

——こういう時は、帰ったら結婚しようって言えばいいのか？

『よく分かりませんが心配して損しました。』

一回死んでください、と言いたいですが実際に死なれたら困るので去勢されてください』

——つれないなあ……。ま、さつきは心配してくれてありがとうな。

『何を言ってるんですか？』

勘違いしないでください。あの時心配していたのは貴方が怪我をしてしまうことではなく、貴方の戦力低下——または、貴方が脱落してしまうことです。

貴方が死んだら新しいサーヴァントと契約することが困難になるので生きて帰って来てください』

早口で言い返され、念話が途切れる。

「成る程、これがツンデレという物か。

いいものだな、ご馳走様とでも言うべきかな？」

そんな風にぼやきながら、アーチャーは霊体化して移動を開始する。

これからアーチャーが赴くのは正しく死地。

だが、アーチャーは気の抜けたような雰囲気歩き出す。

これは生前からの癖のような物。もしかしたら、緊張の欠片もない

様な振舞いこそが、余りある才能を持つ彼なりの強さの秘訣なのかもしれない。

吹き荒れる魔力の残滓が人影を写し出す。

魔術師の少年の意思により、此処に英霊の召喚が完了した。

——セイバー。

風に流れる長い黒髪と鍛え上げられた肢体を持ち、特徴的な白い衣装を纏う中性的な顔をした青年。

面と向かっている彼は、此方を安心させるような——同時に、何処か懐かしむような——穏やかな表情をしている。

刹那で距離を詰め、紅蓮の刺突。

——これに対応できない程度なら相手する必要は無い。

刺突をはじき、鎗ごと押し返す斬撃の暴風。

——この程度で俺を試しているつもりか？ 槍使い。

魔力光が治まるまでの一瞬で行われた烈火と暴風の衝突。

少年の認識を置き去りにして、二人の超越者は一瞬の交錯のみで言葉を交わす。

——一瞬の緊張。

槍兵は僅かに口元を歪め、彼方を一瞥すると塀を飛び越え立ち去って行く。

頼もしさを感じる背中が振り返る。

——「久しぶりだな、少年」

「はい、久しぶりですセイバー。この聖杯戦争に巻き込まれたことは災難ですが、貴方に借り受けたこの櫛を返すことが出来て良かったです」

古び、朽ちかけた櫛。

セイバーの手に渡ると、彼の魔力に呼応し古の姿を取り戻してい

く。

素朴ながら美しい装飾が施された——しかしながら僅かに色あせ、数本の歯が欠けてしまっている櫛。

——聖遺物。

膨大な神秘を帯びた現代に残った遺物。

聖杯戦争においては、主に英霊との縁を結ぶための触媒に使われる。

セイバーの手がこちらに伸びる。

「え……えっと、あの」

「何となくな」

頭を撫でられる。

——朝日に溶ける青年。掌には、渡された小さな櫛。

——頭に、大きな掌が置かれる。

——しばらく預けとく。

——重さが消え、風が頬を撫でる。遮るモノがないため、

朝日が直接目に届く。

その三日後、結界を掛けなおした。

「……………あの日を思い出します」

「そんな事より、相変わらずひ弱だなお前は。」

……というか成長してないのか？良く分からんが。

まるで——」

——まるで、時間に置いて行かれたようだ。

「……まあ、別に大したことではないけどな」

「相変わらず鋭いようで適当ですね」

不意に風の流れが変わる。

「——さて、再開を懐かしむのもいいが……それよりも前にや

らなくてはならない事が有るようだな」

セイバーは先ほどランサーが見つめていた方向に目を向ける。

今いる南東の中庭から見て北東——東側の塀の向こう側。

「霊体化しているようだが——どうする」

「——お願いします」

「委細承知」

セイバーが暴風を——嵐を身にまとう。

その顔は見えないが、壮絶な笑みを浮かべているような気がした。

東側の門からおおよそ150メートル。

塀の中が良く見える、高木の丈夫な枝の上。

アーチャーは、魔術師の少年の行使した炎の大魔術とサーヴァントの召喚を目撃した。

防具の一切を身に着けておらず、この国において神代の残り香が未だ色濃き時代の衣装のみを身に纏う好青年。

——あのサーヴァントはマズい。

真名など姿を見るだけで分かる。

この国で聖杯戦争を行うのならば、剣の英霊として、初めに候補に挙がるであろう大英雄。

——戦ってみたい。

俺の第一宝具以外の一射では掠りすらしないかも知れない。

使いたくない第二宝具さえも、あの英雄ならば突破出来るかも知れない。

従って、正しい戦法は不意を付いての狙撃による暗殺。

そんなことは分かっている。

——だからこそ、戦ってみたいのだ。

ランサーがこちらの位置を伝えたのは知っている。

精々200メートルの距離で、あの程度の素振りを見逃すようでは最高の狩人の名が廃れる。

——目が合う。

霊体化しているため目が合うことなど無いのだが———この時、確かに目が合った。

口元が緩む。

霊体化を解除し、神速の動きで矢を番う。

視界の向こうで、セイバーが風を纏う。

風を纏うセイバーが、アーチャー目掛けて跳ぶ———いや、飛ぶ。

———脳天を狙った一射。

矢は風に弱い。

そんな常識を無視し、暴風の結界を僅かに反れただけで突破。

そして、右鎖骨を粉碎するはずの矢はセイバーの雷閃によって弾き飛ばされる。

超音速の矢による衝撃波は剣士には届かない。

ここ迄で、コンマ4秒足らず。

彼我の距離は、おおよそ80メートル。

既に弓兵は、渾身の力で愛弓を引き絞っている。

———二射目。

60メートルの距離で放たれるマツハ15の矢。

正面から超音速で接近している事など関係なしに、もはや光としか表現できないような一矢。

———セイバーは更に加速し、僅かに体を逸らすことで対応する。

初めの一射で、こちらの風の性能を見極め、弾道の計算をしたアーチャー。

先の一瞬でアーチャーが弾道の計算が可能になったと確信し、アーチャーが想定していないであろう方法で回避したセイバー。

二人の読みが、奇妙なまでに噛み合ったが故に成立した二度目の攻防。

—— 彼の距離は20メートル。放たれる刺突。

—— 不可視の衝撃により跳躍、回避するアーチャー。

風圧によって、アーチャーが立っていた大木が大きく揺れる。

セイバーは、慣性の法則を無視するような軌道で上空に飛び立つ。

セイバーは身に纏う風を解除して滞空。そして、彼の持つ長剣が颯風を纏う。

—— 剣騎士の英霊は、剣を大きく振りかぶる。

—— 放たれる旋風。

空中にいては対応が出来ない事を悟ったアーチャー。

—— 再び不可視の衝撃が体を叩き、加速させる。

—— そして、着地予定地である東側の中庭に矢を放つ。

アーチャーは矢によって大きく破壊された中庭に着地する。

あらかじめ仕掛けてあった罫は大部分が使用不可能、大魔術用の魔法陣は完全に破壊されている。

—— 着地した直後のアーチャーを襲う竜巻。

—— 全くダメージを受けている様子の無いアーチャー。

空を見上げるアーチャーと滞空しているセイバーの目が合う。

アーチャーは、セイバーの服が全く靡いていない事に半ば呆れていた。

風を利用して飛んでいるならともかく、あのセイバーは自力で飛翔することが出来るらしい。

確かに、あのサーヴァントは自力で飛翔することを可能にするような逸話を持っている。とはいえ、流石に自重しろと言いたい。

セイバーは、先ほどの暴風でアーチャーが僅かほどにもダメージが無い事をいぶかしむ。

アーチャーは一切耐えていなかった。

恐らく、無効化していた。—— ならばどうするか。

一つ目は、今まで通り接近を試みる。

そして二つ目——より強い風をぶつける。

「——面白い」

そして、セイバーは更なる力業を繰り出すことにした。

風の——いや、大気の動きが変わる。

雲一つない夜空に、暗い色の雨雲が集まり始める。

——大規模な天候制御。

地上の法則が物理現象として安定する前。神代において神が行ったとされる超常現象——即ち、権能。

細い月と満天の星空を隠した、今にも豪雨を降らしそうな雨雲。

アーチャーは、剣を頭上に掲げるセイバーを見上げる。

目の前に広がるのは、光一つない曇天。

「なるほど、それがお前の剣か」

その声からは、いつもの余裕が感じられなかった。

「確かに、お前ほどの英雄ならば、それほどの宝具を持っていても可笑しくは無いのだろう。」

だがな、一言だけ言わせてもらおうぞセイバー——」

だが、それは——アーチャーが己の悟ったから、などという理由などでは断じてない！

「——他人ヒトのオンナに手エ出すんじやネエ!!」

——光が雨雲を貫く。

雨雲が一瞬で吹き飛び、剣使いは失墜する。

——アーチャー弓騎士は、彼自身が最も大切にしていたモノの為に、

腹が煮え立っていたのだ。

東の中庭。

墜落したセイバーは、未だ立ち上がれずにいる。

アーチャーは僅かに湾曲した剣を呼び出し、セイバーに飛び掛かる。

セイバーの体を風が包み、迎撃しようとする。

——セイバーとアーチャーの直線上に、一本の矢が突き刺さる。

反射的に、2騎の英^{サーヴァント}霊は矢が飛んできた方向を見る。

——東の塀の上に、細い月を背負う二つの影があった。

「——フッ」

何時の間にか体制を立て直したセイバーが暴風の斬撃を飛ばす。

「ハアッ！」

二人の片割れ、軽鎧に身を包んだ騎士が短槍に魔力を帯びさせて打ち払う。

恐らく、こちらの騎士がサーヴァント。

そして——

「——初めましてセイバー。そして、さっきぶりですねアーチャー」

——もう一人。

先ほど矢を射かけて来たであろう、紅いロングコートの青年は2騎の英^{サーヴァント}霊に声を掛ける。

「——ライダーとそのマスターか。何の用だ」

アーチャーが口を切る。

戦いに水を差されたことに対する苛立ちと戸惑いが僅かに見られた。

戦闘中に手を出すことはお互い様ではあるが、やられると苛立つことは当たり前である。

しかし、なぜ戦闘を中止させたのか。

先ほどの射は何を目的として放たれたのか？
その事が分からなかった。

「ライダーのマスター、か」

ライダーのマスターと呼ばれた青年は独り言ちる。

一瞬だけ何かを考えるような素振りを見せた。

その時、ライダーは何となく嫌な予感がした。

「——我が名は遠坂晶。」

冬木で行われていた聖杯戦争の元御三家の一人として、また時計塔から派遣された魔術師である。

此度の聖杯戦争ではライダーを召喚した。

今回の聖杯戦争の運営について重大な嫌疑があるため戦闘を一時中断させてもらった。

正直すまないとは思っている。

しかしながら、此処でどちらかが脱落した場合、解決すべき事案が解決が不可能になる可能性が十分あり得るため理解してもらいたい。

出来ることならば、この件についてマスターと早急に話がしたい。

セイバーのマスターとアーチャーのマスターよ、戦闘行為を中断し話し合いに応じてはくれないか」

ライダーのマスターは、遠坂晶は宣言する。

今後の展開について思いを巡らせる2騎のサーヴァント。

ライダーは自分の想像が当たったことに頭の痛さと……………この先の展開が読めない事に対する、ほんの少しの期待があった。

そして——

セイバーからの念話を受け取った少年は東の中庭に駆け付ける。

屋敷中に結界を張っているの、既に状況は知っていた。

荒れた中庭。

この光景が、一本の矢によつてもたらされたとは信じられないものがあった。

そして、視線をずらす。

塀の上に立つ、二人の影。

少年にとって、その二人は印象深かった。

——槍を構える青い騎士。

——弓を構える紅い青年。

左手に持った十字の刃を持つ短槍で2騎を牽制し、右手でマスターを庇う。

半歩だけ下がり、周囲を警戒。適切な支援が出来るように戦局を俯瞰する。

マスターとして与えられた、サーヴァントのステータスを見る力を行使。

ライダーのステータスはCランクの筋力以外は全てBランク以上であり、安定して高め。

魔術師^{マスター}の力量は不明。

だが、英霊^{サーヴァント}同士の戦闘に介入できる程の戦闘力を保有していると推測できる。

そして——何よりも、互いに強い信頼関係を築いていることがはつきりと分かる。

——この二人ならば、どのような敵が相手だとしても負けないだろう。

そう思った。

「——来たか、少年」

セイバーの呼びかけで、我に返る。

向き直り、頷く。

深呼吸。

改めて塀の上を向きなおす。

「——初めましてライダーのマスター。

僕の屋敷にようこそいらっしゃいました。

先ほど話していた件について、お話を聞かせてはいただけませんか？」

塀の上に立つ紅い青年は、ライダーに何かを囁き――

「よっと」

――跳んだ。跳んで来た。

因みに塀の高さは5メートル、此処までの直線距離は約70メートルである。

何らかの魔術を用いているのか、足音一つさせない着地。

直後、微かに鎧の音をさせて、ライダーが着地。

そして、何時の間にか側にいるセイバー。

目の前に立つ青年を見上げる。

ダークスーツの上に黒いベルトを巻き、左腰に柄頭に青い宝玉が嵌め込まれた西洋剣を佩いている。その上に紅いロングコートを羽織る。

ロングコートが超高位の魔術礼装であるだけではなく、全身に幾つもの礼装を装備。それに加えて、全身に幾重もの結界を張っていることが分かる。

「初めまして、俺は遠坂晶。ライダーのマスターだ」

「よろしく」と言っ、此方に手を差し出し――途中で止める。

それに戸惑っていると――

「その前に、名前を聞いてもいいかな――」

――セイバーのマスター。

遠坂晶と名乗ったライダーのマスターの告げた最後の一言に、心が反応する。

セイバーのマスター。

覚悟は既に決まっている。

ならば、目の前にいる格上の魔術師に気後れする必要は無い。

息を吸い込む。

見上げ、目を合わせる。

「僕は希^{のぞむ}――

――僕の名前は華楼希^{かろうのぞむ}です」

名乗る。

「今回の聖杯戦争ではセイバーを召喚しました」

宣言する。

「ライダーのマスター、遠坂晶。

貴方の話す内容にもよりますが——」

こちらから、手を延ばす。

「——ひとまずは、聖杯戦争に参加するマスター同士として、よろしく願います」

出来るだけ挑発的に見えるであろう笑みを浮かべて言い切る。のどの渇きと鼓動の音が緊張を伝えて来る。

——落ち着け。

すぐ近くにある碧の目が告げる。

伸ばした手に、自分以外の体温が届く。

こちらを落ち着かせるような笑みは——こちらが確認した直後、好戦的な、不敵な笑みに変わる。

「——こちらこそよろしく、華楼希」

強く握られる手。

一息。

握られた手を——こちらも強く握り返す。

——何時の日になるかは分からないが、この魔術師の男と戦うことになる。

理由は分からないが、そんな当たり前のことを強く感じさせた。

こうして、聖杯戦争は幕を開ける。

僕は当事者の一人として、否応なく巻き込まれていく。

——それが、あらかじめ決められていた事とは知る由もなく。

間章 裏報告書 その1

マテリアル ——— ライダー編 ———

騎乗兵^{ライダー}

———— ステータス ———

クラス：ライダー

マスター：遠坂晶

真名：メローラ

属性：中立・善

性別：女性

【ステータス】

筋力：C 魔力：A

耐久：B 幸運：A

敏捷：B 宝具：B+

【クラススキル】

・ 対魔力：A

Aランク以下の魔術を無効化する。

現代の魔術師が、魔術でダメージを与えるのは非常に困難。

宝具の『指輪』によってランクが大きく向上しており、通常はCランクである。

・ 騎乗：A+

騎乗の才能。

幻獣・神獣の類でも乗りこなすことができる。

ただし、竜種は該当しない。

【保有スキル】

・ 直感：B

戦闘時、常に自分にとって最適な展開を“感じ取る”能力。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減する。

・ 魔力放出：B+

武器や肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出させることによって、それらの能力を飛躍的に向上させる。

言ってしまうえば、魔力によるジェット噴射。メローラの場合、防御や移動にも魔力を働かせている為、あらゆる面で高い性能を発揮する。

・ 単独行動：A

マスター不在でも行動できる。

ただし、宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要。

【宝具】

・ ドレス・アー・マメント
男装の青騎士

ランク：D 種別：対人（自身） 宝具

レンジ：0 最大補足：一人

彼女が男装して旅をしたことに由来し、青い服装をしていると任意で発動する。

ステータス隠蔽効果があり、宝具の大部分と保有スキルを隠蔽する。真名が判明すると解除される。

また、発動中は不特定多数の相手に男性的な印象を抱かせることで、外見から本来の性別を知ることが困難にする。ただし、こちらの効果は比較的に見破られやすい。

・ ブライマリー・カラス・オン・ジャニー
追いかめし解呪の秘宝

ランク：C++ 種別：対人宝具

レンジ：1 最大補足：1人

彼女が冒険の過程で手に入れた、恋人のオルランドに掛けられた呪いを解くために必要な3種類の秘宝。

それぞれは独立した常時発動型宝具、として装備できる。

ザ・ホーリーランス 破岩の聖槍

聖性を帯びた十字槍。

ランクA相当までのスキル、又は魔術によって作られたものが剛体ならば、その穂先で触れた瞬間に砕くことができる。ただし、宝具によって作られたもの及び宝具そのものは除く。

また、聖性を帯びているために、十字教において邪悪とされる物に対する浄化や追加ダメージなどの効果がある。

———
リング・カーバンクル
石榴の指輪
———
磨きあげられたガーネットの指輪。

保有しているだけで、対魔力に大幅な補正が働く。

また、魔力を込めることでEXランクの対魔力を發揮する深紅の光の結界を展開できる。

?????????
?????

虹泡吐く太陽の輝馬

ランク：B+ 種別：対軍宝具

レンジ：2〜50 最大補足：50人

太陽神の末裔と言われる名馬。空を駆け、眩い光を放ち、虹色の泡を吐く事が出来る。

メローラの魔力放出を利用して、更に高速で空を駆けることも可能。

彼(?)が放つ光には目くらましの効果が、虹色の泡には纏わりついた相手の敏捷のステータスを一時的に下げる効果がある。

ランク：EX 種別：??宝具

レンジ：?? 最大補足：?人

???????????

出典：アーサー王伝説・騎士物語『メローラとオルランド』

外見：金砂の髪に碧眼と完全にアルトリア顔。

ただし、女性的に色々と成長した体型であり乳上状態。

武装：戦闘着は師子王とアーサーを合わせたような物を青率が大きく目にした感じ。

短槍(宝具)、騎乗直剣(左腰)、馬上槍と円盾(主に騎乗時)

身長：170cm / 体重：58kg

スリーサイズ：B91 / W54 / H85

- ・ イメージカラー：青
- ・ 一人称：私
- ・ 二人称：貴方
- ・ 三人称：彼／彼女
- ・ 特技：整理整頓・旅支度、自分磨き
- ・ 好きなもの：青空、親しい人の側にいる時間
- ・ 苦手なもの：旅先の雨、観光目的での一人旅
- ・ 天敵：しつこい人、胡散臭い人

アーサー王伝説に登場する女騎士であり、アーサー・ペンドラゴンの娘。

優れた容姿と知恵を持ち、騎士としても並外れた実力を誇ったという。

竜の因子をアーサー王から受け継いでおり、膨大な魔力を保有する。

魅力に溢れた姫君であり武にも通じている——そして何よりも、かの騎士王の娘。

そんな彼女の下に、多くの婚約者が現れる。

多くの競争相手がいるので必死になる婚約者たち。

そんな光景は、恋や結婚という物に淡い期待を抱いていた少女を落胆、幻滅させるには十分だった。

その結果メローラは、自分に群がる婚約者たちは『騎士王の娘としての自分』を求めているのだと結論付けた。

そんなある日、メローラはキャメロットを訪問したテツサリア王トロアスの息子オルランドと出会う。

結論のみを言うと、メローラはオルランドと恋に落ちる。

詳しい理由は分からない。

しつこい婚約者たちに嫌気がさしたからなのか——。

それとも、単純にオルランドが琴線に触れる人物だったのか——

もしかしたら………

いや、不必要な詮索は必要ないだろう。それこそ無粋というもの。そして何よりも——恋に、初恋というモノに理由が必要なのだろうか？

恋に落ちたメローラ。

彼女が過ごすのは、今までとは打って変わった日々。

オルランドと過ごす時間は何事にも変えがたく、そうでない時間も彼の事を思うだけで幸せな気持ちになれた。

そして、オルランドも同じ気持ちであったであろう。

だが、メローラに群がっていた婚約者たちにとっては、当然ながら面白くない事である。

ここで婚約者の一人、スペインの王子マドール卿という人物が登場する。

彼は、オルランドがメローラの心を射止めた事に嫉妬。マーリンに對して、自らの領地の半分を差し出す代わりにメローラに呪いを掛け、監禁するように依頼した。

オルランドが囚われている呪文の力によって守られている洞窟。

——呪文の力が込められた岩を破壊するための『聖なる槍』。

洞窟の中は、侵入者を拒むような様々な魔術で占められている。

——あらゆる魔術の闇を払う『美しきカーバンクルの指輪』。

オルランドは、半永久的に仮死状態にする呪いに侵されている。

『?????』

——^{?????}ルランドを救い出すためには以上の三種類の秘宝が必要。

その事を知ったメローラは、秘宝を求めて旅に出ることを決意する。

旅に出る前に餞別として、特殊な鎧と旅用の衣類——そして、一騎の名馬を手に入れる。

鎧と衣類には幻惑の魔術が掛けられており、着用した者が反対の性別である、という印象を周りの人に持たせることが出来る。

馬の号はスプマドール。騎士王アーサー・ペンドラゴンから借り受けた、太陽神の遠い血筋に当たると言われる幻想種である。

紆余曲折を経て三種類の秘宝を集める旅路を終えたメローラは帰国し、オルランドを救い出した。

二人はアーサー王を始めとした多くの人からの祝福を受け結婚し、テッサリアに行き幸福に暮らしたと言われている。

騎乗兵のマスター

遠坂晶 / Akira Elliot Hosaka

- ・ 誕生日：9月22日 / 血液型：O型
- ・ 性別：男性 / 年齢：19歳
- ・ 身長：183cm / 体重：72kg
- ・ 身分：学生（留学生）・魔術師
- ・ イメージカラー：赤

属性：空・（剣） / 起源：解析・構築

魔術系統：宝石魔術 / 投影魔術

魔術回路：メイン4本・サブ34本×2 / 起源の現出により変調・非常に頑丈

魔術刻印：■■■■（固有結界に由来する特異な投影魔術 / 属性に『剣』を追加）

遠坂（株分け）。宝石魔術 / 第二魔法の一端の断片 / ガンドなど）

魔術礼装：二段階型？落ち宝石剣、ロングコート、工した火器・弾丸、
眼鏡、特殊加

- ・ 一人称：俺・??条件下で）僕
- ・ 二人称：君・お前・貴方
- ・ 三人称：彼 / 彼女・アイツ
- ・ 特技：電化製品の（違法）改造、家事全般
- ・ 好きなもの：鍛冶、乗馬、散歩・旅行、博物館・古本屋巡り
- ・ 苦手なもの：誰かからの強制、（魔術師の）説得
- ・ 天敵：ある程度以上年上の女性

■■■■の後継者。

■■■■と遠坂■■の長男。

時計塔の魔術師で階位は祭位^{フェス}。現代魔術学科に所属しているが、他学科にも比較的顔が利く。

第九次聖杯ではライダーを召喚した。因みに、プロト風に言うならば、マスター階梯：第四位である。

魔術師としては一流、執行者としては超一流、戦士としては——
現代の英雄候補であり、単にサーヴァントに魔力を供給する電池としての役割だけでも最上級（第九次聖杯戦争のマスターは異常）だが、マスターという評価では最高位の聖杯戦争特化型の戦闘魔術師である。

特異の投影魔術^{ゴッズホルダー}によって疑似的な伝承保菌者であるが、聖杯戦争を駆け抜けることで

????????

マテリアル ——— アーチャー編 ———

アーチャー
弓騎士

————— ステータス ———

クラス：アーチャー

マスター：メセネト（メスケネト・プロビデント・アंक・ハロエリス）

真名：?????

属性：中立・善

性別：男性

【ステータス】

筋力：A 魔力：B

耐久：C 幸運：C

敏捷：A 宝具：B++

【クラススキル】

・ 対魔力：B

魔術発動における詠唱が三小節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法をもつてしても、傷つけるのは難しい。

・ 単独行動：A

マスター不在でも行動できる。

ただし、宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要。

【保有スキル】

：EX

に由来。幸運と対魔力に強い補正を与える。

いる間は、魔力消費無しで行動することが出来る。

：A

生前、盲目になったアーチャーが太陽神に目を治してもらったことに由来。

『千里眼』に近いスキルだが、透視は不可能で物理的・魔術的に遮断

されると見ることは出来なくなる。その代わりに夜目が非常に良く効き、強い光などの視覚に対する妨害に対して強い耐性を持つ。

・心眼（偽）：B+

直感・第六感による危険回避。虫の知らせとも言われる、天性の才能による危険予知。

聴覚に対する妨害を半減。視覚に対する妨害は『?????』スキルとの併用により大部分を無効化、無効化できなくとも半減する。

・神性：B

神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とされる。

・一チャーはの息子である。

神であることから、水上を自在に移動できる。同時に神でもあるため、火山活動や山火事などの炎にまつわるものを除いた自然災害に強い耐性を持つ。

【宝具】

・ ?????? ランク：B 種別：?? 宝具

・ ?????? レンジ：?? 最大補足：?人

・ ?????? ?????? ランク：EX 種別：?? 宝具
???????? レンジ：? 最大補足：?人

出典：ギリシャ神話(?)

外見：色素の薄い肌、白金の髪と凧いだ海を思わせる碧眼。思わず殴りたくなるような感じの美丈夫。

逸話では巨人と言われるほどの大男（3mオーバー）だが、真名バレを防ぐため若干調整して現界した……らしい。ついでに、獣（とか）を仕留めるための棍棒と狩った獣の解体とかに使う小刀（戦闘がメインのため、作中では剣と表記）のサイズは自由に変更できるよ

うになった。

服装は、普段イメージするようなギリシャ人の一枚の布で出来るアレ。その上に皮と毛皮で作った防具。因みにサンダル。ライオンの毛皮で作った皮鎧は真名バレ対策で余り実体化させない。

武装：皮鎧、ライオンの皮で作った皮盾

大弓、剣と棍棒（サイズ変更可能）

身長：197cm / 体重：98kg

イメージカラー：茶色

一人称：俺

二人称：（基本的に呼び捨て。稀に）君・貴方・貴様（など）

三人称：アイツ

特技：射止めること（何を、とは言わない）

好きなもの：雄大な自然、美しい女性

苦手なもの：嫉妬する人、妨害する男

天敵：恋人の親族、サソ……SASORI

ギリシャ神話最高の狩人。ギリシャ中の動物全てを狩りつくしてしまおうのではないか、と危惧されるほどの名手だった。

でもあり、世界中のほぼ全ての場所で（アキレウスやヘラクレスを越える）最大級の知名度を誇る。

の息子として産まれた。そのため、海や川などの水の上を陸地と同様に歩くことが出来る。

半神である彼は巨人と見紛うほどの長身で、逞しい肉体と稀に見る程の美貌を持つ青年に成長した。

父親（たち）と同様に好色だった。は多くの女性とのエピソードがあり、ここでは4人（2人と2柱）との関係について言及する。

一人目の妻。

ボーイオーティアで暮らしていた。はシーデーという非常に美しい女性と結婚した。

しかし、シーデーは非常に高慢な性格で、私はヘラより美しい（意

訳)、と言ったためへラに冥界タルタロスに落とされた。

キオス島にて。

妻を失った^{?????}は放浪の旅に出る。キオス島にたどり着いた^{?????}は、その島の王オイノピオーンの娘メロペーに一目惚れする。^{?????}

しかしながら、メロペーもオイノピオンも^{?????}を好ましく思わなかった。その結果、王は^{?????}の死を望み、島中を荒らし回っているライオンを対峙する、という^{?????}到底成し遂げられない事を結婚の条件にした。しかしながら、^{?????}はライオンを容易く撲殺。皮を王への贈り物とした。

思惑の外れたオイノピオンは結婚の約束を誤魔化し続けた。その事に怒った^{?????}は、酒に酔った勢いでメロペーを力づくで犯した。

その事に激怒したオイノピオンは父親である酒の神デイオニューソスに頼み込み、^{?????}を泥酔させ、その隙に両目を潰して海岸に捨てた。

目の治療。

目を失った^{?????}は、東の果てで朝日を目に受ければ目が治る、という神託を受ける。^{?????}これに従い、遙か東にあるレームノス島に向かう。

目が見えない為、単眼の鍛冶巨人キククロープスの槌を打つ音と頼りにレームノス島にたどり着く。

レームノス島にたどり着いたオリオンは鍛冶神へパイストスの鍛冶場に侵入し、見習いの弟子を一人さらって肩に乗せ、オケアノスの果てまで案内させた。

^{?????}を見た^{あかつき}曙の女神エーオースが恋をし、兄である太陽神ヘリオスに願い、^{?????}の目を治させた。

再びキオス島にて。

目が治った^{?????}。彼は復讐のために再びキオス島を訪れる。

しかしながら、^{?????}オイノピオンはパイストスが彼の為に作った地下室に隠れており、オイノピオンを慕っていた島民は彼の居場所を決して話そうとはしなかった。

結局オイノピオンを見つけないことが出来ず、祖父ミノスの下に居るのではないか、と当たりを付け、海を渡ってクレタ島に向かうこと

にした。

曙あかつきの女神。

レムノース島で目を治してもらった時から、
スと付き合っていた。 あかつきは曙の女神エーオー

クレタ島にたどり着いたオリオンは、交際中にも関わらず、アトラ
スの娘プレヤデス七姉妹に恋し、追いかけてまわっていた。

対抗心を抱いたエーオー。

彼女の役割は夜明けを告げることだが、
仕事を早々に切り上げて あかつきに早く会いたいのために

しかしながら、夜明けの時間が短くなったことを不審に思ったアル
テミスが、エーオーの神殿がある世界の東の果てまで、様子を見に
やって来た。

———こうして、
あかつきは狩猟の女神と運命的な出会いをすることにな
る。

弓騎士のマスター

Messe^メnet^ネ (Messe^メskhene^ケnet^ネ || Providence^{プロ}vide^ビnt^ンe^ン ||
Ankh^ア || Haroeris^ハ)

- ・ 誕生日：3月27日 / 血液型：?型
 - ・ 性別：女性 / 年齢：?歳
 - ・ 身長：156 cm / 体重：47 kg
 - ・ スリーサイズ：B83 / W58 / H82
 - ・ 身分：エジプトからの旅行者・魔術師
 - ・ イメージカラー：銀
- 属性：火・風 / 起源：感応
- 魔術系統：錬金術、占星術 / 魔眼 (?)
- 魔術回路：非常に多い
- 魔術刻印：なし
- 魔術礼装：杖、短剣 (?)
- 一人称：私

- ・ 二人称：あなた
- ・ 三人称：あの人
- ・ 特技：高速思考、分割思考
- ・ 好きなもの：機能的な物、満天の夜空
- ・ 苦手なもの：運の要素が多分に介入する物
- ・ 天敵：自分以上の強さを持つ理不尽な人

——アトラス院が作り上げた生物兵器（?）。

アトラス院に所属する、褐色肌の魔術師。

現時点で出生は不明。

遠坂晶が時計塔から入手した資料には^{ゴッズホルダー}伝承保菌者ではないかという一文があつたが、真偽は不明である。

提出——時計塔現代魔術科（中略）某所にて

「——なんだこれは？」

「報告書ですよ。——裏の、ですけど」

——時計塔。

魔術協会三大学の最大勢力。

ロンドン郊外に位置し、四十を超える学生寮と百を超える学術棟、そこに住む人を潤す商業で構成されている。

そんな時計塔の、現代魔術科に属する複数の学術棟の何処か——

俺、遠坂晶が普段から世話になつている現代魔術科の君主——俺は教授と呼ぶことが多い——の私室にて。

個人的な感想だが、魔術師の私室は陰気な印象を受けることが多い。だが、この部屋は例外のような気がする。

……それが、心因的なモノが原因かどうかは分からないが。

「裏の、か。——確かに、これはそういう類のモノだな」

「前に送ったのは上層部向けの、必要なことしか書いてない表向きの物です」

「やれやれ……お前もめんどくさい物を提出してくれたものだ」

20分ほど掛けて全てのページをざっと読んでから、教授は重々しく口を開く。

「しかもこれ、途中だろ」

「その5まであります」

「……………ファック」

因みに、提出した裏報告書は一冊が100ページを軽く超える。なお、時計塔上層部に提出した報告書は20ページ程度である。

残りの4冊を机の上に置く——静かに置いたが、机が僅かに軋む音

がした。

教授は苦虫を噛み潰したような渋い顔をした。

机の上に鎮座している分厚い紙の束の向こう側。

教授は初めに渡した裏報告書(その1)をじっくりと読み直している。

「——読んでいる最中ですが教授。いくつか知りたいことがあるのですが——」

「杉羽良で行われた亜種聖杯戦争についてだろう」

めんどくさげな声が質問を——質問の前口上を中断させる。

目で文字列を追いながら。初めから想定していたとでも言いたげな雰囲気。

「私に聞かなくても知っている——いや、識っているだろうに——」

はあ、と小さくため息をつき、途中のニュアンスを変えながら、何処か気だるげに——

——再現する。

「——日本で聖杯戦争が勃発した」
頭痛と共に、視界が白く染まる。

『日本で聖杯戦争が勃発した』

突然呼び出され、急いで駆け付けた俺たちに突き付けられた一言。

「——え」

『それは本当ですか?』

『残念ながら、な』

その一言が意味する事。

あつさりと肯定された事柄は余りにも重い。

『但し、召喚されるサーヴァントは5騎。スキルや宝具に欠損は無いが、その規模は若干小さ目と言える。亜種聖杯戦争、とでも言うべきだろうな』

俺は、余りの事に唾然としている■■を気遣いながら——

——フラッシュバック。

強引に呼び起こされた記憶の残滓は未だ濃い。

「——『召喚されるサーヴァントが5騎しかいないのは、間桐と遠坂が参加していないからだ』」

『なるほどな、確かにそう仮定すれば辻褄が合う』」

——なんだ、覚えてるではないか。

教授は僅かな間こちらに視線を向け、無言でそう告げる。

「だからって、こんな手を使わなくてもいいじゃないですか」

「八つ当たりだ。こんな量の報告書を急に出された身にもなれ、愚痴ぐらい言いたくなる」

「非道い愚痴ですね」

「全くだな。——ところで、これを見たまえ。酷い量だろう」

「全くですね。こんな量の報告書を提出する人は、よっぽど捻くれた人でしょうね」

「全くだな。私もそう思う」

「ですよ。ぶっちゃけると、半ば嫌がらせに等しいですよ」

空々しい笑い声が虚しく響く。——生々しい打撃音がそれに続く。

「——お前は相変わらず懲りないな」

「普段は自重してますよ。ここ以外では猫被ってるんで」

「ここでも自重しろ」

閑話休題。

……体中が痛い。

「——さて。お前は杉羽良で行われた亜種聖杯戦争について、ある程度の事は識しっているのだろう。

つまりお前は、ある程度以上の事を知りたい、ということでもいいのか?」

「その通りです。」

俺は——僕は、召喚されたサーヴァントの大まかな情報と顛末しか知りませんから」

「大まかな情報、か」

目が合う。

その眼光は、知っていることを言え、と無言で促していた。

「俺が知っているのは——」

遡ること22年——。

2008年に杉羽良で亜種聖杯戦争が行われた。

この聖杯戦争に参加したのは5組の主従。

——水晶のように透き通った大剣を持つ剣騎士^{セイバー}。

——宝具として義手の右手を持つ白銀の槍騎士^{ランサー}。

——最強の英雄から譲り受けた弓を持つ弓騎士^{アーチャー}。

——輝く戦車に乗り、弓や槍などの多くの武器を持つ騎乗兵^{ライダー}。

——無数のスフィックスを呼び出して放置した、謎の狂戦士^{バーサーカー}。

——以上の5騎が確認されており、狂戦士を召喚した魔術師^{マスター}——

野時夜栖^{のまきよめす}が勝利。

その亜種聖杯戦争で、杉羽良の管理^{セカンドマスター}人と務めていた魔術師の一族

——華楼の当主、華楼英作が死亡。

その影響で後始末が滞った結果、華楼一族はセカンドマスターを解任。彼らの代わりに後始末の大半を行った野時夜栖が杉羽良のセカ

ンドマスターの任に着いた。

——大体これくらいですな」

「そうか。——正直、それだけ知っていれば十分なんだが……」

お前は、それ以上を知りたいのか」

「そうです。」

何としても知らなくてはならない——そんな、強迫観念じみた意思があるんです」

そうか、という微かな眩きが耳に届く。

疲れ果てたような、何かをあきらめたような、そんな顔をしていた。「教えないと言ったらどうする」

「そうですね……。」

時計塔でサバゲーでもしましょうか。イイワケは教授の許可を取った、で」

ふ、と小さく、かつ軽やかな——まるで、お前なら何が何でも聞き出すのだろうか？とでも言いたげなため息が聞こえた。

……その軽やかな溜め息とは対極的な、胃痛を感じていそうな眉のひそみ具合と頬の微かな引きつりが教授の心情をよく表していた。

今度、良く効く胃薬でも作つく成くして渡わたそうと思った。

「——それ以上、か」

裏報告書を読みながら、そう呟いた。

その表情は紙の束に遮られて見えない。

「さて、何から話したものが」

声音から感じられるのは——寂寥、だろうか？

何となくだが、報告書の向こうを見ようと思っではいけない気がした。

初めに言うと、杉羽良での戦いの情報はほとんどない。

ライダーを召喚した華楼英作と優勝者の野蒔夜栖以外のマスターは亜種聖杯戦争以前の経歴が不明。しかも、野蒔夜栖以外のマスターは全員死亡または行方不明。

あの戦いの詳しい顛末を知っている者が居るのだとしたら、第九次聖杯戦争の監督役も務めた美作修摩だけだろう。

優勝者である野蒔夜栖について分かっていることは余りない。

コイツは戦いが勃発する数年前から、杉羽良に住んでいた魔術師——だが、その数年前以前の情報が無い。

野蒔という名字の魔術師は彼以外に存在しない。……時計塔の情報では、な。

しかしながら、時計塔に提出した特許申請などから、ある程度の魔術の腕を持つているであろうことが分かる。

名門の魔術師の隠し子だったとか、魔術刻印の株分けを受けた魔術師だったとか——そこから推測できることはほとんどないがな。

野時夜栖とアインツベルンの間に何かしらの関係があるのでは、という疑いもあったが真偽は定かではない。

アイツの召喚した狂戦士バーサーカーの真名も分かっていないしな。

まあ、アステカで行われた第八次聖杯戦争において、大量のジャガーを呼び出した2騎目の復讐者アヴェンジャーの例があるから、ある程度の推測は出来る。

話が逸れるが、このアヴェンジャーの真名はテスカトリポカ——正確には、テスカトリポカへの生贄に選ばれた青年、だがな。

これは完全に余談だが、1騎目のアヴェンジャーは菅原道真。日本で召喚され、梅の花と大宰府に由来する固有結界とアヴェンジャーというクラス故に雷神としての力を持つ超一線級のサーヴァントだったらしい。

さて、話を戻すと、杉羽良での亜種聖杯戦争のバーサーカーの正体は何らかの要因でファラオと同一視された無名の人物だった——なんてな。まあ、推測の域を出ないがな。

……………ふむ、なるほど……正体不明のミイラが触媒、か。確かに、時計塔でもエジプトから不法に盗掘されたミイラや副葬品を大量に回収している。ミイラならファラオだろう、という意見は暴論だが筋は通っている。野時夜栖がファラオではない適当なミイラを触媒にした、というお前の推測は的外れではないだろう——とか、それが正解な気さえする。

同様に、アインツベルンに関しての情報もほとんどない。

そもそも、大聖杯が何時設置されたか、という情報さえないからな。だが、アインツベルンが関与したことだけは確かだ。

亜種であろうが聖杯戦争を行うには相応の準備が必要だ。

具体的には、小聖杯を作るための錬金術、令呪を作成するための支

配の魔術、そして霊脈をもった土地。

以上の三つ——そして、それらを準備するための膨大な時間——は聖杯戦争の情報が公開された今でも必要とされている。

聖杯戦争の情報が公開されたのは、ルーマニアで行われた合計23騎のサーヴァントが参戦した聖杯大戦とも呼ばれる第六次聖杯戦争の後のことで、杉羽良での戦いは大戦の前に行われている。

お前の父親の推測通りだが、アインツベルンは遠坂と間桐の協力なしに聖杯戦争を行おうとした、というのが正解だろう。

あのアインツベルンが、十分な準備が出来たにも関わらずに、大聖杯を使っているのに5騎しかサーヴァントを呼べないのはあり得ないからな。

「——なるほどな」

教授が報告書を閉じる。

やっと読み終わった。そんな、溜め息と共に吐き出した一言は疲労を隠せていなかった。

「——ライダー騎乗兵、アサシン暗殺者、バースカー狂戦士、アーチャー弓騎士、ランサー槍騎士、キャスター魔術師——そして、セイバー剣騎士。」

2030年12月1日———此処に7騎のサーヴァントが召喚され、第九次聖杯戦争は幕を開けた。

お前は——遠坂晶語り部は、セイバーとアーチャーの戦闘を中止させ、2騎とそのマスターに協力を求めた。

その目的は未だ見えず、その結果を知る者もない」

こういう流れか。鋭い目線が此方に刺さる。

その気迫は此方を気後れさせるには十分以上のものがある。

「その通りです教授。」

俺——そう、俺はライダーだけではこの状況を打開できないと判断しました」

「いや、別に責めているわけではない。」

幾ら第九次聖杯戦争のバーサーカーが芸達者とはいえ、バーサーカーは斥候に向いたクラスではない。

イレギュラーが発生したら警戒する。そして、その裏——例えば、バーサーカーが他のサーヴァントと同盟を組んでいる、などの可能性——を想定した……。お前の——お前たちの判断は妥当だろう。バーサーカーがアインツベルンの召喚したサーヴァントと通じていたら面倒だからな

「まあ、そうですね」

「もしかしてお前……何となくで戦闘を止めたりしたのか……………」

「いえ……ちゃんと考えましたよ——本能と直感で」

「全く、お前らは……………」

「——で、あと4冊あるわけか」

「そう、ですね……………」

「まあ、お前と私は構わんがね——」

「——その二人は良いのか？」

「あらかじめ了承は取ってます。二人とも楽な体勢ですし、そもそも寝てますし。」

ぶつちやけ、俺が立ちっぱなしなんですけど……………」

「知らんわ」

二章 当たり前の非日常で | s t a i n e d

g l a s s |

1 騎目 0 追憶 | 足音

——君に会ってもらいたい人がいるんだ。

第四次聖杯戦争が終わってから2週間ほど過ぎたある日。

昔から交流のあった魔術師の青年——その頃の私はおじさん、と呼んでいた——から、そんなことを言われた。

第四次聖杯戦争で、私の父親は死んだ。

遠坂家の——魔術師の一族の当主として、聖杯戦争で死亡した際の備えはしてあった。

私が最期に言われたことは、魔術師としての言葉。
つまりそういうこと。

敬愛していた父は、私が魔術師として生きていくことを期待していた。

——ならば、私は魔術師として生きていこう。

私が尊敬し、憧れていた父親の死を自分の中で、自分なりに整理し、そんな風に決意した。

彼が遠坂の屋敷を訪ねたのは、そんな頃の事だった。

「——久しぶりだね、■ちゃん」

「そうですね■■おじさん」
思っていたより硬い声が出た。

三人掛けのソファーに座り、テーブルを挟んで向かい合う。

目の前にいるのは、今この場に居ない、妹だった女の子とよく遊んでくれた青年。

それ以外にも、母親の幼馴染——兼、今は亡き父親の(元)恋

敵……だったらしい。

そして、第四次聖杯戦争の参加者。

私は彼が——彼らがどの様な戦いを繰り広げたかを知らない。

知っているのは、精々が結果——聖杯戦争の余波による大災害ぐらい。

私は其処に至るまでの顛末を知らない。

そう、全く知らないのだ——。

「おじさんが——いや、俺が会いに来たのは、君に会ってもらいたい人がいるからなんだ」

私の振舞いが、どこことなくよそよそしい事の原因を既に察しているであろう、目の前の青年はほんの少し所作を直してから切り出した。

「私に、ですか？」

「そう、セカンドマスター■ちゃんに——遠坂家の次期当主にして、冬木の次期管理人の魔術師である遠坂■。

——君に会ってもらいたい人がいるんだ」

——どうかね？

——もう少ししたら起きると思うわ。

——ふむ。君は寝起きが悪いからな。

——悪かったわね。

——いや、別に悪い物ではなかったぞ。

——その余裕たっぷりな顔、むかつくわ。

聖杯戦争に参加して生き残った元マスター。

事情が有って、そのまま冬木市に住むことにした魔術師。

「——そうなんですか」

「そうなんだ、彼から仲介を頼まれてね」

霊地を管理し、其処に定住したい魔術師がいるのならば監視し、問題があるのならば正しく『対処』する。

其れは、冬木のセカンドマスターの役割——魔術師としての、

遠坂の後継者としての果たさなくてはならない役割——義務。

我ながら単純だと思うが、先ほどまでの遠慮がちな態度は彼方に消え、私の心は使命感に支配されていた。

「それでっ、その人ってどんな人なんですか!？」

「こら、■、少し落ち着きなさい」

「あ……ごめんなさい。お母様」

「ありがとうございます」

暖かで、柔らかい。そんな紅茶の香りが広がる。

母からの”お叱り”とホッとする紅茶の香りが心を落ち着ける。

三人分の紅茶とお茶請けのクッキーを持ってきた母は、そのまま私の左隣に座る。

化粧を使つて、顔色を誤魔化している事が何となく分かった。

父が死んだことで、母が精神的に参ってしまったことは知っていた。

私に余計な心配を掛けないように気丈に振る舞っている事を、子供心ながら何となく悟っていた。

だからこそ、私は早めに立ち直らなくてはならないと思った。

そして、今だから分かる事だが、私が早めに立ち直ろうとしている事を知っていた母は、私に『決断』をさせてしまった事で、さらに自分を責めていた。

間桐 ■——。

それが、目の前にいる青年の名前。

私が父以外で初めて親身に接した男性にして、私が二人目に知り合った魔術師。

だから、父が死んだ後に会えて話が出来た事はすごく嬉しかった。

そして——多分だが、母も同じだったと思う。

「——さて、どんな人か、だったね」

「あ……。ごめんなさい。」

それは、私が聞いてもいい話なのかしら?」

「出来たら■さんにも聞いて欲しいかな」

「なら、私も此処で聞かせてもらおうわ」

「分かった。それじゃあ——」

会って欲しい人の名前は■
30歳ぐらいの魔術師の——
いや、魔術使いの男性だ。

目的は、冬木市に定住したいから。基本的に、魔術師が定住するには、その土地の管理セカンドマスター人に一度会っておく必要がある。

この街に住む予定なのは、私に会いたいらしい人と彼の協力者二人。それと、彼らが引き取った男の子。そして、奪い返す予定の女の子が一人、だ。

俺も詳しい事は知らないけど——。

引き取った少年は、彼ら三人が先日の大災害で助けたらしい。その子は家族を失っていたらしいから、引き取ることにしたらしい。

女の子の方は……そうだね。悪い人たちに人質にされているから、俺も協力して、助けに行くことになっているんだ。

………大体こんな感じかな？

いや、一つだけあったね——。

何よりも先に言うべきことだったけど。

そう前置きしてから。

「彼が、第四次聖杯戦争の実質的な勝利者だ」

一言一言区切るように発せられた事実。

その内容は私の——私たちに重く響いた。

「遠坂■
■を殺したのは彼ではない。でも、戦うことになったら勝ち目はないだろう。」

魔術師として戦う限り、彼に勝つことはほぼ不可能だろう。

故に『魔術師殺し』——それが彼の代名詞忌み名だ」
父を殺したのは彼ではない。

その一言で、私の心に湧き上がって来た、黒く重い感情は矛先を失って、ある程度は弱まった。

そして、彼の持つ二つ名を聞いて治まった。

「——魔術師、殺し……」

私に宿った仄暗い感情は、その単語の発する恐怖に霧散した。

『今』の私でも、空恐ろしくなる程のパワーワード。

『その頃』の私なら……まあ、推して知るべき、だろう。

簡潔に言うと、もの凄く恐ろしかった。

何せ、魔術師として生きていこう、と自分なりの一大決心をしたばかりなのだ。

それ以前に、聖杯戦争の勝利者ということは、私たち——遠坂の間よりも聖杯に詳しいのではないのか？

直接の関係はないが、聖杯戦争の勝利者という一言で思い出した。目の前の青年は聖杯戦争に参加して生き残った魔術師——言い換えれば、『魔術師殺し』と呼ばれる男と戦って生還したのではないのだろうか？

その前に、『彼ら』がこの街に住む理由は何なのだろうか？別に他の街でも構わないだろう。むしろ、聖杯戦争に参加した事が周りにバレているのだつたら、この街に定住することはデメリットにしかかからない筈。自分が狙われる立場にあることを理解していない筈がない。どうしたらいいのだろうか。

ナニをどう考えたらいいのか、それが全くわからない。

「落ちて着いて■ちゃん」

両肩に手のひらが置かれる。

その心強さに、瞬間、頭の中で絡まっていた考えがバラバラになった。

「大丈夫。おじさんも一緒に会うから」

「■おじさん……」

「それに——最強のガーディアンもいるからね」

それは——いや、彼は突然現れた。

「初めまして、レディ。

私は暗殺者のクラスで召喚されたサーヴァントです」

ダークスーツを身に纏った、濃紺の髪と双眸を持つ長身の青年。

——しかし、姿形は人間だが人間ではない。

転移の魔術などで現れたのではないと直感で分かった。

こんなに、存在感が強いヒトを私は知らない。

そう、彼は——彼らは——

「サー……ヴァン、ト」

サーヴァント
英霊——。

聖杯戦争に参加する魔術師が召喚。私たち魔術師はマスターとして、魔力提供と令呪によって彼らを使い魔として使役する。

彼らの正体は、信仰によって精霊の領域に押し上げられた英雄。その魂。

言うまでも無く、聖杯戦争において最も重要な要素^{ファクター}。聖杯戦争に参加する魔術師は英^{サーヴァント}霊を一騎召喚し魔術師となる必要がある。そして、聖杯戦争を生き残ったマスターとサーヴァントのみが聖杯を手にする権利を持つ。

つまり、だ——。

「——今回の聖杯戦争は失敗だった」

「——え？」

当時の私が————私たちが結論に達する前に、魔術師^{マスター}聖杯戦争を生き残った青年は切り出した。

「聖杯が完成する前に小聖杯が破壊された。結果、聖杯は制御を失い災害を撒き散らした。」

儀式の途中で小聖杯が破壊されたことで最悪の事態は避けられなかったが、それでもアレだけの被害を出した。出してしまった。

また、聖杯戦争の途中で小聖杯が破壊されたことで、何人かの英^{サーヴァント}霊が消滅することなく現界している」

口を挟ませない様な早口で、誰とも目を合わせないように下を向きながら。

事実だけを淡々と告げる。

「私たちが声を掛ける前に、自罰する男にその従サーヴァント者が声を掛ける。

「■■■■。貴方も分かっているだろうが、今回の件は貴方が責任を負うべきものではない。」

そして、貴方が納得できない事も分かっている。

ならば、後悔しながらでも良いから行動すべきだ」

「分かっているよ、アサシン」

三秒。

目の前で目を閉じ、軽く息を吸う。

此方を見る目は決意と意志に満ちていて――。

「さて、改めてだけど――」

――君に会ってもらいたい人がいるんだ。

その目は真摯で、真っ直ぐで、透き通るようで――。

†††††

微かに香る、紅茶の香りで目が覚める。

――懐かしい夢を見た。

低血圧故に、寝起きの気分は良くない事がほとんどなのだが、今日は極めて爽快に感じた。

「起きたか。気分はどうだ？」

「大丈夫そうよ」

目に入るのは二人のサーヴァント。

――紅茶を飲む女と給仕する男。

「相変わらず鏡を見ている気分だわ」

「……それこっちの台詞」

「やめたまえ。自分同士で争う事以上に虚しい事はないぞ」

「……貴方がいうと説得感が凄いわね」

「同感。いつそ哀れですらあるわ」

「ただいまー」

虚空から実体化し、足音を立てて登場する紅いコートの少年。三人目のサーヴァント。

「おかえり」「おかえりー」「帰ったか。単独行動とは感心しないな」「いやー……ごめんごめん。ちよつと伝えないといけない事があってね」

「俺は……僕は今日帰ってくる」

——息を飲む。

息子が。聖杯戦争に参加するマスターの一人が冬木に帰ってくる。

七騎のサーヴァントが参戦する正式な聖杯戦争において参加が確定している御三家のマスター。冬木に来ることは無いアインツベルン、間桐の令呪を移植した私。そして、遠坂の枠で参加するマスター。それはつまり——。

「そうか、つまり」

給仕をしていたサーヴァントが代表して問う。

「——そう、間もなく第九次聖杯戦争が始まる」

†

——何かの間違いがあつて鉢合わせしたりしたらマズいから、これから杉羽良にとんぼ返りするよ。まあ、今日は別れの挨拶も兼ねて。

じゃあまた、と言いついて残して窓から飛び去って行く。

「全く、妹と弟にあつたら問題がある——とはいえ、何も窓から出て行くことにはあるまいに」

そう言つて、男は窓を閉める。

飛び立った方向を名残惜し気に眺めていた。

「さて、起きぬけに驚いただろう。君の分の紅茶を入れようか？」
予め分かっていたとはいえ、寝起きの頭での急展開に落ち着きを欠いていた私に男はそう提案する。

ありがたいので、その提案を受けることにする。

「了解した。まあ、その前に、顔を洗っておくといい」

そう言っつて、何処から取り出したか判らない、温水の入ったプラスチック桶やタオルにコップ、歯ブラシなどを残して部屋を出て行く男。

部屋に残された私たち二人。

「さて、この後どうなるのかしらね」

なんて、無責任に聞こえるような事を言われる。

「なるようにしかならないわよ」

こちらは無責任な事を言い返す。

今回の聖杯戦争で、私はこの街から出るつもりはない。

それが、私がアイツを——暗殺者を召喚した時に決めた方針。

「まあ、そうね」

私の目線に気付いたのか、申し訳なさそうにするサーヴァント——
もう一人の私。

「本人には日常を守る責任がある。

対して、偽物には晶アキヲを守る義務がある。

だから——」

「分かっている」

贖罪のような言葉を遮る。

「そんな事は分かっているのよ」

こんなに無力感を感じたのは何時ぶりだろうか。

だからこそ——

「頼んだわ私——いえ、キャスター」

「そんな事いままらよ」

臍を噛む私に、一瞬戸惑った顔をしたが、こちらを安心させるような誇らしげな笑みを浮かべるキャスター。

「安心しなさい私——マスター。」

私たちにはセイバーやランサもいるし、晶^{アキラ}本人もアーチャーとして呼ばれている。宝石剣を宝具として持っている私と成金女がいるから魔力供給に不安はない」

正直、過剰戦力だから安心しろ、と言われる。

だが、それでも——

「それでも心配なのは分かるわ」

読まれていたか。

「なら、晶^{アキラ}を信頼しなさい」

——そうか。

それならば安心だ。

あの子なら、何があっても帰って来てくれるに違いない。

——まるで、あの時のように。

†

「熱いから気を付けろ」

そう言って紅茶が差し出される。

差し出された紅茶に、「ありがと」とお礼を言つて、口を付ける。

起きたばかりで本格的に動いていない、低血圧な私の頭に多幸感を伴って染み込むような、そんな飲みなれた味。

遠くから二人の足音が聞こえてくる。

——その足音は私に日常を伝えて来る足音なのか。

飲みなれた紅茶の香りを堪能しながらそんな事を考えた。冬の朝だった。

1 騎目 1 微調整 ————— 気付いた事、気付けなかった事

サーヴァント、騎乗兵^{ライダー}。

意味は文字通り騎乗^{Ride}する英霊^{Spirit}。

聖杯戦争に召喚される基本の七クラスの内、最大の機動力を持つクラス。

戦車や幻獣。果ては神殿などを宝具として保有している事が多く、卓越した騎乗スキルによってそれらを操る。

また、多くの宝具を保有している事が多く、筋力、耐久、敏捷ステータスが若干低めの代わりに様々な状況に対応することが出来る。

但し、宝具が多いという事は魔力消費が多くなる、という事を意味しているので単独行動のスキルなどの魔力消費を軽減するスキルを持っていない場合は注意が必要である。

真名 ————— メローラ。

かのアーサー王の娘。

恋人を救うための秘宝を集めるために、一人で世界中を旅をした男装の騎士。

その逸話から、多くの宝具を保有しながら、同時に単独行動のスキルをBランクの高さで保有しているサーヴァントである。

保有している宝具は4つ。

男装に用いた『衣装』と探し求めた三種類の『秘宝』、微かな神性を帯びた幻想種の『騎馬』 ————— そして、人々の幻想を受け止めた正体不明の『聖槍』。

『秘宝』は3種類の常時発動型の宝具を一纏めにしたものであり、それぞれが絶妙に噛み合い、ほとんどの搦手を対策、封殺している。

知名度の低さからか、近接戦闘に関わるステータスが若干低く、宝具のランクも評価規格外の『聖槍』以外は低めである。

しかしながら、魔力消費の激しさを保有している高い単独行動のスキルで補い、本人のステータスの低さをスキル直感、魔力放出で補っている。

また、幸運、魔力、宝具の直接戦闘に関わらないステータスは総じて高めであり、搦手や不意を付かれての敗北の危険性は極めて低いだろう。

強いて欠点を上げれば宝具による決戦力に欠けるぐらいだが、長期戦に優れていると言い換えられるだろう。

また、マスターの負担が大きいため連戦が予想される聖杯戦争では余り勧められないが、高ランクで保有している魔力放出スキルで短期決戦を挑むことも可能だろう。

後は、マスターとの相性のみである。

秘宝を集めるために世界中を旅をしていたメローラ。その旅路は一人旅であり、誰かと共に戦うことになっていないのではないだろうか。そんな不安が――

「――怖かったりはしませんか？」

「いや、大丈夫。後ろにライダーがいるし」

「それなら良いのですが……。実際に乗ってみてどうですか？」

「宝具に乗っているっていう緊張が凄い。膨大な神秘に気が遠くなりそう」

「……なるほど。神秘に触れるものらしい感想ですね」

「後は……。そうだね。普段と違う視線の高さなのに一体感がある。それに違和感を感じるけど、この景色をもう少し見てみたく感じる」

「――それなら良かった。」

しかし、思っていたよりも上手いですねアキラ。乗馬の経験があるのですか？それとも、この時代の人でも、日常的に馬に乗っているのですか？」

「現代人が馬に乗る事はまずないよ。単に、俺が乗馬経験があるだけ」

ライダーの象徴たる『馬』に乗る二人の姿。
後ろに乗っているライダーがマスターに乗馬を教えている。
文字通り、手取り足取り。
馬上で二人歓談している。

——そんな不安が吹き飛んだ。

正直、早く付き合ってしまったえば良いと思った。

一昨日の夕方、息子が帰って来た。

そして、その夜にサーヴァント——ライダーを召喚し、6人目の
マスターとなった。

帰省3日目の昼過ぎ。

場所は再び冬木市郊外——アインツベルンの森。

木々の切れ間、森の中の空地にて。

十一月の下旬。

寒風荒ぶ中、赤と青の主従は昨日に引き続き互いの強さを確認して
いる。

槍と双剣、体術と魔術。それらを軽く（と言っても二時間ほど）打
ち合い、その後はマスターによる援護の術について、弓と投影を利用
した実演を含めて互いの連携を確認する。

戦闘時の行動のうち、最低限、基本的なものを確認しないで、戦場
に向かうのは致命行為であることを二人は言われずとも分かっている。

また、戦闘時の行動を確認、検討することで、新たに礼装を作成す
る必要が出てくることなども当然ある。それ以前に、昨日の模擬戦で
調子に乗り、使い捨ての礼装を消費しすぎた、という理由もあるのだ
が。

肉体労働と頭脳労働を並行して行う事しばし。

正午過ぎに空腹で集中が切れそうになっていたので、既に頂点近くに昇っている太陽の下で用意していた昼食をコートから取り出した。その後、草むらに寝ころび歓談。

話の話題がどの様に推移したのかは今一つ定かではないが、徐にライダーが『騎馬』を召喚した。

至る現在、という訳である。

——心配して損した。

それ以外の感想は特でない。

『アーチャーは損をしたな』

後ろからの声。

聞きなれている、とは言え心臓に悪い。

『そうね。今ここに居たら、どんな反応するかしらね』

『さて。だが、少なくとも私たちに見られたくはあるまい』

『でしようね』

当事者には自覚は無いかも知れないが、傍から見ていると一目瞭然である。

岡目八目。況や、それがもう一人の自分なら尚更だろう。

——
×××
——
×××
——
×××
——
×××

——
×××
——

アサシンが生前立ち上げた組織の名前が由来となっており、生前の関係者をサーヴァントとして任意で召喚することが出来る。

人数に上限はなく、召喚されたサーヴァントは固有の宝具とそれぞれ個別のクラススキルとアサシンとしての気配遮断スキルを保有している。

破格の効果の宝具だが召喚できるのは、アサシンが出会った事があり、生年と没年の間が被った部分がある人物——例えば、アサシンが生前召喚したサーヴァントなどは不可——に限られる。

この性質から召喚できるのは現代人に限られる。

その上で、マスターには激しい魔力消費が課されることになる。

——この宝具で召喚したサーヴァントに独自の魔力供給方法がない場合は。

例えば、召喚したサーヴァントの中に第二魔法の一端の使い手が居た場合、などだ。

『——しかし、アーチャーか』

かつて私が召喚したサーヴァントを思い出す。

服が、肌が、髪が——。神霊の影法師の名を着せられた故に、記憶を含めた凡そ全てが白化した青年。

通常の聖杯戦争の形から大きく外れた聖杯戦争。

決戦の舞台に乗り込む直前——地上を遙か、雲の上。逆光の中で振り向いたその顔に、その背中に、自分が知っているはずのダレカの姿を見た。

——その時、私は彼の名を読んだ。

アーチャーは嬉し気に、満足げに笑った。

その笑顔を最後、彼は逆光の中に消えていった。

——しかし、参ったものだ。

自分が——連鎖召喚という形であれ——聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されて改めて実感したが——。

サーヴァントを聖遺物なしで召喚したした場合、呼ばれるのは縁があるものとなる。

そして、英霊の座に時間的概念は存在しない。

——成長と共に、自分が召喚したサーヴァントに似て来る。その絶望を知った。

幼い頃に留学先から帰って来た時。

私に黙って魔術刻印を移植した時。

そして昨日——長い旅から帰って来た時。

折あるごとに、成長と無事の喜びと共にその絶望を知った。

体内に聖遺物が封入されている影響で、老化——正確には精神と肉体、魂の経年劣化——の速さが鈍くなっている。

魔術的に優れた素養を持つことも有り、聖遺物が正しく作用しているのなら、髪や肌の色が大きく変質するはずは無い。

ならば——聖杯戦争に呼ばれた姿が全盛期になるためには、どの様な工程があったのだろうか。

それらの一切は全く分からない。

そもそも、他人の空似、という可能性もある。

だが、ただ一つだけ願うのならば——。

——彼の行く末に幸多からんことを。

彼が自身の結末に——人生に満足しているのならば、それ以上に望むものはないのだから——。

†

日が暮れかけ、疲れ果てて心身を引きずりながら帰路につく。

歩きなれた／久しぶりな道を通り、特徴的な武家屋敷が見えて来る。

角を曲がり——

「アキラ！」

——家の前で待っていた青年に、急に声を掛けられた。

「テツ？」

——中学時代の同級生。そのニックネーム。

なぜ此処に？

「いや、■■■せんせーに聞いたんだよ。アキラが帰って来てるって」

「寒い中待っていたのか？」

「交代でな」

「交代って——」

「せっかくだから、遊んで来いってさ」

「せんせー公認でなー。こずかいも貰ったし。ハルもチーちゃんもタケもヤツサンもいるから、飯でも食って、朝までカラオケでも行こうぜ。」

「——って、どうしたアキラ？」

「いや、何でもない」

「ただ、良い友人を持ったな、と思っただけだ。」

「まあ、いいや。みんな待ってるから早く——って、この金髪美女はだれ？」

「あ、何かデジャブ。」

宵闇の街——。

海外交流が盛んな冬木市でも目を引くような美しい金髪碧眼の女性。

一人で歩くには危ない時間ではあるが、清廉な気配が一切の穢れを掃っていた。

成人男性を同伴していれば、尚更ではあるが。

「大丈夫ですか。アキラ」

「だいじよぶ……」

調子に乗って飲み過ぎました。

酔いつぶれた男性に肩を貸している。

そんな状況であれば、どれほど女性が目を引く容姿をしていても、声を掛ける男はまずいないだろう。

面倒ごとに発展することを承知で声を掛けた、判断能力の欠如した者たちは、酔いつぶれた男が一瞬だけ発した殺気の中てられ、自分の行動が文字通り命知らずだったことを本能で理解させられた。

二時間飲み放題の一次会を終え、二次会の後、カラオケで朝まで三

次会。

精魂尽き果てた一行は、酔い覚ましと睡眠時間を求め、ファミレスの机を一つ占拠。

そんな中、帰りが遅い主を心配した忠実なる従者が魔力経路を辿り、迎えに来た。

——著しくはた迷惑である。

「済まないねライダー……」

「いえ、むしろ年相応で安心しました」

「そつか……何となく複雑だけど、まあいいか」

「そういうモノですからね」懐かしむように「男の子というのはそういうモノです」

「むう……ますます、複雑な感じ」

「サーヴァントの外見と体験した年月は一致しませんからね、そういう感情になるのも仕方ないかと」

「いや、そう言うんじゃない——と、思う」

「思う、ですか」

「そう、思う」何かを考えようとして「ダメだ、頭が回らない」

「そうですか」ふふ、と笑みが零れる「弟を思い出します」

「弟……弟かあ」ぼやけた思考の中で、その一言を反芻する。何か、何か引つかかる。

英霊の座。時空間が存在しない場所から召喚されるサーヴァントに通常の時間軸は適応されない。

今は頼りになる使い魔であり、同時に信頼し合う隣人として存在しているが、本来ならば文字通り手の届かない彼ら。

彼らに弟のように思われることは、別に可笑しいことではない。ないのだ。

だが、どこか引つかかる。

何処に、だ。

弟、弟……。

「弟、という有名なモードレッドかな？」

モードレッド。

アーサー王と共に死んだ、とされる忠義熱い騎士。

一説には主君たるアーサー王とその姉モルガンの子とされ、宮廷魔術師マーリンから円卓崩壊のきっかけになると予言された破滅の象徴。

後日、その予言は事実となるが、最後まで主にして父の側を離れなかったと伝えられている。

「モードレッドですか」少し、悩む素振りを見せ「彼は自分で騎士になることを選んだ。そんな誇り高い面を持っていました——」

目を閉じ、在りし日の姿を思い出し、語る。

物思いに耽るかのような。不思議と、その姿から目を逸らせない。

「——ですが、やんちゃな一面を持っていました——」

思い出し笑いをする。LEDぼ電灯が薄青く照らすその横顔に——

「——私にとって彼は自慢の、そして可愛い弟なのです」

満面の笑みでこちらを振り返る。その横顔に——

もう少しだけ、話を聞きたいと思うと同時に——

自分が聞きたかったことはモードレッドの事ではない、という事に何となく気がついた。

実際の戦場を潜り抜け、一瞬の判断が生死を分ける殺し合いを経験した。

そもそも魔術とは生と死が隣合わせであり、一般人とはぐり向けた経験が違う。

それでも、彼はまだ19歳の少年であった。

久しぶりに故郷に帰って来て、旧友と再会しハメを外して飲み食いをして朝まで遊ぶ。

むしろ、こういった人間関係に関しては、一般人よりも経験が浅いのかもれない。

正確には、魔術師という閉鎖的なコミュニティではない、普通の場での人間関係に疎い、と評するべきだろう。

『やれやれ、前途多難だな』

闇の中で、誰かが呟いた。

その誰か“たち”は、協力して二人を見守り続けていた。

対して、ライダーは気配を感じて警戒し／遠坂晶は存在を知り安心していた。

朝風の中、主従と“誰かたち”の視線は決して交わらない。

「ところでアキラ。彼らに渡したのは何ですか？」

「お土産だよ。幸運とか金運とかが上昇する効果と厄払いをするように細工したけどね」

「なるほど……。たしか、神秘は秘匿する物では？」

「しゃべっては無し、ばれないように作ったから大丈夫。それに、俺に関わった時点で危ないから、アイツらを人質にしようとした時点で相手が即死するくらいのお守り”を渡しても問題ないだろう」

「そうでしたか。それならば安心ですね」

『確かに、ケルト神話に因んだお土産と言って渡せば一般人にはバレないだろうから神秘の秘匿に関しては問題がない。』

対して魔術師ならば、即興で作ったはずのソレにどれ程の神秘が込められているかを知るだろう。“お守り”の呪いを突破できる魔術師は限られるだろうし——』

『——突破できる程の魔術師が来たのならば、私に分からない筈がない』

冬木市において、最も大きな霊脈に存在する建屋——柳洞寺を起点に、冬木市中に張られた結界を扱う神代の魔女は静かに微笑む。

彼らは、第九次聖杯戦争に向けて整えた準備を、更に盤石なものに

しようとしていた。